

市道男里北線改良事業に伴う
男里遺跡発掘調査報告書

泉南市文化財調査報告書 第三十七集

2002. 3

泉南市教育委員会

序 文

泉南市は大阪府南部に位置し、北西を大阪湾、南東を和泉山脈にかこまれ、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれた街です。このため、市内には先人たちの営みによって残された数多くの遺跡が存在しています。

今回、報告いたします男里遺跡は、市内において最大規模を誇る遺跡であり、古くは旧石器時代から近世にいたる数多くの遺構や遺物が確認され、泉州でも屈指の複合遺跡と評価されています。特に弥生時代中期には拠点集落として、周辺地域の代表的な集落であったことがわかっています。また、『日本書紀』に登場する「雄水門」、『延喜式』に登場する南海道の「噴駄駅」の存在も推定されており、当遺跡周辺が古来より海運・交通の要衝であったことがわかります。

今回の調査では、縄文時代から近世という非常に長い時代幅で、予想を超える多数の遺構や遺物が確認できました。これらの貴重な資料は当地域のみならず、泉州地域一帯の歴史研究にかけないデータとなることでしょう。

今後は、男里遺跡の内包する様々なデータをもととしまして、より一層の調査・研究を進めてゆく所存です。

文末ではございますが、調査に際し、ご協力、ご理解を頂きました近隣住民ならびに関係者の皆様に對しまして、厚く御礼申し上げますとともに、今後とも当市の文化財保護行政にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年3月

泉南市教育委員会
教育長 亀田 章道

例　　言

1. 本書は、市道男里北線改良事業に伴い、泉南市教育委員会が実施した男里遺跡発掘調査の報告書である。

2. 調査は泉南市教育委員会が泉南市事業部より依頼を受けて実施したもので、試掘調査及び発掘調査の担当は以下のとおりである。

　　試掘調査 担当者 石橋広和　　調査期間 平成8年3月

　　発掘調査 1次調査（A・B区）

　　担当者 岡 一彦　　調査期間 平成11年1月から同年3月

　　2次調査（C・D区）

　　担当者 岡 一彦　　調査期間 平成11年12月から平成12年3月

　　3次調査（E区）

　　担当者 河田泰之　　調査期間 平成12年7月

3. 調査の実施にあたっては、調査地に隣接する土地所有者をはじめ、男里地区住民の方々から、格別なご協力・ご配慮を頂いた。また、現地調査及び整理の過程では、下記の方々から有益なご教示を頂いた。記して感謝の意を表します。（敬称略）

　　堅田直・芝野主之助・大野薰・西口陽一（大阪府教育委員会）・鈴木陽一・中岡勝・貝川克士（泉佐野市教育委員会）・岡本武司（松原市教育委員会）・山田幸弘（藤井寺市教育委員会）

4. 調査及び整理の実施にあたっては、下記の方々に協力を得た。

　　江尻美代子・奥田桂・片木直幸・蒲生徹幸・藤田弘幸・島津真理・竹中智子・玉置由紀・富愛・福井元気・藤野莎・真鍋紀美子・向林智与

5. 遺構写真撮影は、各担当者が行い、遺物写真撮影は河田が行った。

6. 本書の執筆は、第1章1・2節、第2～5章、第7章が岡、その他は河田が行った。

7. 本書の編集は、岡が行った。

8. 調査における出土遺物及び図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを望むものである。

凡　　例

1. 遺物実測図は1/2、1/4とし、遺構配置図や遺構断面図などは適時縮尺を変えている。また、遺物実測図と写真図版の図版番号は一致する。

2. 本書で扱う標高はT.P.（東京湾平均海水位）とし、記載の際はT.P.+の記号を省略している。

3. 遺構番号は各調査区ごとに1面から順に通し番号を付している。

4. 遺構名称は、SB-掘立柱建物、SH-堅穴住居、SD-溝、SK-土坑、SE-井戸、Pit-柱穴、SX-不明遺構としている。なお、堅穴住居内の遺構には土坑、ピット等の後に遺構番号を付している。

5. 遺物実測図の断面は、須恵器-黒塗り、縄文土器・弥生上器・土師器・陶磁器-白抜き、黒色土器・瓦器・瓦質土器・石製品・石材・トーンのように塗り分けている。

6. 遺構配置図及び遺構平面図には、国土座標VI系にもとづく座標を記載しており、図上の方位は座標北を示す。

目 次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 既往の調査	2
第4節 層序	4
第2章 A区の調査	7
第1節 基本層序	7
第2節 1面の遺構と遺物	8
第3節 2面の遺構と遺物	9
第3章 B区の調査	11
第1節 基本層序	11
第2節 1・2面の遺構と遺物	11
第4章 C区の調査	18
第1節 基本層序	18
第2節 1・2面の遺構と遺物	19
第3節 3面の遺構と遺物	19
第5章 D区の調査	23
第1節 基本層序	23
第2節 1・2面の遺構と遺物	28
第3節 3面の遺構と遺物	29
第4節 4面の遺構と遺物	32
第6章 E区の調査	43
第1節 基本層序	43
第2節 2面の遺構と遺物	45
第3節 3面の遺構と遺物	46
第7章 まとめ	58
報告書抄録	卷末

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 主な調査成果と本調査区の位置	2
第3図 調査区の層序	4
第4図 A区1・2面平面図及び調査区断面図	7
第5図 A区包含層出土遺物	8
第6図 A区1面SB01平面図及び断面図	8

第7図	A区2面SE01平面図及び断面図	9
第8図	A区2面SE01出土遺物	10
第9図	B区包含層出土遺物	11
第10図	B区1・2面平面図及び調査区断面図	12
第11図	B区2面SB01平面図及び断面図	13
第12図	B区2面SH01出土遺物	13
第13図	B区2面SH01平面図及び断面図	14
第14図	B区2面窯平面図及び断面図	15
第15図	B区2面SK01・02平面図及び断面図	16
第16図	B区2面SK03平面図及び断面図	17
第17図	C区1・2面平面図	18
第18図	C区2面SD12平面図	19
第19図	C区3面SB01平面図及び断面図	19
第20図	C区3面平面図及び調査区断面図	20
第21図	C区3面SK14平面図及び断面図	20
第22図	C区3面SK01・02平面図及び断面図	21
第23図	C区3面SK01・02・14・15・19・SD12出土遺物	22
第24図	D区包含層出土遺物	23
第25図	D区1面平面図	24
第26図	D区2面平面図	25
第27図	D区3面平面図	26
第28図	D区4面平面図及び調査区断面図	27
第29図	D区1面SK01	28
第30図	D区3面SK07・08平面図及び断面図	28
第31図	D区3面SK07・08・19出土遺物	29
第32図	D区3面SK10平面図及び断面図	29
第33図	D区3面SK10出土遺物	30
第34図	D区3面SK19平面図及び断面図	31
第35図	D区3面SK20平面図及び断面図	31
第36図	D区3面SX01・02出土遺物	32
第37図	D区4面SB01・02・03平面図及び断面図	33
第38図	D区4面SB04・05平面図及び断面図	34
第39図	D区4面SB06～11平面図及び断面図	35
第40図	D区4面SB01・04～06・08・09・12・13・15出土遺物	36
第41図	D区4面SB12～15平面図及び断面図	37
第42図	D区4面Pit12・13・66出土遺物	38
第43図	D区4面SH01出土遺物①	38
第44図	D区4面SH01平面図及び断面図	39
第45図	D区4面SH01出土遺物②	40

第46図	D区4面SK21平面図及び断面図	41
第47図	D区4面SK23平面図及び断面図	41
第48図	D区4面SK21・23出土遺物	42
第49図	E区包含層出土遺物	43
第50図	E区2・3面平面図	44
第51図	E区3面谷1平面図及び調査区断面図	45
第52図	E区3面SH01平面図及び断面図	46
第53図	E区3面SX03平面図及び断面図	46
第54図	E区3面SX04平面図及び断面図	47
第55図	E区3面SX03・04出土遺物	47
第56図	E区3面谷1平面図及び断面図	48
第57図	E区3面谷1 1～3層出土遺物①	49
第58図	E区3面谷1 1～3層出土遺物②	50
第59図	E区3面谷1 4・5層出土遺物①	52
第60図	E区3面谷1 4・5層出土遺物②	53
第61図	E区3面谷1 4・5層出土遺物③	54
第62図	E区3面谷1 4・5層出土遺物④	55

表 目 次

第1表	主な調査成果	3
-----	--------	---

図 版 目 次

- PL.1 A区①
- PL.2 A区②
- PL.3 B区①
- PL.4 B区②
- PL.5 B区③
- PL.6 C区①
- PL.7 C区②
- PL.8 C区③
- PL.9 D区①
- PL.10 D区②
- PL.11 D区③
- PL.12 D区④
- PL.13 D区⑤
- PL.14 E区①
- PL.15 E区②

- PL.16 A区出土遺物
- PL.17 B・C区出土遺物
- PL.18 D区出土遺物①
- PL.19 D区出土遺物②
- PL.20 D区出土遺物③
- PL.21 D区出土遺物④
- PL.22 D区出土遺物⑤
- PL.23 D区出土遺物⑥
- PL.24 D区出土遺物⑦
- PL.25 E区出土遺物①
- PL.26 E区出土遺物②

男里遺跡発掘調査報告書

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯（第1図）

泉南市は大阪府の南部、泉南地域に位置する。近年、関西空港の開港に前後して、大小様々な開発が数多く行われておらず、ベットタウンとして住宅都市化が急速にすんでいた。その一方、市内には旧村の面影を残す集落が多く存在しており、豊かな生活環境を望む住民のニーズに応えるため、道路などの交通網の整備や下水道の普及などが重要な課題であった。市内北西部に位置する男里集落においても、下水道の設置とともに、道路幅員の狭さなどから災害時における緊急車両の通行に支障をきたすことが懸念されていた。

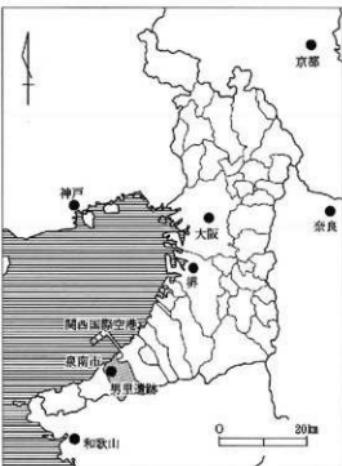
このような状況を鑑み、集落北側において市道新設が計画されることになった。この道路予定地が男里遺跡内に位置することから、埋蔵文化財の取り扱いに関して泉南市事業部と教育委員会の間で数度の協議がもたれ、遺構の有無を確認するための事前試掘調査を平成8年に行なった。この結果、予定地の約1/3の範囲で遺構・遺物包含層の存在が確認された。

この成果をもとに、泉南市事業部と教育委員会の間で再度協議がなされ、遺構・遺物包含層の存在する範囲において本調査が必要との判断に至った。しかし、この時点で道路予定地内に用地問題が未解決な部分が存在していたことから、問題が解決後、本調査に並行してその部分の試掘調査を行うこととなった。

発掘調査は平成10年度から開始し、3カ年にわたって計5カ所の地区を設定して行った。また、発掘調査の整理作業は、現場作業と並行して行い、本書の刊行に至っている。

第2節 調査の方法（第3図）

調査地の現況は、水田・畑地・休耕田などの農地であったため、発掘調査の支障となる建物等は存在しなかつたが、道路の計画が現在の里道に沿ったものとなっており、屈曲した部分などが多いために、調査区全体の見通しの悪い部分が多くあった。調査区の設定は、予定地南側の道路から順に農地の区画を基準としてA区、B区とした。各年度の調査区は、平成10年度がA・B区、平成11年度がC・D区、平成12年度がE区である。なお、平成10年度にはD地区、平成11年度にはE地区の試掘調査を行い、次年度の発掘調査の判断材料としている。発掘調査は、調査対象となった範囲のうち、里道と木路及び井戸を除いた部分とした。掘削は、試掘調査の成果から、現代耕作土層をバックホーにより掘削し、包含層である旧耕作土層の一部及び遺構を人力掘削した。

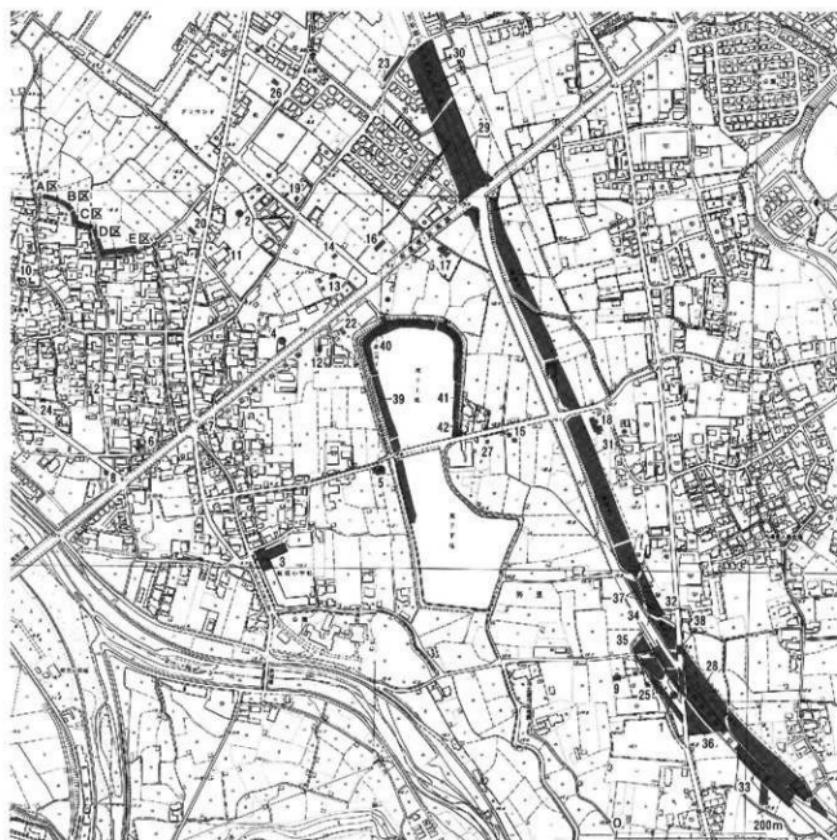


第1図 遺跡の位置

調査成果の記録にあたっては、トータルステーションを用いた遺跡測量システムを使用した。方位は国土座標 VI系にもとづく座標北、水準は東京湾標準潮位（T.P.）を使用している。

第3節 既往の調査（第2図、第1表）

男里遺跡における既往の調査のうち、近世以降と表探遺物を除く主な成果をまとめたものが第2図及び第1表である。遺跡内における遺構分布の傾向は、縄文時代のものは北西部に、弥生時代は南東部に位置する。古墳時代の遺構は後期のものが散見される程度で、飛鳥・奈良時代のものは双子池を挟んで東部と西部に分布している。中世以降の遺構は、耕作痕などの生産遺構は北東部に、掘立柱建物などの集落に関連する遺構は、現在の男里集落内などで確認されている。周辺遺跡や個々の調査例について、表にあげた文献を参照されたい。



第2図 主な調査成果と本調査区の位置

第1表 主な調査成果

番号	地区	遺構	主な遺物	時代	文献	番号	地区	遺構	主な遺物	時代	文献
1	1	-	弥生土器	弥生時代Ⅰ期	11	28	堅穴住居	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	24	
2	II Ⅲ Ⅳ	瓦器	瓦器	中世	11	29	掘立柱建物	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	21	
3	53-5	溝	閑文土器	閑文時代後期	-	30	耕作痕	土器器・黒色土器A類・真断面	平安時代末	23	
4	54-5	小石室	-	-	18	31	土坑	土器・粘土器・土器B器・青磁・鐵・鉛・土器・鉛器・鉛	平安時代末	23	
	77-1	掘立柱建物	須恵器・土師器・黒色土器A類	奈良時代・平安時代	1	32	耕作痕	-	室町時代	23	
5	77-1	土坑	須恵器・土師器・綠釉	平安時代	1	33	方形周溝	?	弥生時代Ⅲ-N期	24	
	77-1	溝	瓦器	中世	1	34	流路	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	24	
6	80-1	掘立柱建物	須恵器・土師器・丸器	中世	2	35	堅穴住居	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	24	
	80-1	溝	丸器	中世	3	36	掘立柱建物	黒色土器・丸器・土師器	平安時代末-鎌倉時代	24	
7	81-2	溝	土師器	中世	3	37	銀杏町	焼土塊・鐵造削片・ワイゴリ口・スラグ	平安時代末-鎌倉時代	24	
8	81-3	溝	瓦器	中世	3	38	土坑	黒色土器・瓦器・土師器・黄土塊・中國製磁器	平安時代末-鎌倉時代	24	
9	83-6	堅穴住居	弥生土器	弥生時代	4	39	方形周溝	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	24	
10	88-1	土坑窓	丸器・土師器・真断面	中世	6	40	堅穴住居	弥生土器	弥生時代N期	24	
11	89-6	流路	須恵器	古代	7	41	掘立柱建物	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	24	
12	90-8	溝	土器	中世	8	42	井戸	軒瓦・道具瓦	平安時代後期-室町時代	24	
	92-1	溝	須恵器・土師器	古墳時代中期	9	43	溝	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	24	
13	92-1	溝	須恵器・土師器	中世	9	44	溝	軒瓦・道具瓦	平安時代後期-室町時代	24	
	92-1	流路	土器器・弥生土器	弥生時代中期-古墳時代前期	9	45	堅穴住居	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	24	
14	92-3	流路	土師器・弥生土器	弥生時代以降	9	46	溝	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	24	
15	93-8	耕作痕	-	中世-近世	10	47	溝	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	24	
16	95-1	包含層	閑文土器	閑文時代後期	12	48	木棺墓	?	弥生時代中期	22-29	
	95-1	ヒット	閑文土器	閑文時代後期	12	49	流路	弥生土器・土師器・製塙土器・井戸式甕・布留式甕	弥生時代末-古墳時代初期	19	
17	95-2	掘立柱建物	黒色土器A類	平安時代	12	50	流路	須恵器・土師器・木製品・施錠体	飛鳥時代-奈良時代	19	
	96-1	堅穴住居	土師器	飛鳥時代	13	51	溝	弥生土器・土師器・製塙土器・井戸式甕・布留式甕	飛鳥時代末-古墳時代初期	20	
18	96-1	掘立柱建物	須恵器・土師器	飛鳥時代	13	52	須恵器・土師器・木製品・施錠体	飛鳥時代	20		
	96-1	土坑	土器器・須恵器・製塙土器・動物遺体・スラグ・焦土	飛鳥時代	13	53	流路	土師器・須恵器	飛鳥時代	20	
19	96-7	流路	閑文土器	閑文時代後期	13	54	しがらみ	土師器・須恵器	飛鳥時代	20	
	96-18	土坑	弥生土器	弥生時代	14	55	流路	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	21	
20	97-1	溝	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	14	56	流路	弥生土器・製塙土器	弥生時代Ⅲ-N期	21	
21	97-1	溝	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	14	57	掘立柱建物	弥生土器	弥生時代末	22	
22	97-4	流路	弥生土器・土器	須恵器・須恵器	14						
23	97-7	溝	土器	奈良時代	15						
24	98-8	流路	弥生土器	弥生時代	16						
25	99-3	流路	弥生土器	弥生時代Ⅲ-N期	16						
26	99-9	流路	閑文土器	閑文後期-後期	17						
27	00-1	土坑	弥生土器	弥生時代末	17						

第4節 層序（第3図）

各調査区の遺構面及び地山など、層位を柱状図化し、それらのレベル関係をあらわしたのが、第3図である。ここでは各調査区の基本層序を概観し調査区相互の関連性についてみてみたい。

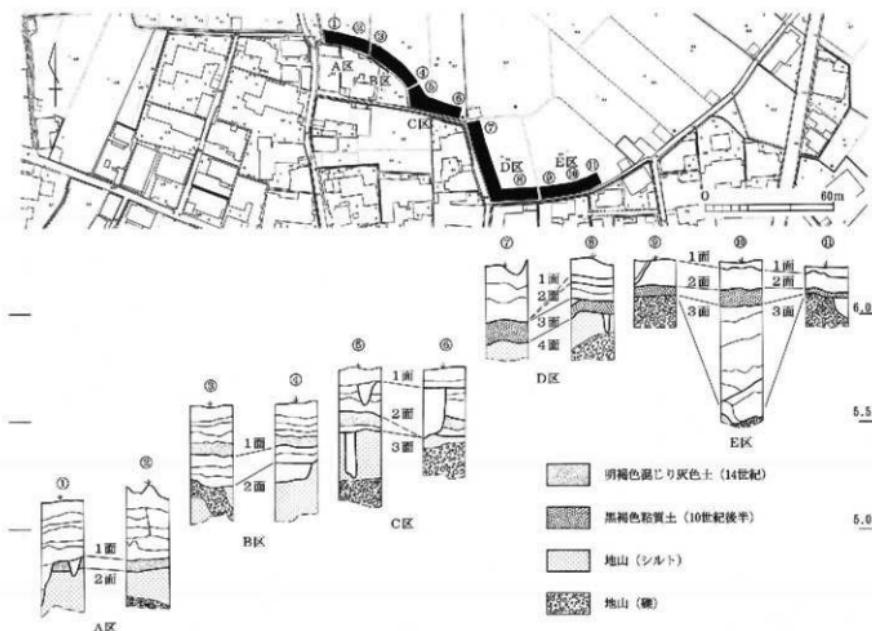
A区 1面は地山直上の灰色混じり暗黄褐色土をベースとし、近世から近代の遺構を検出した。2面は地山である灰色混じり明黄褐色土をベースとし13世紀～14世紀の遺構を検出した。

包含層では、1面直上の明褐色混じり灰色土、2面直上の明褐色混じり灰色土で、いずれも14世紀頃の遺物が出土している。後述する調査成果、なかでも各遺構面の年代と直上包含層の出土遺物を対比させると、1面の遺構と直上包含層出土の遺物は年代的に一致せず、1面のベース層より上層は近世以降といえる。

B区 1面は明～暗褐色土をベースとし13世紀中頃～後半の遺構を検出した。このベース層は調査区の東側（柱状図③）と西側（柱状図④）では層位が異なる。2面では13世紀初頭及び5世紀末～6世紀初頭の遺構を検出した。検出面は地山上面で、調査区の東側（柱状図③）では暗褐色砂砾、西側（柱状図④）では暗褐色土である。

1面の直上包含層である明褐色混じり灰色土は、出土遺物から14世紀頃に位置づけられる。

C区 1面では近世から近代の遺構を検出した。調査区の東側（柱状図⑤）では黄褐色混じり灰色土、西側



第3図 調査区の層序

(柱状図⑥)では灰色混じり黄褐色土をベースとする。調査区の中央部付近(柱状図⑥)では1面の遺構による影響のため、2・3面の遺構は遺存していない。2面では耕作痕などの遺構を検出した。調査区全体にはほぼ堆積する、明黄褐色混じり灰色土をベースとする遺構面で、遺構からの出土遺物もなく、直上及び直下の土層からも遺物は出土しなかったため、年代は不明。ただし、2面のベースとなる明黄褐色混じり灰色土が、A・B区で確認された14世紀代の包含層と同一の層位であることから、14世紀以降近世までの年代が想定できる。3面では13世紀初頭の遺構を検出した。地山である暗褐色土をベースとする。

明確な年代を示す包含層は確認されなかったものの、A・B区で確認された14世紀代の明褐色混じり灰色土は本調査区にもみられ、各遺構面の年代と対照しても矛盾はない。このことから、上記の包含層は本調査区まで及ぶと想定したい。

D区 1面では近世から近代の遺構を検出した。褐色混じり暗灰色土をベースとする。調査区の東側(柱状図⑦)では、1面の遺構により2・3面の遺構面が遺存していない。2面では近世の遺構を検出した。灰色混じり暗黃褐色土をベースとする。3面では13世紀中頃から後半の遺構を検出した。地山直上の淡黒褐色粘質土をベースとする。4面では6世紀代及び10世紀の遺構を検出した。地山である暗黃褐色土をベースとする。

包含層は各層の出土遺物から、2層のベースである灰色混じり暗黃褐色土が14世紀頃、3面直上の明黄褐色ブロック混じり灰色土で10世紀代、4面上面の淡黒褐色粘質土及び黒褐色粘質土が10世紀代である。4面検出の遺構は10世紀代以前、直上包含層である淡黒褐色粘質土及び黒褐色粘質土は10世紀代の包含層であり、両者の関係には矛盾はないが、その他の包含層と各遺構面の年代とは一致しない。後世の耕作などの影響を受けた結果と想定される。

E区 1面では近世から近代の遺構を検出した。黄橙色シルトをベースとする。2面では10世紀後半以降、14世紀以前の遺構を検出した。黒褐色シルトをベースとする。3面では縄文時代晚期、弥生時代中期前葉、6世紀後半、10世紀代の遺構を検出した。調査区西側(柱状図⑨)では灰色粗砂混じり疊、同じく東側(柱状図⑪)では明褐灰色粗砂混じり疊をベースとする。いずれも地山である。

包含層は各層の出土遺物から、1面のベースで2面直上の黄橙色シルトが14世紀、3面直上の黒褐色シルトが10世紀後半となる。

以上、検出した遺構面は、近世から近代、近世、鎌倉時代、平安時代末、古墳時代後期、弥生時代中期前葉、縄文時代晚期のものである。その分布は、近世及び近代、鎌倉時代の遺構は各調査区において普遍的にみられるものの、古墳時代後期以前の遺構はD区及びE区に限られることから、時代が下るにつれて北西方向に土地利用の範囲が拡大していったことがわかる。

各調査区の状況から今回報告する調査区の層序について特徴をあげてみたい。同一年代の包含層もしくは遺構面が把握できるものとして、調査区間で一定の広がりをもつ層位が2つあげられる。ひとつは、D区3面及びE区2面のベースとなる黒褐色粘質土。もうひとつは、A区2面及びB区1面の直上、C区2面のベースとなる明黄褐色混じり灰色土である。黒褐色粘質土は10世紀後半代、明黄褐色混じり灰色土は14世紀代の包含層で、ひとつの基準となる。しかし、これ以外の層位は多様性に富み各調査区間での対応関係の把握が困難となる。

現況は耕作地であり南東から北西に段状にレベルをさげつつ区画されている。次章以下に報告する各調査区の包含層をみれば明らかだが、時期的に限定される包含層及び遺構面は一部に限られる。各調査区の断面でみられる近世以降の数cm単位の薄い堆積は、耕作にともなうものと考えられ、地山直上にまで及ぶ箇所もある。

つまり、調査区周辺は、近世以降の耕作地化など人為的な影響をかなり受けていることが想定できる。北西端（柱状図①）南東端（柱状図②）では比高差が1m程度にもかかわらず、各調査区間の七層に多様性がみられる—因といえよう。

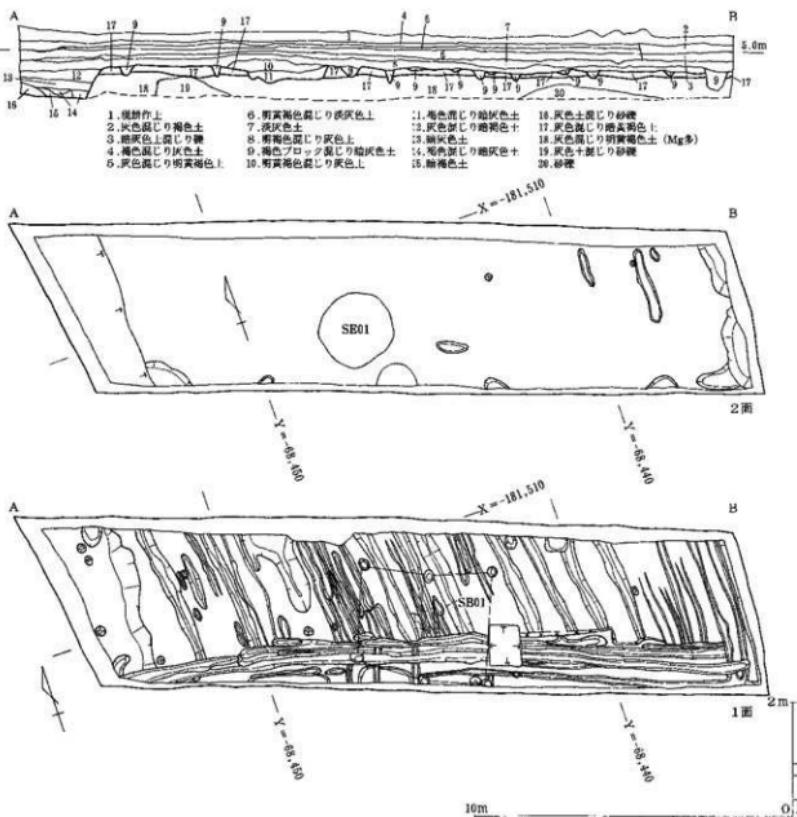
表1 文献

- 1 泉南市教育委員会1978『男里遺跡発掘調査報告書』
- 2 泉南市教育委員会1981『男里遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
- 3 泉南市教育委員会1982『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 4 泉南市教育委員会1984『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』
- 5 泉南市教育委員会1986『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』
- 6 泉南市教育委員会1989『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』
- 7 泉南市教育委員会1990『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅵ』
- 8 泉南市教育委員会1992『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』
- 9 泉南市教育委員会1993『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅷ』
- 10 泉南市教育委員会1995『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅨⅡ』
- 11 泉南市教育委員会1995『泉南市文化財年報Ⅰ』
- 12 泉南市教育委員会1996『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅢ』
- 13 泉南市教育委員会1997『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅪⅣ』
- 14 泉南市教育委員会1998『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅫⅤ』
- 15 泉南市教育委員会1999『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅬⅥ』
- 16 泉南市教育委員会2000『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅭⅦ』
- 17 泉南市教育委員会2001『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅮⅧ』
- 18 泉南市史編纂委員会1987『泉南市史通史編』
- 19 大阪府教育委員会1997『男里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』
- 20 大阪府教育委員会1997『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』
- 21 大阪府教育委員会1999『男里遺跡発掘調査概要・Ⅲ』
- 22 大阪府教育委員会2000『男里遺跡発掘調査概要・Ⅴ』
- 23 健大阪府埋蔵文化財協会1994『男里遺跡』
- 24 健大阪府文化財調査研究センター2001『男里遺跡発掘調査資料集』

第2章 A区の調査

第1節 基本層序 (第4図)

今回の調査でもっとも西側に設定した調査区である。現況は休耕作地となっており、地表面の標高は5.3m前後である。層序は、第1層・耕作土（層厚0.1~0.23m）、第2層・褐色混じり灰色土（層厚0.03~0.2m）、第3層・灰色混じり明黄褐色土（層厚約0.1m）で調査区西側では確認されない。第4層・明黄褐色混じり淡灰色土（層厚0.06~0.18m）、第5層・淡灰色土（層厚0.04~0.18m）、第6層・明褐色混じり灰色土（層厚0.1~0.18m）、第7層・灰色混じり暗黃褐色土（層厚0.1~0.2m）、第8層が灰色混じり明黄褐色土である。それぞれの層はほぼ水平に堆積しているが、第3・5層は調査区の西側にむかって徐々に薄くなり、確認され



第4図 A区1・2面平面図及び調査区断面図

ない部分もある。

第7層(1面)と第8層(2面)の上面で遺構を検出した。1面の標高は4.7m前後、2面が約4.6mである。

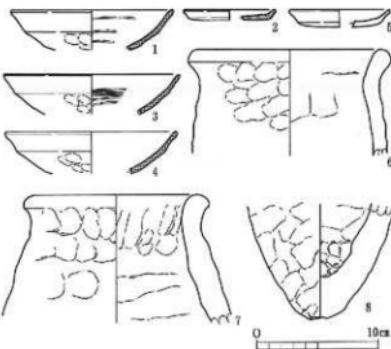
包含層出土遺物(第5図)

瓦器や蛸壺などが出土している。

第6層からは瓦器が出土している。1は瓦器碗である。外面下部はユビオサエ、内面は粗雑なヘラミガキ調整がほどこされる。2は瓦器皿。口縁部は平らな底部から斜め上方にのびる。

第7層からは瓦器・土師器・蛸壺が出土している。

3・4は瓦器碗。口縁部にやや強めのナデ、外面下部はユビオサエ、3の内面にはヘラミガキがほどこされる。5は土師器の皿である。口縁部は斜め上方にのび、端部は丸くおさめる。全体にナデ調整の後、口縁部をヨコナデで仕上げている。胎土にクサリレキを少量含む。6～8は蛸壺である。やや直線的に立ち上がり、口縁部が外反するもの(6)と内湾ぎみに立ち上がるるもの(7)がある。内外面ともにユビオサエで調整されている。



第5図 A区包含層出土遺物

第2節 1面の遺構と遺物

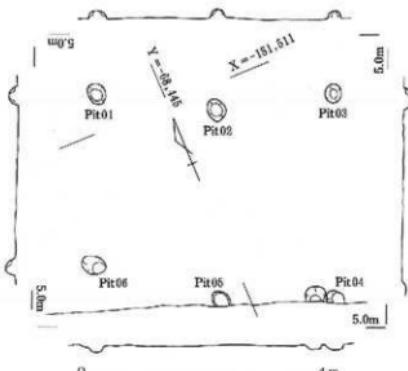
検出した遺構は、掘立柱建物が1棟、ピット、多数の溝などである。

溝は烟の歯筋と考えられるもので、南北方向の主軸をもつものと、調査区南側の北東-南西方向にのびるものの2群が認められる。切り合い関係から南北方向のものが古い。埋土はそれぞれ褐色ブロック混じり暗灰色土で、幅は0.2m前後、深さは0.3～0.15m程度の浅いものがほとんどを占める。

煙として利用されていた年代は、遺構からの遺物が出土しないため明確には判断できないが、近世以降と考えられる。また、歯筋の方向は、調査以前に調査区における土地で行われていた煙の歯筋と方向が同じであり、当時から土地利用の状況が変化なく続いていると考えられる。

SB01(第4・6図、PL. 1)

調査区のはば中央で検出した掘立柱建物である。桁行2間(3.9m)、梁行1間(2.8m)の小規模なもので、桁行の方位はN-58°-Wを指す。



第6図 A区1面SB01平面図及び断面図

桁行の柱間はそれぞれ1.9m前後である。ピットは円形や梢円形を呈し、その規模は径0.24~0.4m、深さ0.08~0.25mを測る。埋土は明褐色混じり灰色上で、いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

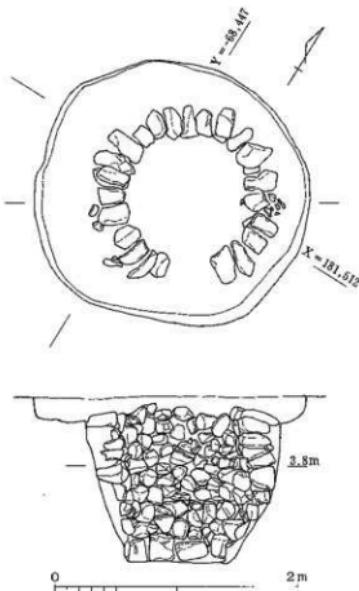
第3節 2面の遺構と遺物

8層をベースとして、井戸・土坑、溝などを検出した。

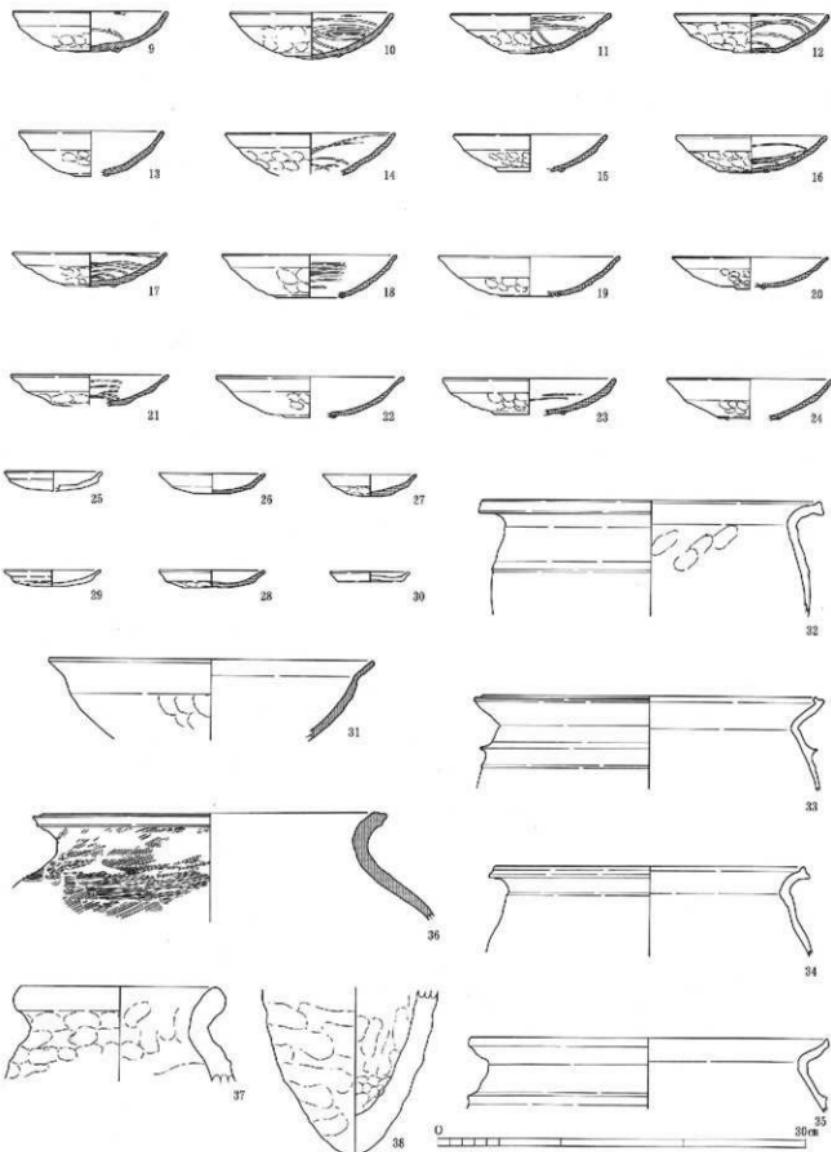
SE01(第4・7・8図、PL. 2・16)

円形を呈する掘形に、石組み円形の井側を設けた井戸である。掘形の長径2.3m、短径2.1m、深さ1.36mを測る。掘形は下方に向かって緩やかに径を減じている。石組みの石材には長軸0.25m、短軸0.15m程度の梢円形の河原石を用いて順次円形に積み上げているが、基底部にはやや大きめの石材を一段組んでいる。埋土は1面のベース層である灰色混じり暗黄褐色土で、基底部近くでは灰色粘土が堆積している。埋土からは瓦器や土師質土器などの遺物が大量に出土した。

9~24は瓦器碗である。口縁部は緩やかに内湾して上方にのび、端部は丸くおさめる。内面はヘラミガキがほどこされるものもあるが非常に粗雑である。口縁部外面はユビオサエの後ナデ調整。底部には退化した断面三角形の高台を貼り付けている。口径11.5~15cm、器高2.5~3.8cmを測る。26~28は瓦器皿である。27は他に比べてやや厚手につくられている。31は瓦器鍋である。なだらかに立ち上がる体部をもち、口縁部は外方に屈曲させ、端部には面をもつ。25・29・30は土師器皿である。いずれも外上方へ開く体部をもつ。30はやや浅いつくりである。32~35は土師質土釜である。いずれも紀伊系のものである。32は口縁部を大きく外反させ、端部外側に面をもつ。鍋はほとんど退化し、痕跡状のものが残る。33は口縁を「く」の字状に外反させ、端部を内側につまみ上げる。体部には明瞭な鋲をつける。34は口縁端部を上方につまみ上げることにより、外面に面をもたせている。35はやや寝かせ気味の口縁部をもち、口縁端部は上方につまみ上げている。36は瓦質甕。体部外面はタタキの後、ナデ調整をほどこす。37・38は婧壺である。37は外上方に屈曲させた口縁部をもつ。38は尖底部分である。ともに砲弾型を呈するものと考えられる。遺物は全体的に時期幅はあるものの、およそ14世紀の所産と考えられる。



第7図 A区2面SE01平面図及び断面図



第8図 A区2面SE01出土遺物

第3章 B区の調査

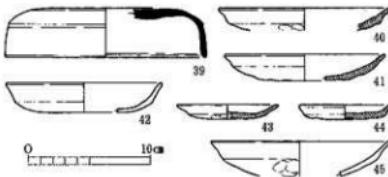
第1節 基本層序（第10図）

B区は、A区東側に位置し、緩やかに南方向に弧をえぐる調査区である。調査前までは畠地として利用されていた。現地表面の標高は、約5.8mである。層序は、第1層・耕作土（層厚0.08~0.2m）、第2層・褐色混じり灰色土（層厚0.03~0.15m）、第3層・暗黄褐色土（層厚0.02~0.15m）、第4層・暗灰色土（層厚約0.1m）、第5層・暗灰色混じり黄褐色土（層厚0.08~0.15m）、第6層・暗褐色混じり灰色土（層厚0.05~0.1m）、第7層・淡灰色混じり明褐色土（層厚約0.13m）、第8層・暗灰色混じり暗褐色土（層厚0.04~0.15m）、第9層・明褐色混じり灰色土（層厚約0.1m）、第10層・暗褐色混じり暗灰色土（層厚約0.1m）、第11層・暗褐色土、第12層・暗褐色砂砾である。各層は概ね水平に堆積しているが、調査区の西側から東側にむかってその堆積が全体的に薄くなる傾向にある。これは山地形の影響を少なからずうけているためと考えられる。

造構は、第7層及び第8層の上面（1面）、第11層及び第12層の上面（2面）で検出した。造構面の標高は1面が5.4m前後、2面が5.1~5.2mである。

包含層出土遺物（第9図）

須恵器・瓦器・土師器などが第6層から出土している。39は須恵器杯蓋である。天井部は低く、比較的平らである。口縁端部の内側にわずかに凹線が認められる。40・41は瓦器である。焼成が悪く淡灰色を呈する。口縁部にはやや強くナデ調整される。43・44は瓦器皿。口縁部の立ち上がりが緩いもの（43）と斜め上方にのびるもの（44）がある。42・45は土師器。45は焼成不良の瓦器の可能性がある。



第9図 B区包含層出土遺物

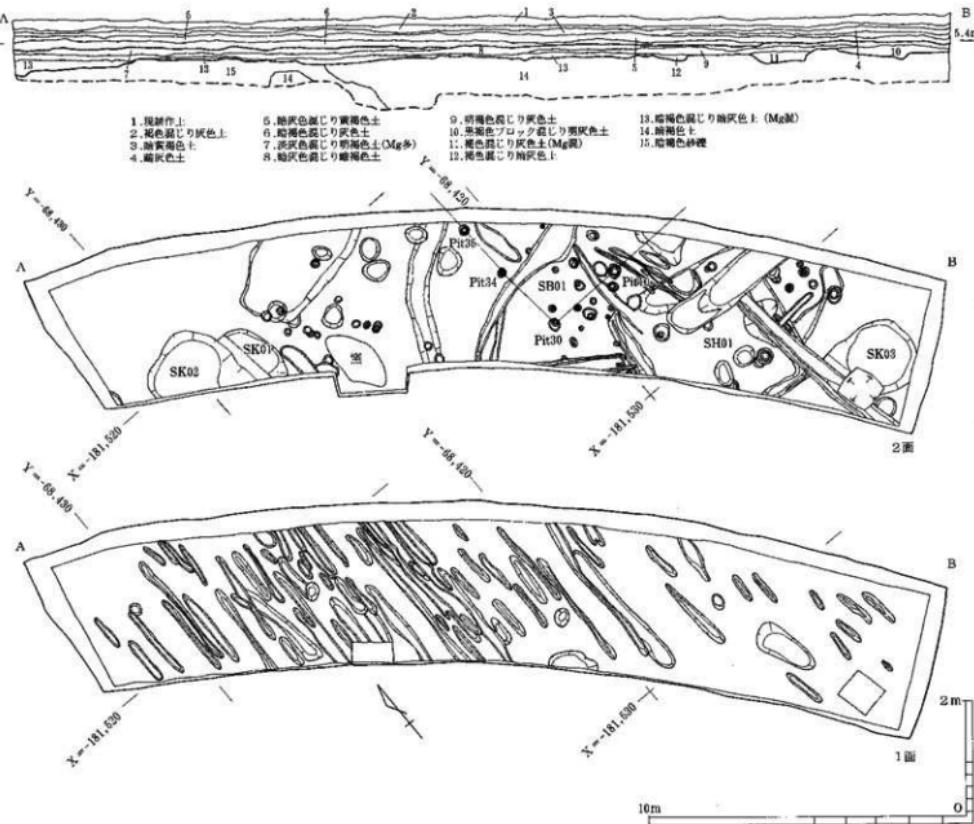
第2節 1・2面の造構と遺物

1面では調査区中央から西部にかけて第7層、東部では第8層をベースにして、多数の溝などを検出した。溝は耕作痕と考えられるもので、主軸を南北方向にもち、長さ0.2~5m、幅0.1~0.2m、深さ0.05m前後を測り、埋土はすべて灰色土である。調査区の西部から中央部にかけて密に検出されるが、東部ではやや少なくなる傾向にある。あるいは土地の利用状況が異なっていたのかもしれない。時期的には、埋土から遺物が出土しないために明らかではないが、第6層出土の土器から13世紀後半と考えて大過ないものと推測される。

2面では、第11層・第12層上面で掘立柱建物・竪穴住居・窯・土坑などを検出した。時期的に古墳時代と中世の所産となる遺構に分けられるが、中世の遺構は概して浅いものが多く、後世に大きく削平されたと考えられる。

SB01（第10・11図、PL. 3）

調査区中央付近で検出した掘立柱建物である。調査区外にのびるために全体の規模は明らかではない。確認した規模は南柱列が1間、西柱列が2間である。柱間は南柱列が2.4m、西柱列が南から2.16m、1.76mである。



第10図 B区1・2面平面図及び調査区断面図

西柱列の方位は北を示す。ピットは径0.24~0.44mのほぼ円形を呈し、柱痕跡は0.16~0.22m、深さは0.14~0.22mを測り、北側のピットほど浅くなっている。掘形の埋土はすべて暗褐色混じり暗灰色土、柱痕跡は暗灰色土である。遺物は出土していない。

SH01 (第10・12・13図、PL. 3・4)

調査区の東部で検出した堅穴住居である。西側の一部が調査区外にひろがる。規模は東西約4.8m・南北約4.7mのほぼ正方形を呈し、主軸方向をN 10° -Eに向ける。検出面から床面までの深さは0.12~0.2mで、北辺中央部に造り付けカマドが設けられている。

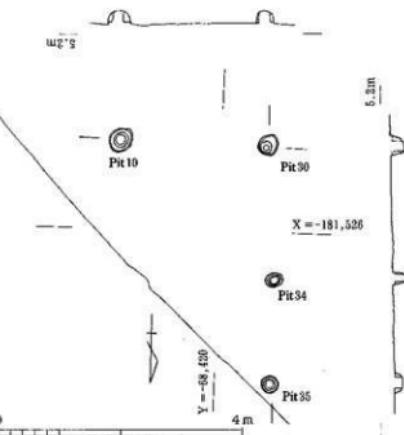
住居内の柱穴は、掘形の径0.5m前後、深さ0.3~0.38m、柱痕0.2~0.3mを測るものを3ヵ所検出したが、

復原すると4本柱と考えられる。柱間は約2.2mを測る。壁溝は住居内全体は巡ららず、南東コーナーから南辺にのびるものと西辺において幅0.22~0.36m、深さ0.1m前後を測るものが認められる。また、埋土は黒褐色粘質土で、住居内全体に黒褐色ブロック混じり明黄褐色土の貼床が約0.1mの厚さで確認できた。

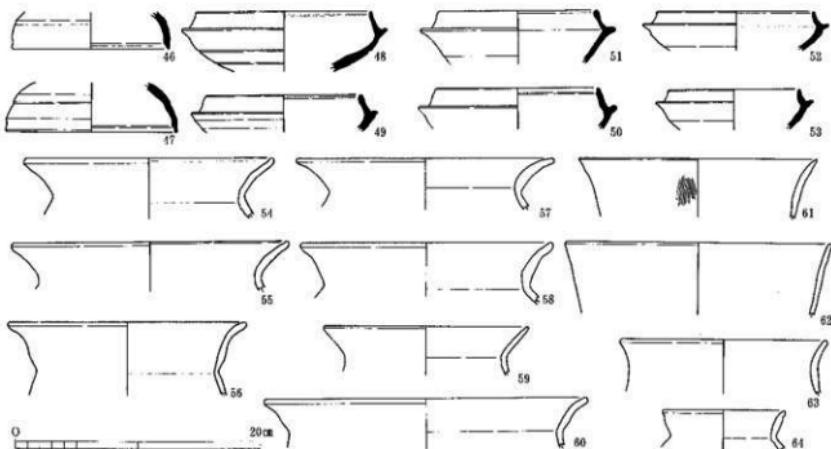
カマドは住居北辺のほぼ中央に設けられており、長さ約0.74m、幅約0.9mを測るが、袖部分は明確に検出できなかった。カマド自体は住居の平面プランの外側へは張り出さない。断面の観察によると、住居の掘削時に全体を作り出すではなく、貼床の上から船底状に0.1m前後掘り下げ構築している状況が看取される。下層には炭を含んだ褐色混じり黒褐色土が堆積しており、その上層には補修を行う際に用いたと推測される黄褐色ブロック混じり黒褐色土が確認できた。また、カマド中央には須恵器の壺を倒立させて支脚として利用していた。

遺物は、須恵器・土師器壺が出上している。

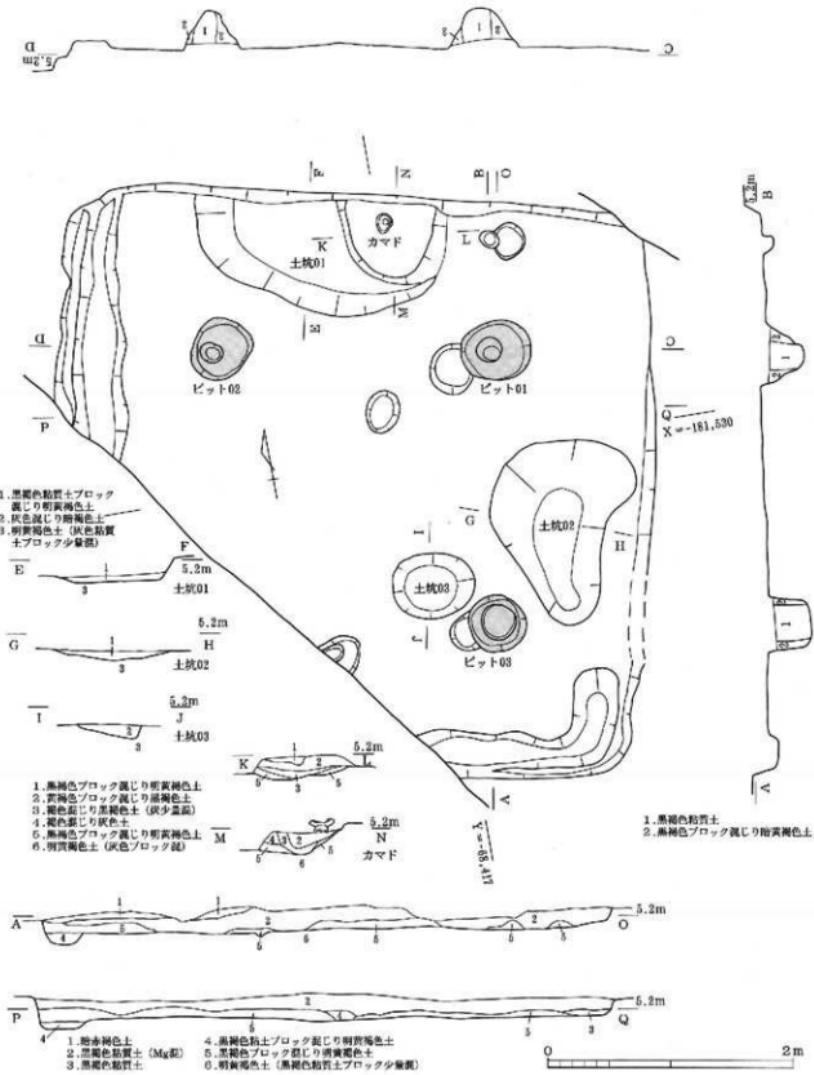
46~47は須恵器蓋である。口縁部には内傾する段を有している。口径は46が12cm、47が14.2cmである。48~53は須恵器杯身である。口縁部は内傾し、端部に段があるもの(48~50)とないもの(51~53)が認められる。口径は12.8~14.2cmを測るが、53はやや小振りで10.8cmを測る。



第11図 B区 2面SB01平面図及び断面図



第12図 B区 2面SH01出土遺物



第13図 B区2面SH01平面図及び断面図

土師器甕は口縁部の形態で大きく3類に分類できる。

A類

「く」の字状に屈曲させるもの(54・55・59)。このうち54と55は端部を上方につまみ上げ、59は丸く仕上げる。口径は54が20.2cm、55が22.6cm、59が16.6cmである。

B類

屈曲点から上方に直線的にのび、面をもたせた後に小さく外湾するもの(56~58・60)。さらに、端部を丸くおさめるもの(56・58)と面をもつもの(57・60)に細分できる。口径は56が19.6cm、57が20.6cm、58が21.2cm、60が26.4cmを測る。

C類

直線的もしくは緩やかに外湾しながら上方にのびるもの(61~63)。口径は61が19.6cm、62が21.8cm、63が16.8cmを測る。

これらの他、小型の甕(64)がある。口縁部は上方に屈曲させる。口径は10cmを測る。

窯(第10・14図、PL. 3・5)

窯は調査区の中央からやや西側で検出し、一部が調査区外にひろがることが判明したため、調査区を拡張してその全形を確認した。窯は大きく削平されたためか残存状態は非常に悪く、焼土と酸化して変色した部分を手がかりにその構造の把握につとめた。

窯の平面は、長軸2.1m、短軸1.1mの橢円形を呈し、北端部と南端部はやや尖突ぎみになっており、その長軸方向は、N-9°-Eを示す。

中央の焼成部に相当する位置には、長さ1.1m、幅0.2mほどのがれが認められた。その間隔は0.1~0.2m、台の東側と西側における遺構ラインとの間隔はそれぞれ0.2m前後を測る。台の高さは0.05m程度しか残っていないため、構築時の高さは判明しないが、遺構面のベース層を削り出して構築している。おそらく熱効率を高めるため、この台によって焰道を作りだし、いわゆるロストル式瓦窯と同様の効果を得ることを期待したものであろう。この台の中央部外側には明赤褐色の硬化部分が径約0.3mの円形状に硬化している。上部構造の影響であろうか。また窯の北端部は明浅黄色に硬化した被熱箇所が認められる。このことから、焼き口は南側と推測される。

床面には焼土と焼土混じりの暗灰色土が少量堆積しており、その中から蛸壺の細片が多数出土している。

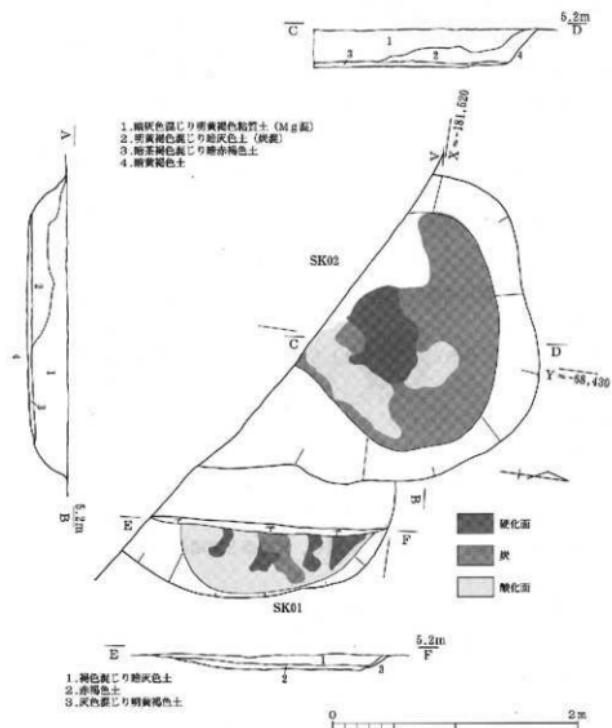
この窯がどのようなものを生産するために構築されたかは明らかではないが、過去の調査例から判断すると、蛸壺窯である可能性が高いと考えられる^①。

SK01(第10・15図、PL. 3・5)

調査区西部で検出した土坑である。SK02によって大部分が失われており、一部が調査区外にひろがっている。平面は緩や



第14図B区2面窯平面図及び断面図



第15図 B区2面SK01・02平面図及び断面図

かな弧をえがいており、円形もしくは椭円形を呈するものと考えられる。検出最大長が約2.2m、深さ約0.15mを測り、埋土は上層が褐色混じり暗灰色土、下層が赤褐色土である。底部はほぼ水平で、一面が酸化状態であった。また、部分的に硬化面や炭の堆積が認められた。埋土からは蛸壺の細片が少量出土していることから、蛸壺を焼成した土坑ととらえられる。

SK02 (第10・15図、PL. 3・5)

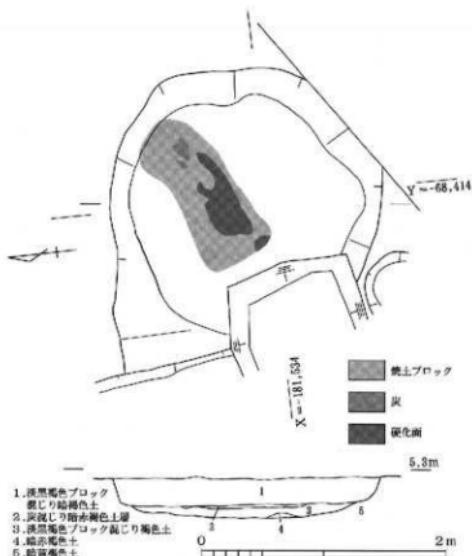
SK01の西側に隣接して検出した土坑である。調査区外にのびているため全形は確認できない。最大検出長約3.3m、深さは約0.32mを測る。底部はSK01と同様にフラットに成形しており、中央部付近には硬化面が0.6×0.8mほどの範囲でひろがり、その周辺は酸化面及び炭がひろがっている。

埋土は上層から暗灰色混じり明黄褐色粘質土、その下には明黄褐色暗灰色土が介在している。遺物は蛸壺や土器器などが出上しているが、いずれも細片で炭化できるものはなかった。おそらくSK01と同様に蛸壺焼成土坑と考えられる。

SK03 (第10・16図、PL. 3・5)

調査区の東端部分で検出した土坑である。一部が調査区外のため、全形は確認できないが円形、もしくは梢円形を呈するものと考えられる。最大検出長約2.8m、深さ約0.3mを測る。底部中央付近には硬化面とブロック状の焼土が認められるが、SK01・02ほどその範囲は広くはない。

埋土は上層から淡黒褐色ブロック混じり暗褐色土が約0.2m、下層には淡黒褐色ブロック混じり褐色土が約0.1m堆積しており、その間には炭混じり暗赤褐色土が薄く介在する。このことから、複数回の焼成が行われたことが考えられる。遺物は銅壺片が少量出土している。



第16図 B区2面SH03平面図及び断面図

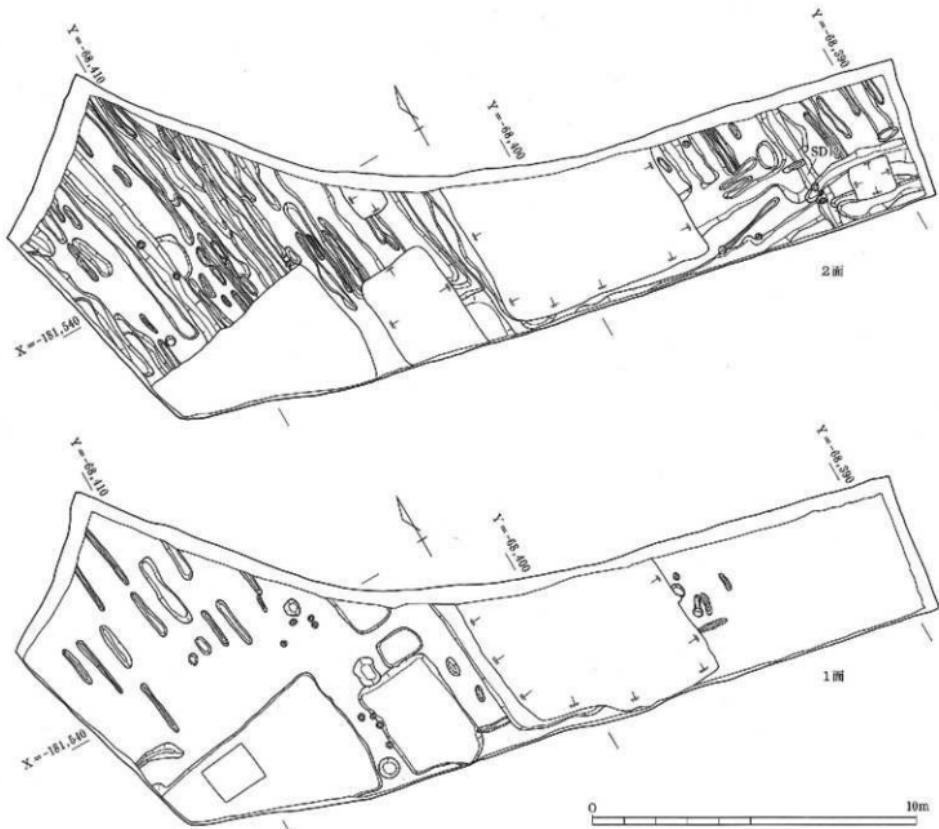
註 ① 城野博文1997「泉南市戎畠遺跡の調査」『第35回大阪府下埋蔵文化財研究会』(財) 大阪府文化財調査研究センター

第4章 C区の調査

第1節 基本層序 (第17・20図)

予定道路の緩やかなコーナー部分に位置する調査区で、逆L字状を呈している。現況は畠地となっており、地表面の標高は6.3m前後を測る。

層序は第1層・耕作土（層厚0.1～0.3m）、第2層・黄褐色混じり灰色土（層厚0.8～0.12m）、第3層・灰色混じり明黄褐色土（層厚0.04～0.1m）、第4層・黄褐色混じり灰色土（層厚0.1～0.22m）、第5層・明黄褐色混じり灰色土（層厚約0.1m）、第6層・黒褐色混じり暗褐色土（層厚約0.1m）、第7層・暗褐色土である。全体的にはほぼ水平の堆積が確認されるが、調査区東部において第7層が0.3m程度落ち込む段差が確認された。



第17図 C区1・2面平面図

この段差部分に 2 面で検出した SD12 が設けられていることから、この時期に一部が削平されたと推測される。

遺構は、第 2 層（1 面）、第 5・6 層（2 面）、第 7 層（8 面）の各上面で検出した。それぞれの標高は、1 面・約 6.1m、2 面・5.8~6m、3 面・5.7~5.9m である。

第 2 節 1・2 面の遺構と遺物

1 面では第 2 層をベースとして土坑・溝などを検出した。土坑は調査地のコーナー部分で長方形を呈するものを数基確認した。溝は調査区の西部を中心として数条検出した。規模は長さ 0.5~2.5m、幅 0.05~0.5m、深さ 0.03m を測り、耕作に関連するものと推測される。遺物は土坑の埋土から江戸後期から明治にかけての陶器などが數十点出土している。のことから、これらの遺構は近世から近代の所産と考えられる。

2 面は、調査区西部では第 5 層、東部では第 6 層上面で溝を多数検出した。主軸は南北方向で、B 区 1 面の耕作痕と一連のものである。遺物は出土していない。

SD12 (第 17・18・23 図、PL. 6)

調査区東部において検出した石組溝である。検出長 4.15m、最大幅 0.64m、深さ 0.25m 前後測る。石組は長軸 0.2m 程度の河原石を用いて構築されており、溝の東肩に沿うように石が配置されている。最高 2 段目まで残存しているが、さらに高く積まれていたかは判明しない。また、溝の北部においては石は確認できなかった。埋土は灰色砂質土で、上錘（79）が 1 点出土している。

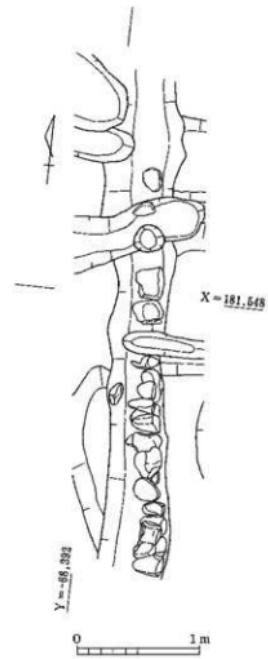
溝の機能であるが、前述したように溝が位置している地点を境界にして、調査区の東部と西部に段差が認められ、削平・盛土された状況が確認できることから、耕地開発に際して耕作地の水路や区画溝として設けられたものと推測される。

第 3 節 3 面の遺構と遺物

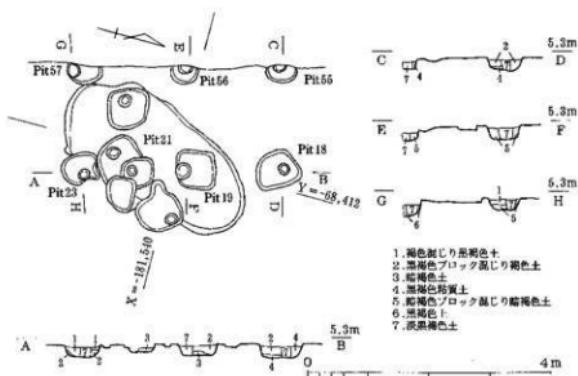
第 7 層上面で掘立柱建物、土坑、ピットなどを確認した。

SB01 (第 19・20 図、PL. 7)

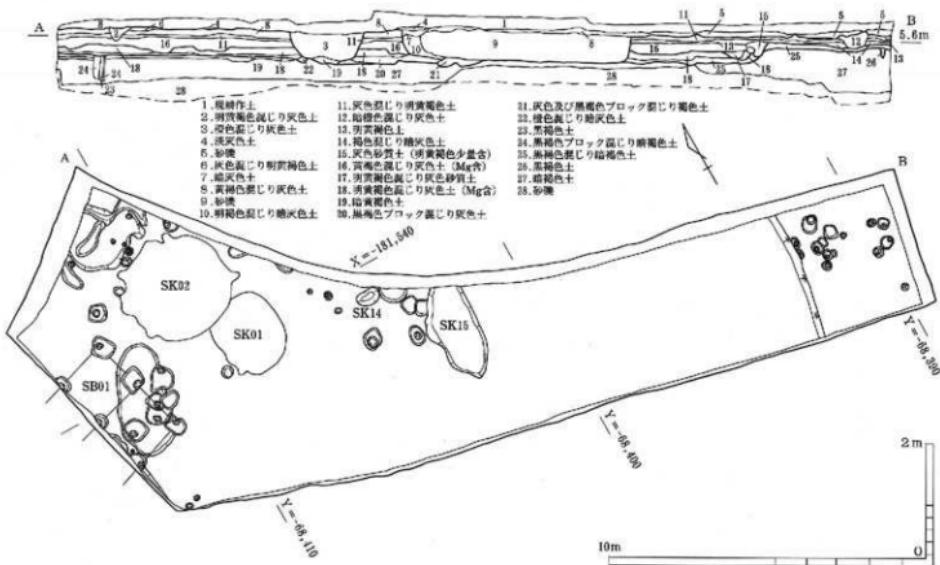
調査区の東部隅で検出した掘



第 18 図 C 区 2 面 SD12 平面図



第 19 図 C 区 3 面 SB01 平面図及び断面図



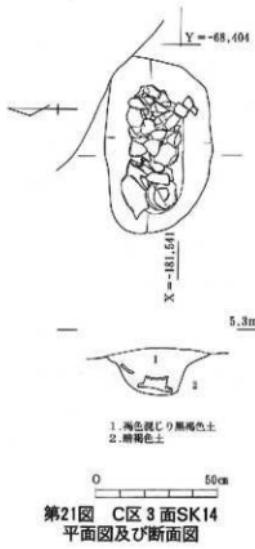
第20図 C区3面平面図及び調査区断面図

立柱建物である。規模は調査区外にひろがっているため明らかではないが、2間×1間以上の縦柱建物である。東側柱列の方向はN-16°-Wを示す。柱間寸法は東側柱列が1.64m・1.68m、東西柱列は北から16.8m、17.2m、17.2mである。ピットは隅丸方形・円形の掘形で、径0.22～0.32m、深さ0.08～0.1mを測る。また、すべてのピットで柱痕跡が確認され、その規模は0.16～0.24mを測る。掘形の埋土は黒褐色土を主体としているが、Pit18では底部にやや粘土系の堆積が確認される。遺物はいずれのピットからも出土しなかった。

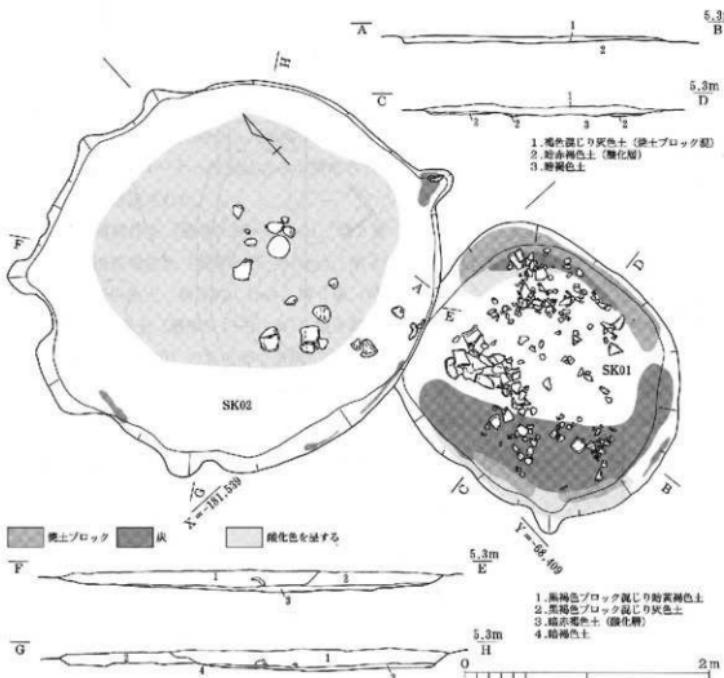
SK01 (第20・22・23図、PL. 7・8)

SB01の東側に検出した土坑である。平面は2～2.3mのはば円形を呈し、北端部でSX02と切り合っている。深さは0.1m前後を測る。底部では北東及び南西部で酸化面や焼土ブロック・炭がひろがっている部分が認められ、蛸壺が多数出土している。B区と同じく蛸壺を焼成する土坑の可能性を考えられるが、少量の瓦器も出土しており、これらも同時に生産していた可能性も否定できない。

75・76は瓦器。75は高台部分である。低く、断面が台形をした高台を貼り付けている。76は瓦器皿。全体にナデ調整、口縁部がヨコナデをほ



第21図 C区3面SK14平面図及び断面図



第22図 C区3面SK01・02平面図及び断面図

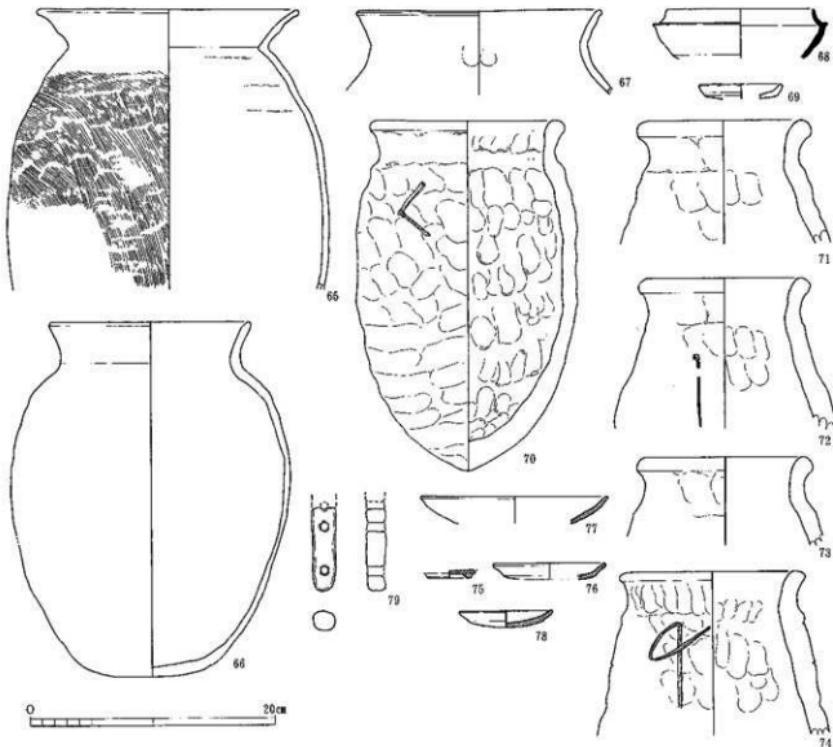
どす。70~74は蛸壺である。内湾しながら上方にのびる体部から口縁部を外側に屈曲させる。口縁端部は丸くおさめるものが多いが、平らに仕上げるもの(74)もある。体部外面の上位は縦方向、下位は横方向のユビオサエがほどこされる。また、70・72・74の体部外面にはヘラ記号が認められる。

SK02 (第20・22・23図、PL. 7・8)

SK02に隣接する大型の土坑である。平面はほぼ円形でその規模は3~3.7m、深さ約0.16mを測る。底部中央部からやや東よりの広い範囲で酸化面が看取される。また、東部分と西部分で0.2m前後の突出部が數々所確認される。燃焼効率を上げるために施設かもしれない。遺物は瓦器(77・78)が出土している。

SK14 (第20・21・23図、PL. 7・17)

調査区の中央、北よりで検出した土坑である。平面は椭円形を呈し、長軸0.72m、短軸0.45m、深さ0.18mを測る。長軸の方向は南北を示す。埋土は褐色混じり黒褐色土である。遺物は須恵器や土師器が出土している。68は須恵器杯身である。立ち上がりは比較的短く内傾し、端部はまるく仕上げられている。焼成はあまく、明灰色を呈している。底部は円形状に割れているが、故意によるものかは明らかではない。65~67は土師器の壺である。67は口縁部が緩やかに外方に屈曲するもので、口縁端部を少し肥厚させる。胎土にはクサリレキを含



第23図 C区3面SK01・02・14・15・19・SD12出土遺物

んでいる。65は内湾した体部から口縁部を斜め上方に銳角に屈曲させるもので、口縁端部を肥厚させている。内部及び口縁部はナデ調整、外面は左上がりのハケがほどこされる。66はやや上方にのびる口縁部をもち、底部は平底である。胎土には砂粒を多く含んでいる。

第5章 D区の調査

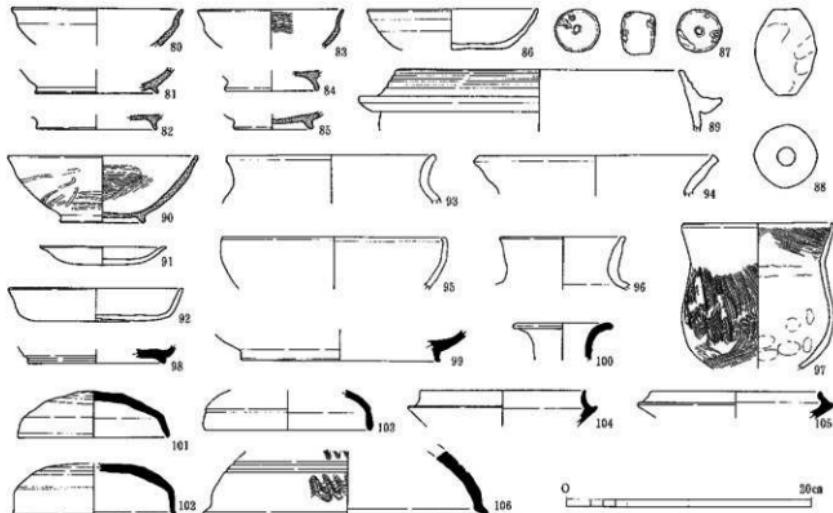
第1節 基本層序（第25～28図）

D区は、C区東端から南方向に向かって展開する、L字状を呈する調査区である。現況は水田で、地表面の標高は6.4m前後である。コーナー付近は大きく攪乱されているものの、他の調査区と同様に各層はほぼ水平に堆積していることが確認された。

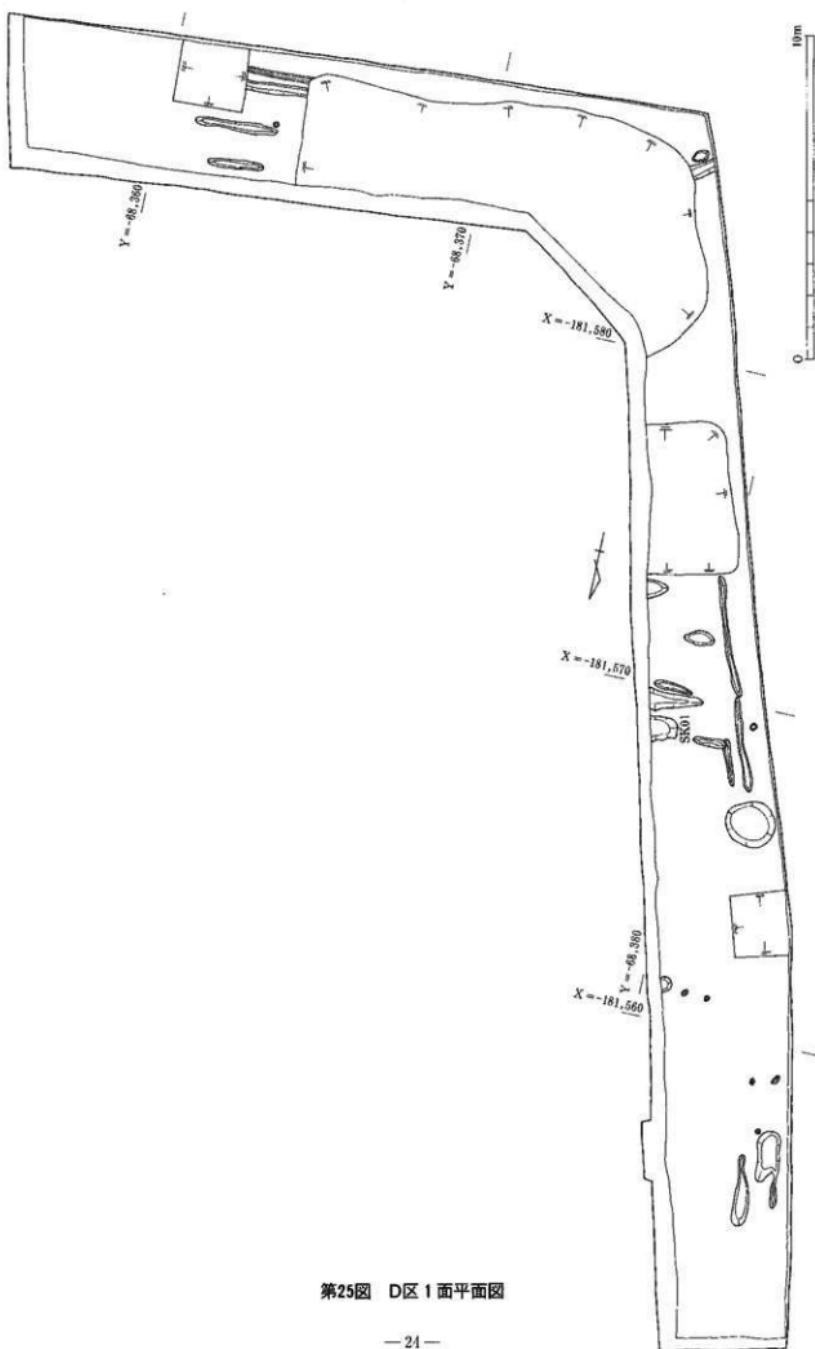
層序は、第1層・現耕作土（層厚0.08～0.2m）、第2層・茶褐色ブロック混じり灰色土（層厚約0.05m）、第3層・褐色混じり暗黄褐色土（層厚0.05～0.1m）、第4層・灰色混じり暗黄褐色土（層厚0.05～0.1m）、第5層・黄褐色混じり淡灰色土（層厚約0.1m）、第6層・明黄褐色ブロック混じり灰色土（層厚0.05～0.2m）、第7層・（淡）黒褐色粘質土（層厚0.1～0.2m）、第8層・暗褐色土である。第3層（1面）、第4層（2面）、第7層（3面）、第8層（4面）の各上面で遺構が確認できた。各遺構面の標高は、1面・約6.3m、2面・約6.2m、3面・5.9～6.1m、4面が5.7～6mである。遺構面の1面と2面は調査区の北東両端において、比高差がほぼ認められないのに対し、3・4面は北部から東部にかけて約0.3mの高低差が生じており、その原因として山地形の影響が強く反映しているものと推測される。

包含層出土遺物（第24図、PL.18）

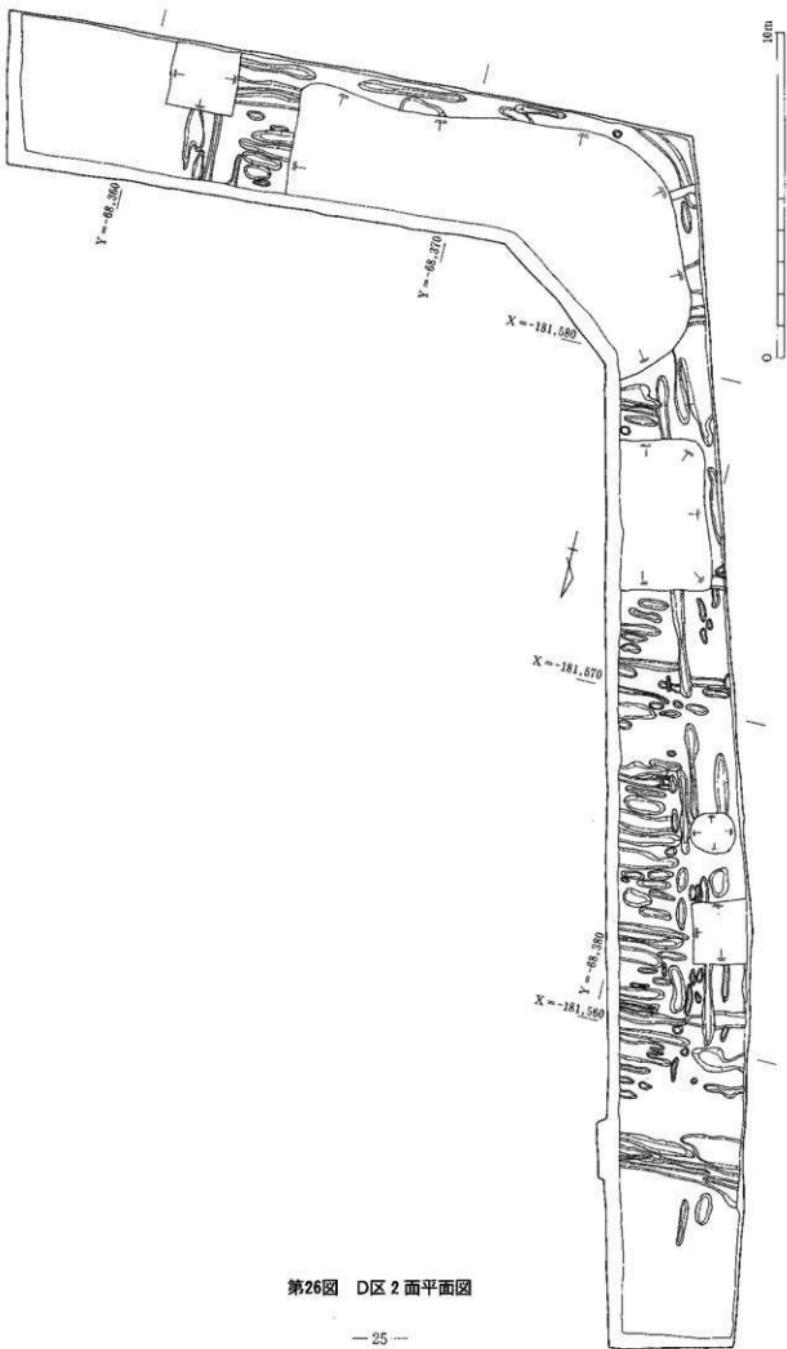
2面のベース層となる第4層からは、羽釜（89）が出土している。第6層では黑色土器A類（80～85）が比較的まとまって出土している。その他、土師器（86）、紡錘車（87）、土錐（88）などが出土している。第7層の淡黒褐色粘質土では黑色土器（90）、土師器（91・92）、黒褐色粘質土では、須恵器（98～106）、土師器（93～97）が出土している。



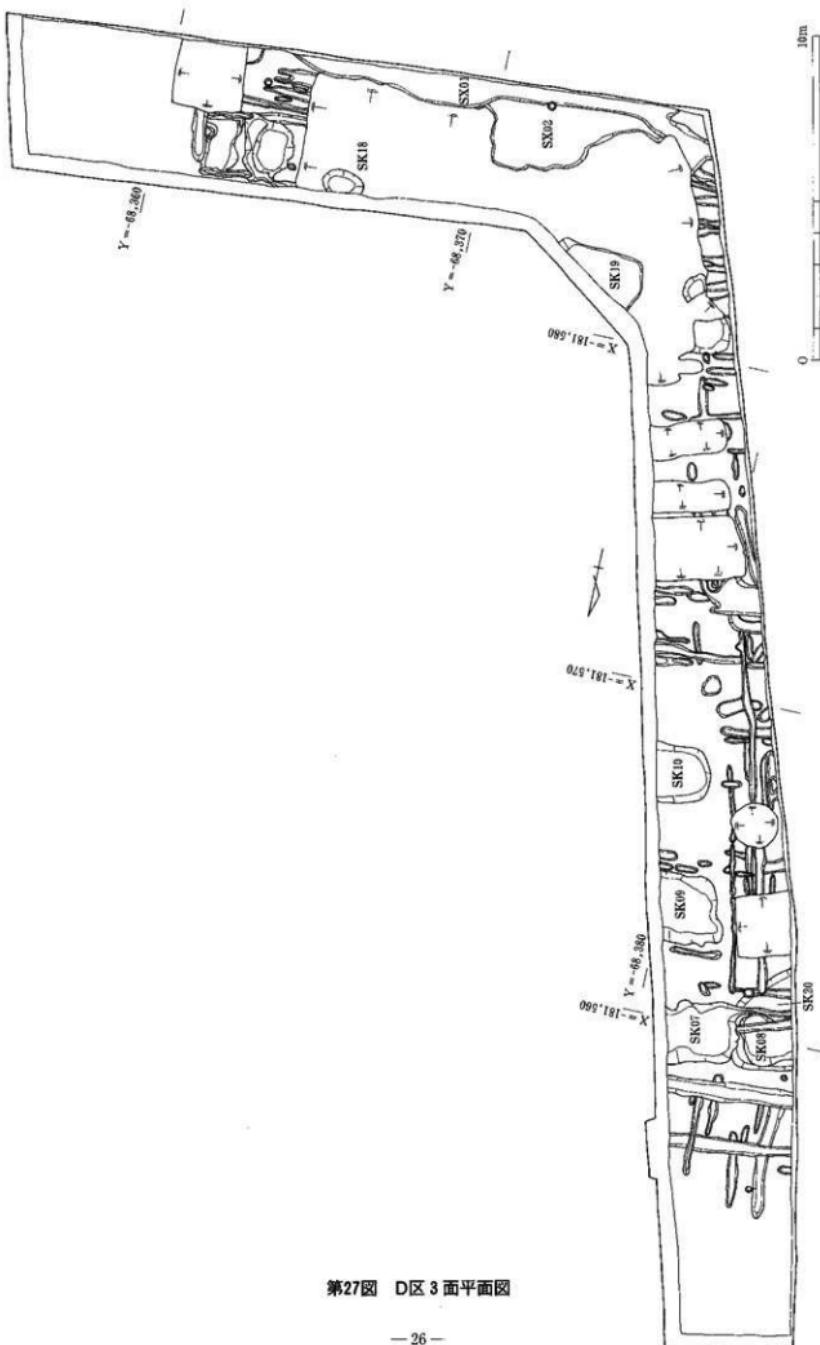
第24図 D区包含層出土遺物



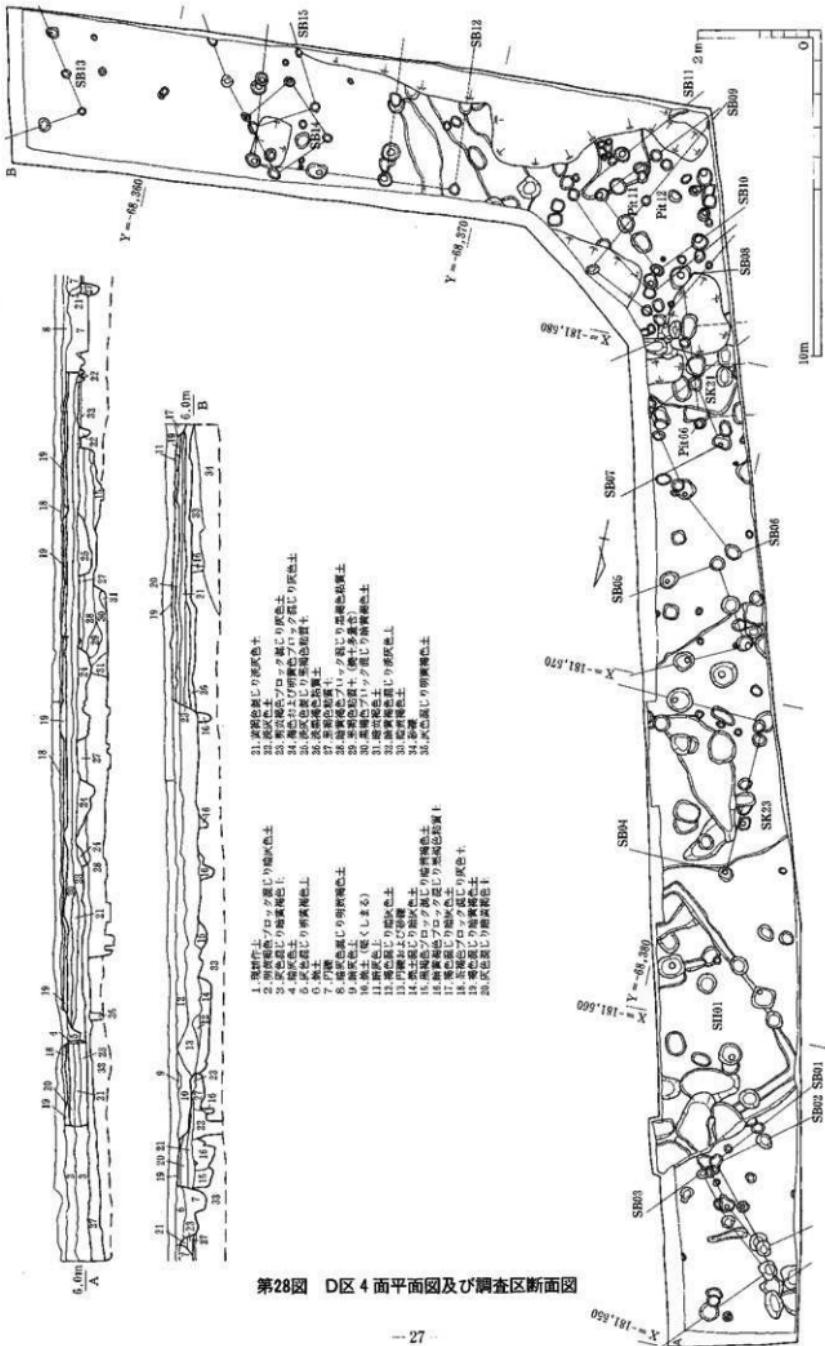
第25図 D区 1面平面図



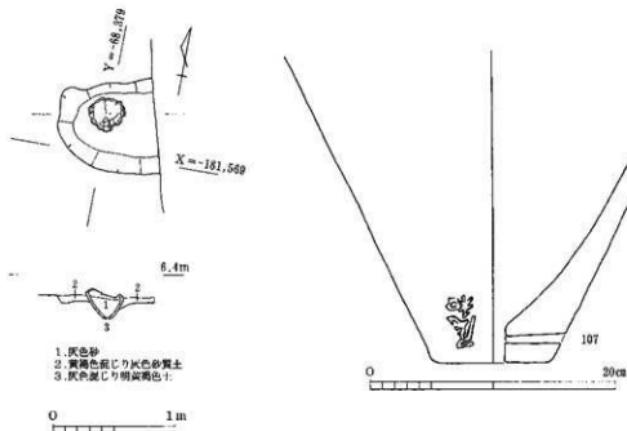
第26図 D区 2面平面図



第27図 D区3面平面図



第28図 D区4面平面図及び調査区断面図



第29図 D区1面SK01

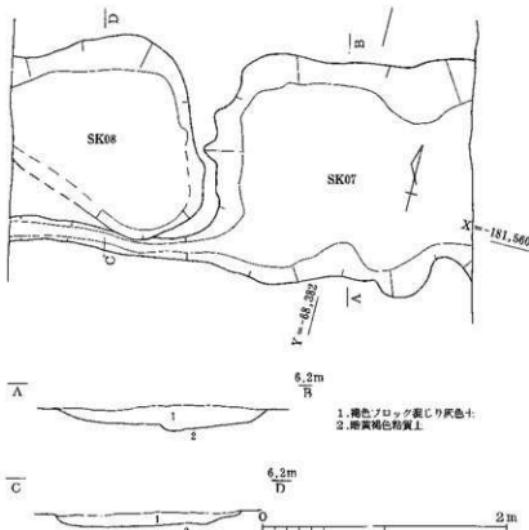
第2節 1・2面の遺構と遺物

1面では溝、土坑、ピットなどが数か所確認された。遺構の密度は非常に薄く、主に耕作地として利用されていたと考えられ、時期的には近世後半以降であろう。

2面では耕作痕と考えられる多数の溝を検出した。溝の方向は東西方向に延びるものと南北方向のものに大別される。東西方向の溝は南北方向に比べて非常に密接して確認され、耕作の方向を示していると推測される。

SK01 (第25-29図、PL. 9-18)

1面で検出した土坑である。調査区外にひろがるため、全形は知り得ないが、細長い橢円形を呈するものと考えられる。検出した規模は、長軸0.82m、短軸0.76m、深さ約0.05mを測る。埋土は黄褐色混じり灰色砂



第30図 D区3面SK07・08平面図及び断面図

質土である。遺構のやや北部で土師質土器（107）が出土した。107は底部から上外方に直線的にのびる体部をもち、底部には径約3cm、体部の底部際から中央にむかって0.5~0.8cmの孔を穿つ。また、体部下方には「尾和」と陰刻されている。上器は遺構底部を0.2m前後深く掘り下げ、正立した状態で置かれており、内部には灰色砂が堆積していた。この上器は近年、男里遺跡をはじめ、周辺の遺跡で数例の出土が知られており、近世後半に当地で盛んに行われていた精糖の際に用いられた「瓦漏」と考えられる。おそらく植木鉢として転用されたものであろう。

第3節 3面の遺構と遺物

3面では、土坑・溝・不定形の落ち込みなどを検出している。

SK07 (第27・30・31図、PL. 9・10・19)

不整形のプランを有し、西隅から溝状の遺構がのびる土坑である。断面は緩やかな皿状を呈する。埋土は褐色混じり灰色土で、深さは約0.2mを測る。須恵器杯身（108）、須恵器杯蓋（109）、須恵器壺の底部（110）などが出土している。

SK08 (第27・30・31図、PL. 9・10・19)

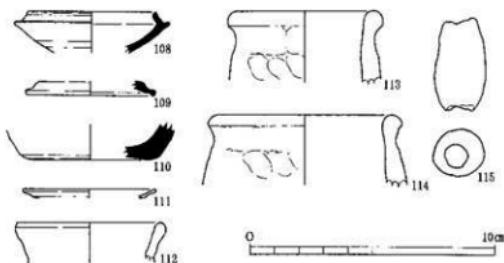
SK07の西側に隣接する不整形の土坑である。深さは約0.1mを測り、埋土は褐色混じり灰色土である。須恵器皿（111）や製塙土器（112）などが出土している。

SK09 (第27図、PL. 9・10)

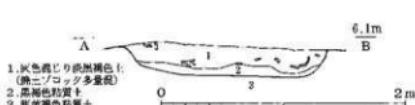
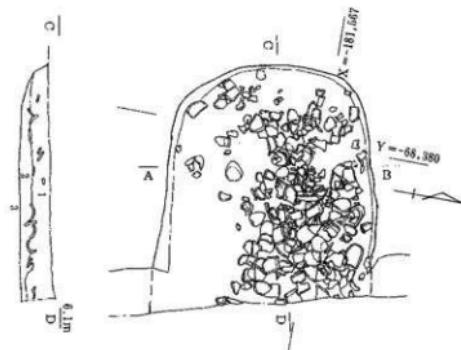
不整形を呈する土坑である。深さは約0.1mを測り、埋土は黄褐色混じり淡灰色土である。遺物は出土しなかった。

SK10 (第27・32・33図、PL. 9・10・20)

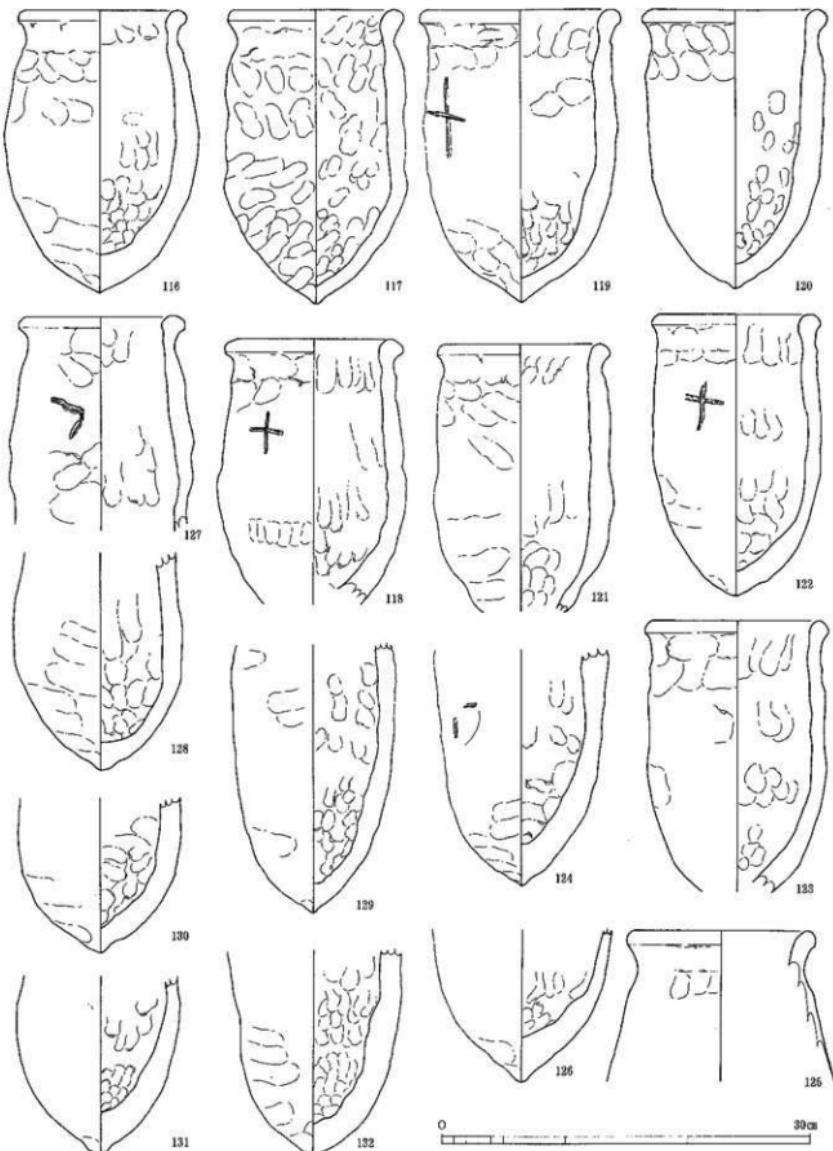
蛸壺焼成土坑ととらえられるものである。調査区外にひろがるため全形は確認でききないが、隅丸の長方形を呈すると考えられる。検出長は長軸1.94m、短軸1.8m、



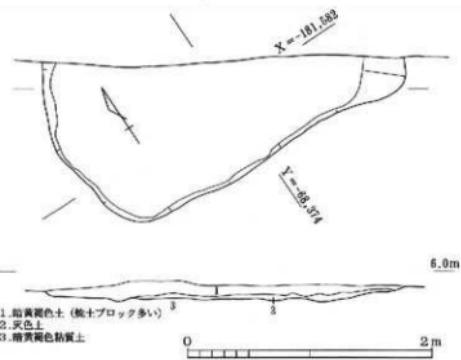
第31図 D区3面SK07・08・19出土遺物



第32図 D区3面SK10平面図及び断面図



第33図 D区3面SK10出土遺物



第34図 D区3面SK19平面図及び断面図

(116~118・125)、B類が体部がほぼ上方にのびるもの (119~123) である。その他の違いはほとんどなく、きわだった特徴は有していない。A・B類ともに全体的に口縁部をユビオサエによって外反させ、端部を丸く仕上げている。内面は縦方向のユビオサエ、外面は体部上位と下位で方向の異なるユビオサエのをほどこす。底部は尖底である。胎土にはクサリレキを含んでおり、浅黄褐色を呈している。口径は14cm前後、高さ25cm前後を測るものが多い。また、体部外面には「+」のヘラ記号をもつもの (118・119・122・124・127) がみられる。生産地や消費地を明らかにするためにはほどこされたものであろうか。

SK18 (第27図、PL. 9・10)

調査区の東半部で検出した土坑である。長軸1.24mを測る長方形を呈すると考えられる。深さは0.3mで、埋土は上層が褐色ブロック混じり灰色土、下層が暗灰色土で一部に暗黄褐色粘質土が介在する。遺物の出土はない。

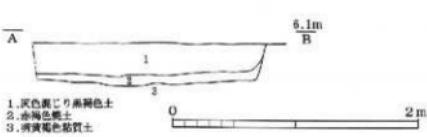
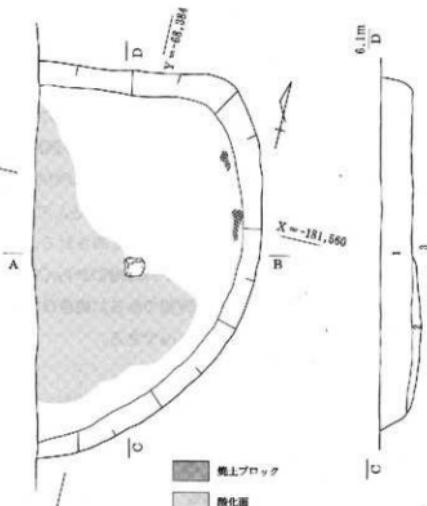
SK19 (第27・31・34図、PL. 9・10・19)

調査区のコーナー部で検出した土坑である。上層からの擾乱のため遺存状態は悪い。平面のプランは隅丸の長方形を呈すると推

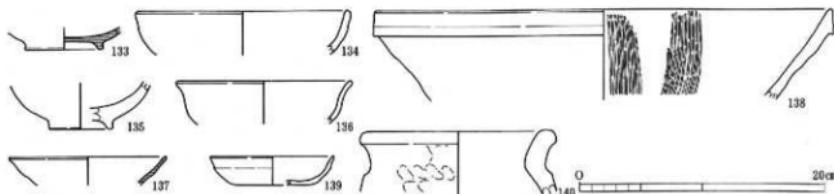
深さ約0.24mを測る。断面は緩やかな船底状を呈している。埋土は上層では焼土ブロックを大量に含む灰色混じり淡黒褐色土、下層が黒褐色粘質土である。上層から蛸壺が大量に出土している。蛸壺は遺構のやや北部に集中して出土したが、完形はなくすべてが破片であることから、何らかの原因で焼成に失敗したものをそのまま破棄した可能性が考えられる。

ここでは17点を図示した。出土した蛸壺は全体的に砲弾型を呈しているが、体部の形態によって大きく2種類に分類することができる。

A類は緩やかに内湾する体部をもつもの



第35図 D区3面SK20平面図及び断面図



第36図 D区3面SX01・02出土遺物

測される。埋土は焼土ブロックを大量に含んだ暗黄褐色土が約0.1m堆積し、その下層には灰色土が数cm認められる。遺物は蛸壺・土鍤が出土している。蛸壺は体部から口縁にむかってやや直線的に立ち上がるもの（113）と体部が張るもの（114）がある。115は土鍤である。約2cmの孔を穿つ。焼成はあまく、灰白色を呈する。

SK20（第27・35図、PL. 9・10）

SK09の西側で検出した土坑である。3面の検出面から0.05mほど掘削した時点で確認された。調査区外にひろがるため全形は知り得ないが、不整円形を呈するものと考えられる。検出した最大長は3.24m、深さは0.34mを測る。埋土は灰色混じり黒褐色土で、底部には赤褐色を呈する酸化面がひろがっている。中央付近には一辺20cm程度の河原石が1点確認された。遺物は蛸壺の細片が出土している。

SX01（第27・36図、PL. 9・10・21）

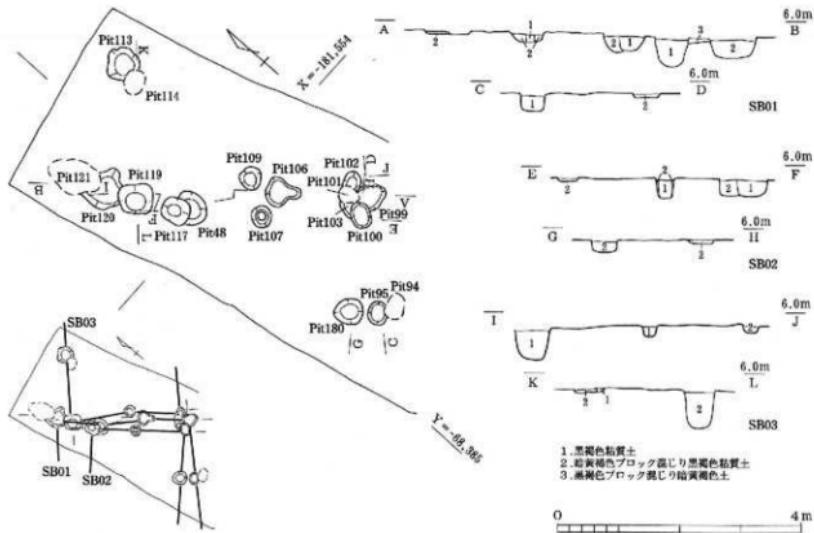
調査区のコーナー付近南隅で検出した遺構である。大部分が調査区外にひろがるものと考えられる。検出長は東西方向に12.4m、深さは0.48m前後を測る。西端部では深さ約0.1mの溝状の遺構がとりついている。埋土は上層から灰色系の堆積が確認され、下層ではやや褐色を帯びた粘質土となる。また、一部は還元状態を呈していた。おそらく、溝状の遺構から水を引き込んでいたのであろう。このようなことから、当遺構の性格は、農耕に関する水溜的な性格をもつものと推測される。遺物は黒色土器・瓦器・陶磁器などが出土している。133は黒色土器B類の碗である。やや外方向にひらく高台を有する。高台径6.2cmを測る。136は青磁、135は灰釉碗である。疊付は露胎。137は瓦器である。焼成はあまく、淡灰色を呈する。138は瓦質擂鉢である。口縁部は下方に拡張される。印目は5条/cmである。

SX02（第27・36図、PL. 9・10・21）

調査区のコーナー付近で検出した不整形の遺構で、SX01と切り合っている。新旧関係はSX02→SX01となっている。深さは0.64mを測り、埋土はSX01と同じく灰色系であるが、一部に暗黄褐色の粘質土が堆積している。埋土から土師器（139）、蛸壺（140）が出土している。

第4節 4面の遺構と遺物

4面では、掘立柱建物や竪穴住居のほか、溝や土坑、数多くのピットなどを検出した。掘立柱建物においては、調査区の幅員の関係もあり、全体の規模は明らかにできないものがほとんどであった。今後、周辺における調査の進展によって判明していかなければならない課題といえる。



第37図 D区4面SB01・02・03平面図及び断面図

SB01 (第28・37・40図、PL.11・12)

調査区の北東部で検出した3間×1間以上の掘立柱建物である。建物を構成するピットはPit95・99・106・48・120である。南柱列の方向はN-41°-Wを示す。東柱列の柱間は1.5~1.7m、南柱列は1.8mを測る。ピットの掘形は楕円形を呈し、径0.5m前後を測る。遺物は、Pit99から土師器(141)が1点出土している。

SB02 (第28・37図、PL.11・12)

2間×1間以上の掘立柱建物である。建物を構成するピットはPit180・100・107・117である。柱間寸法は東柱列で1.4mと1.55m、南柱列では1.5mを測る。南柱列の方向はN-40°-Wを示す。遺物は出土しなかった。

SB03 (第28・37図、PL.11・12)

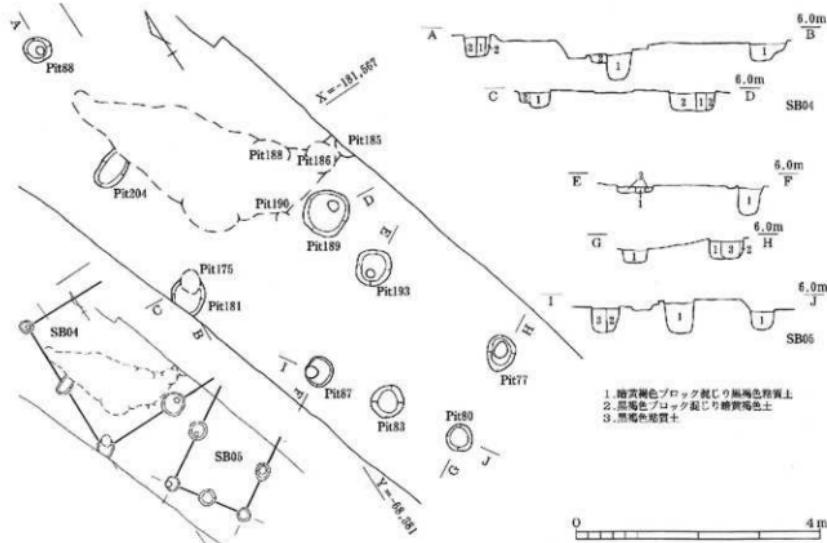
2間×1間以上の掘立柱建物である。Pit113・119・109・102で構成される。柱間寸法は北柱列で2.2m、西柱列では1.85m、1.65mを測る。西柱列の方向はN-42°-Wを示す。遺物は出土していない。

SB04 (第28・38・40図、PL.11・12・21)

2間×2間以上の掘立柱建物である。Pit88・204・181・189で構成される。柱間寸法は南柱列で2.7m、西柱列では2.3m、2.5mを測る。西柱列の方向はN-5°-Eを示す。Pit88から須恵器(142・143・146)・土師器(144)、Pit189から土師質の蛸壺(145)が出土している。所属時期は7世紀と考えられる。

SB05 (第28・38・40図、PL.11・12・21)

2間×2間以上の掘立柱建物である。東西棟の建物と考えると主軸はN-64°-Eである。建物を構成するピッ



第38図 D区4面SB04・05平面図及び断面図

トはPit77・80・83・87・193で、掘形は径0.5~0.6mの円形を呈する。埋土は暗黄褐色ブロック混じり黒褐色粘質土及び黒褐色ブロック混じり暗黄褐色土である。深さは0.1~0.5mと差が大きい。柱間寸法は北柱列1.8m、南柱列が1.6m、西柱列1.3mを測る。Pit193から土師器甕(147)、Pit83から製塙土器(148)が出土している。8世紀の所産である。

SB06 (第28・39・40図、PL.11・12・21)

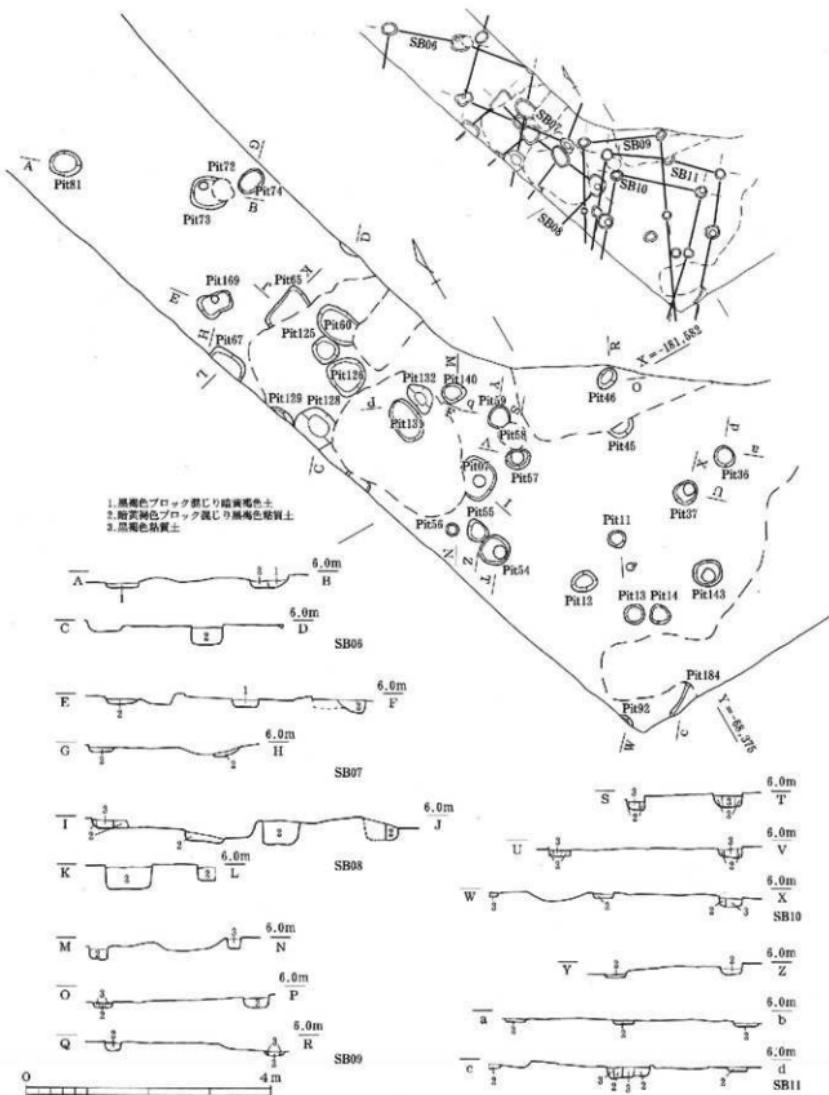
SB06~11は調査区のコーナー付近で検出した掘立柱建物である。SB06は桁行・梁行ともに2間以上の掘立柱建物である。建物東隅のピットは平面では検出できなかったが、断面において確認された。Pit81・73・60・128で構成されている。掘形は径0.4~0.6mの円形を呈し、深さは0.1~0.2mと削平されている。北柱列の方位はN-44°-Wである。遺物はPit81から繩文土器深鉢(150)、Pit73から須恵器(149)が出土している。

SB07 (第28・39図、PL.11・12)

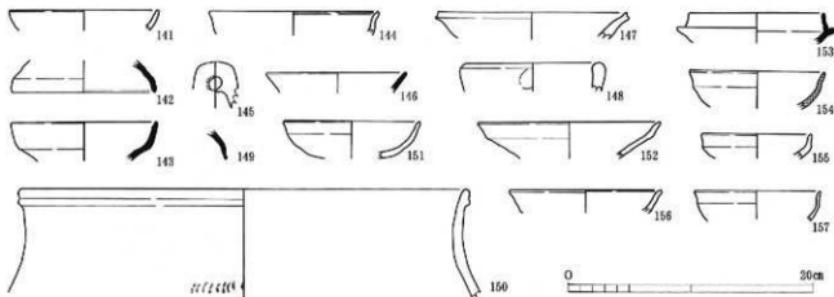
2間×1間以上の掘立柱建物である。建物を構成するピットは、Pit74・169・125・132。掘形は円形や楕円形を呈し、深さは0.1m程度と浅い。西柱列の方位はN-36°-Wを示し、柱間寸法が北柱列では2.3m、西柱列が2m・1.7mである。遺物は確認できなかった。

SB08 (第28・39・40図、PL.11・12・21)

3間×1間以上の総柱建物である。Pit67・65・126・131・07・129のピットで構成される。ピットは隅丸方形や楕円形を呈し、径0.5~0.7m、深さ0.2~0.4mを測る。埋土は暗黄褐色ブロック混じり黒褐色粘質土であ



第39図 D区 4面SB06~11平面図及び断面図



第40図 D区4面SB01・04~06・08・09・12・13・15出土遺物

る。東柱列における方位はN-21°-Wを示し、柱間寸法は、東柱列が1.2~1.5mである。遺物は土師器の杯（151）が出土している。

SB09（第28・39・40図、PL.11・12・21）

SB09~11が位置する付近は擾乱が激しく、いずれのピットも0.5~0.1m程度の深さで検出された。SB09は梁間1間（2.5m）×桁行2間以上の掘立柱建物である。桁行の柱間は東で2.55mと2.95m、西では2.3mである。桁の方位はN-30°-Eを示す。建物を構成するピットはPit56・140・46・11・92で、径0.18~0.24mの円形を呈する。遺物はPit140から土師器（152）が1点出土している。

SB10（第28・39図、PL.11・12）

梁間1間（2.8m）×桁行2間以上の掘立柱建物である。SB11の内側に重複して検出された。Pit92・14・37・57・54のピットで構成される。ピットは円形を呈し、径0.3~0.5mを測る。桁行の柱間は東柱列が北から1.8m・2.1m、西柱列が1.55mを測る。桁の方位はN-41°-Eである。遺物は出土していない。

SB11（第28・39図、PL.11・12）

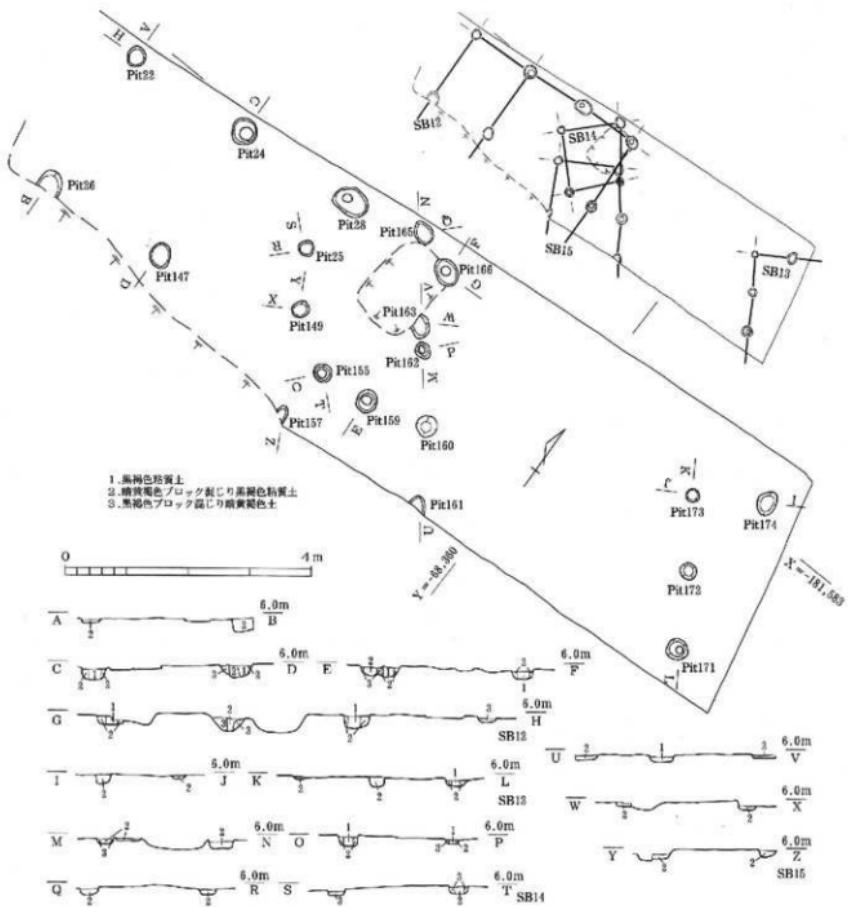
梁間2間×桁行2間以上の掘立柱建物と考えられる。Pit55・59・45・36・143・184のピットで構成される。梁間のピット間は1.8~2.1m、桁行では約2mを測る。桁行の方位はN-40°-E。ピットは径0.3~0.5mの円形を呈する。遺物の出土はない。

SB12（第28・40・41図、PL.11・12・21）

2間×1間以上の掘立柱建物である。Pit147・24・28・166・159・22・26のピットで構成され、建物の西側に庇をもつ。北側の柱列は東西方向を示し、柱間はそれぞれ2mを測り、庇は2.2m西側に張り出す。東柱列の柱間は2.4mを測る。遺物は須恵器・土師器・黒色土器が出土している。153は須恵器である。口縁部は内傾して立ち上がり、受部はほぼ水平である。154は黒色土器の碗である。外面ともにナデ調整。B類。155は土師器の皿である。口縁部がやや垂直に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。

SB13（第28・40・41図、PL.11）

調査区の東端で検出した掘立柱建物である。東西1間（1.2m）・南北2間（1.2~1.3m）の規模で、西柱列



第41図 D区 4面 SB12~15平面図及び断面図

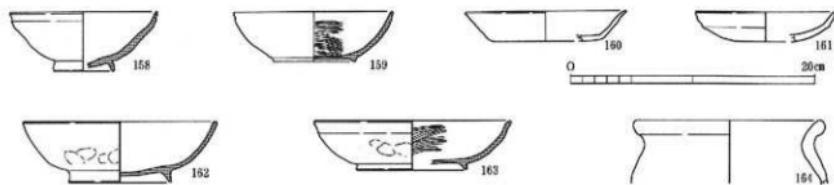
はN-30°-Wを示す。Pit171~174で構成される。遺物は土師器(156)が1点出土している。

SB14 (第28・41図、PL.11)

1間×1間の小規模な掘立柱建物である。Pit25・155・162・165のピットで構成される。ピットはそれぞれ0.2m程度の円形を呈する。柱間は1.7~2mを測る。西柱列はN-42°-Wを示す。遺物の出土はない。

SB15 (第28・41図、PL.11)

梁間1間(1.9m)×桁行2間以上の掘立柱建物である。建物はPit157・149・163・160・161で構成される。



第42図 D区4面Pit12・13・66出土遺物

桁行の方位はN-34°-Wを示す。遺物は土師器の杯（157）が出土している。

その他のピット（第28図、PL.11・22）

掘立柱建物を構成しないが、調査区のコーナー付近のピットから遺物が出土している。

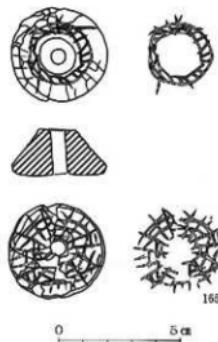
Pit12からは黒色土器が出土している。158はA類の椀である。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。底部にはやや外方にひらく高台を貼り付ける。Pit13からは黒色土器、土師器が出土している。159は黒色土器A類の椀である。体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内面はヘラミガキ調整をほどこす。底部には断面三角形の高台を貼り付ける。器高5cm。160・161は土師器皿である。160は平らな底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。161は緩やかに立ち上がる体部をもち、口縁部は上方にのびる。Pit66からは黒色土器、蛸壺が出土している。162・163は黒色土器A類の椀である。162は体部から口縁部にかけて丸味をおびて立ち上がるが、163はわずかに外反する。内面は163がヘラミガキ調整、162は摩滅しており不明。外面はともにユビオサエによる調整がほどこされる。164は蛸壺である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は少し肥厚する。調整は外面ともにナゲ。二次焼成をうけたためか全体に赤褐色を呈している。

SH01（第28・43・44・45図、PL.11・22・23）

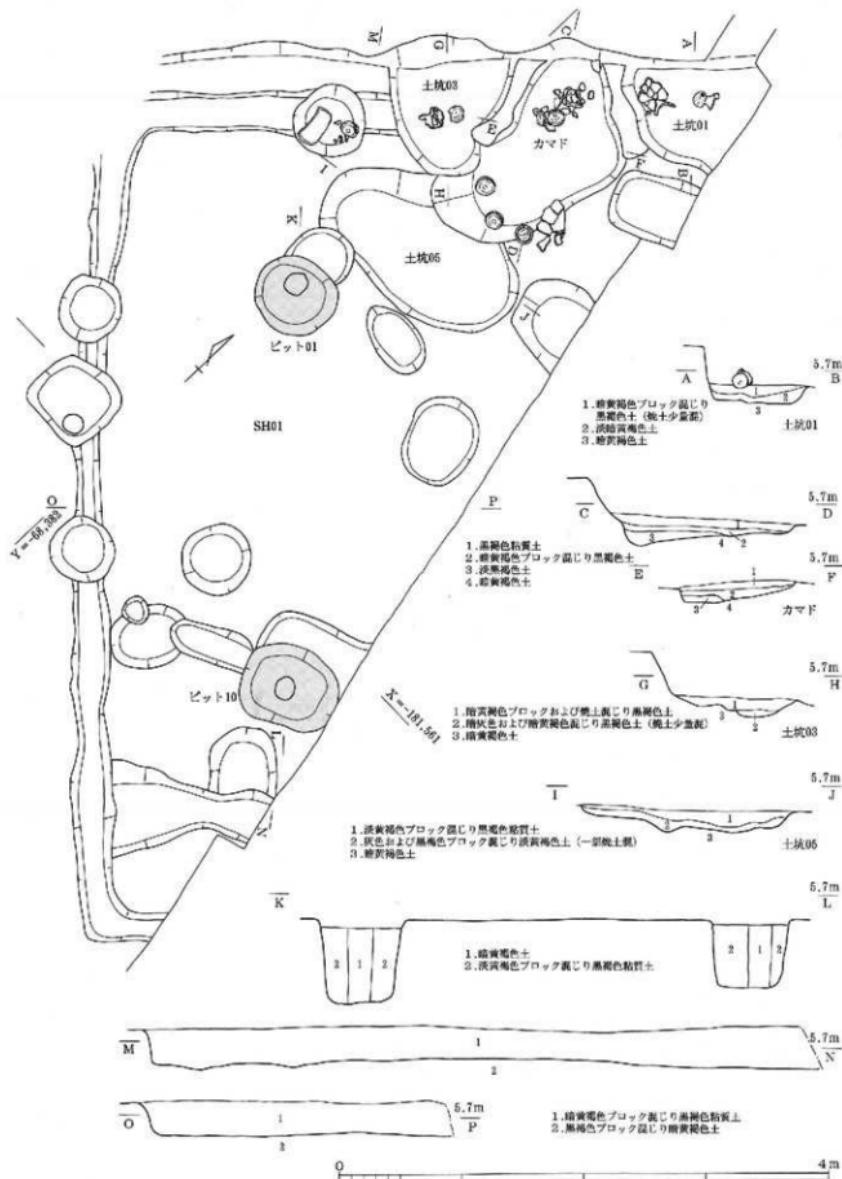
調査区の北部で検出した堅穴住居である。全体の約1/2が調査区外にひろがっているものと推測される。住居東部隅は上層の遺構によって失われているが、北辺ラインから想定すると、西辺の長さは7.2m前後と推定され、北辺の長さは5.2m以上を測る大型の堅穴住居である。方位はN-43°-Wを示す。深さは検出面から0.2~0.32mを測り、住居の中央部がやや浅くなっている。埋土は暗黄褐色ブロック混じり黒褐色粘質土の1層で貼床は確認されない。

床面では主柱穴のほか、壁溝やカマド、ピットなどを検出した。主柱穴は2カ所認められ、径0.6~0.8m、深さ0.6~0.7mを測り、埋土は掘形が淡黄褐色ブロック混じり黒褐色粘質土、柱痕が暗黄褐色土である。柱間寸法は約3.3mを測る。壁溝は北・西辺及び南辺を巡っている。規模は、幅0.18~0.4m、深さは0.03~0.05mと非常に浅い。また、北辺のみ0.4mほど住居の内側に位置しているが、カマドの位置が関連することによるものなのか、拡張にともなうものなのかは明らかではない。

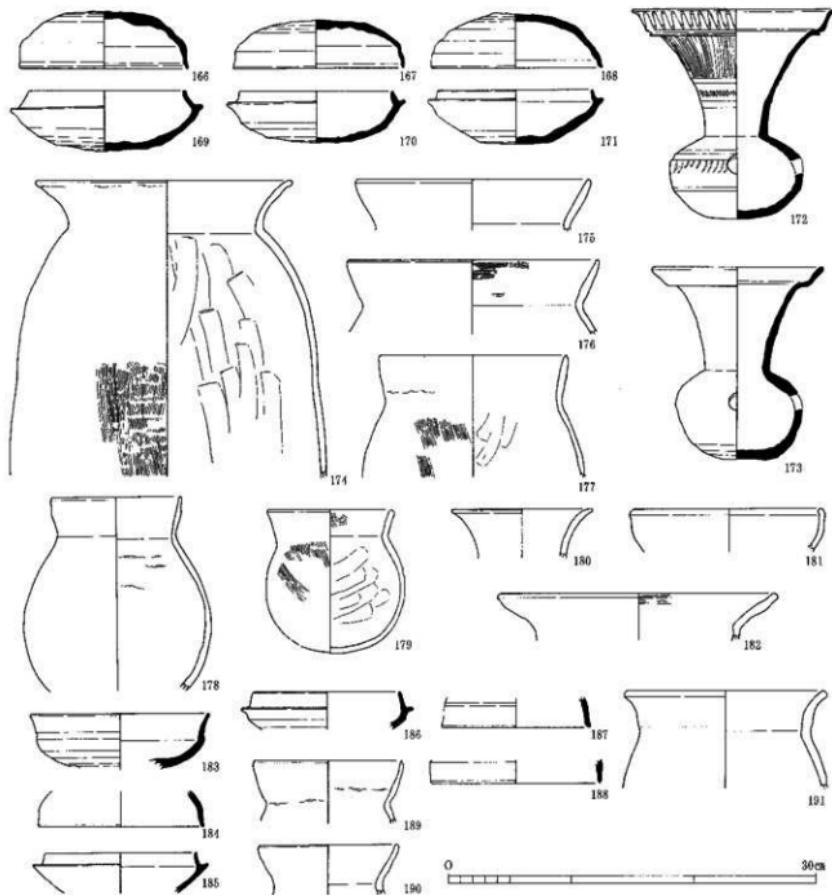
カマドは袖部の一部が残存しており、中央には須恵器の甌（172）を倒立させて支脚としていた。支脚は二次焼成の跡は認められず、支脚付近には明黄褐



第43図 D区4面SH01
出土遺物①



第44図 D区4面SH01平面図及び断面図



第45図 D区4面SH01出土遺物②

色土が一部ひろがっていたことから、これを用いて支脚を被覆し、固定していたと考えられる。なお、炭の堆積はカマド周辺においてもほとんど確認されなかった。

遺物は、堅穴住居の埋土から須恵器、土師器、紡錘車が出土している。

166～168は須恵器杯蓋である。口縁部はやや外方にひらく。168はやや後出するものであろう。169～171は須恵器杯身である。たちあがりは比較的短く内傾し、端部は丸く仕上げられている。171は平らな底部をもつ。172・173は甌である。球形な体部をもち、口縁部は頸基部から外反し、さらに段をなして外方へ屈曲させ、端部を丸く仕上げる。172は体部と頸基部に列点文、口縁部に波状文がほどこされる。174～176・178・179は土師器の甌である。口縁部が外反するもの（174～176・179）と直線的に上方にのびるもの（178）がある。165は紡錘車である。体部は算玉形を呈し、中央に径0.5cmほどの孔を穿つ。体部には輪状、裏面には不定方向の



第46図 D区4面SK21平面図
及び断面図

199は須恵器杯蓋、192～198は黒色土器である。このうち黒色土器192～196はA類、197・198はB類である。197は口縁部が直線的に立ち上がり、器壁も比較的厚い。198は口縁部がわずかに外反する。200～202は土師器の椀。201・202は厚いしっかりとした高台をもつ。201の高台は垂直に、202は斜め外方にのびる。203～208は土師器皿。203～205はいわゆる「ての字状口縁」と呼ばれるタイプのものである。209は灰釉陶器の壺頸部、210は両端に径0.5cmほどの孔を穿つ棒状土錘である。

SK23 (第28・47・48図、PL.11・24)

SH01の南側で検出した土坑である。調査区外にひろがるため全形は知り得ない。検出した最大幅は7.45mを測

キザミがほどこされている。高さ1.9cm、上部の径1.5cm、下部3.9cmを測る。碧玉製である。

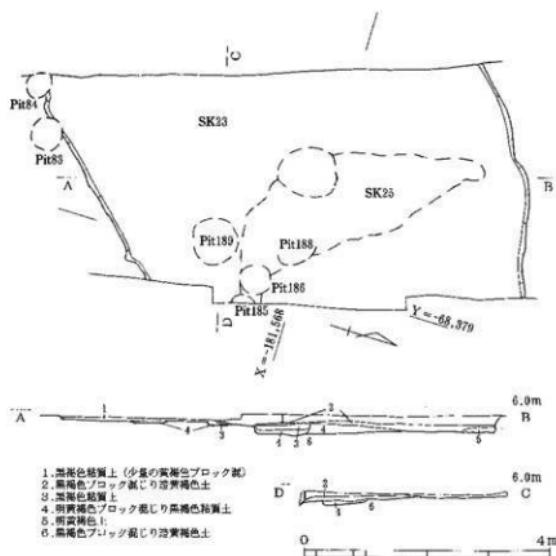
土坑01からは須恵器高杯（183）が出土している。緩やかに上方にのびる体部から外上方に外反する口縁部を有する。脚部から下は欠損している。

土坑02からは須恵器杯蓋（184）、杯身（185・186）、土師器甕（177・189・190）が出土している。177は口縁部が直線的に外方にのびるタイプのものである。端部は丸くおさめる。甕は189・190は端部を上につまみ上げる。

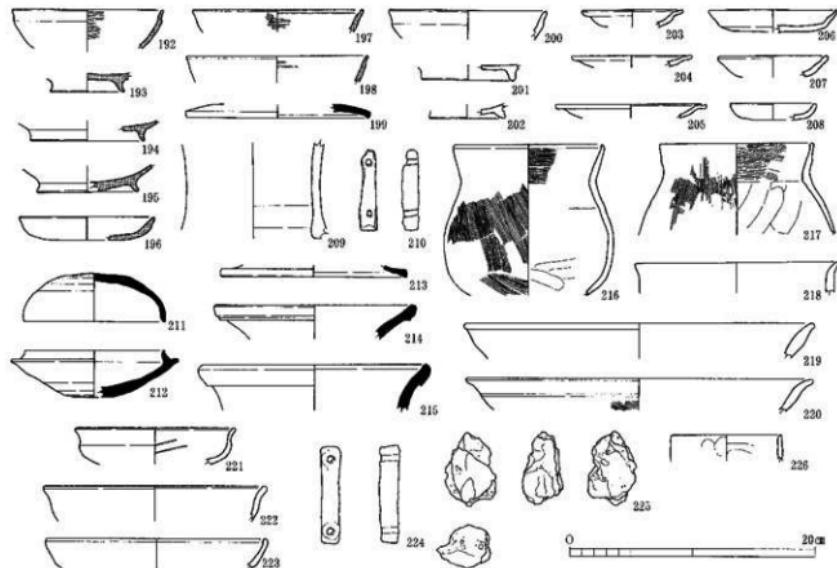
ピット01では須恵器（187・188）、ピット03からは土師器甕（191）が出土している。

SK21 (第28・46・48図、PL.11・24)

調査区の南部で検出した土坑である。調査区外にひろがることや、遺構南部が大きく擾乱されているため、全形は知りえない。深さは0.05m程度と浅く、埋土は淡黒褐色粘質土である。埋土から須恵器や黒色土器などが出土している。



第47図 D区4面SK23平面図及び断面図



第48図 D区4面SK21・23出土遺物

り、埋土は遺構の南肩から中央にかけて黒褐色粘質土が約0.05m、中央から北にはその下層に明黄褐色系の堆積が認められる。また、南肩のラインがSH01の北辺に平行していることから、SH01と関連がある遺構の可能性も考えられる。埋土から須恵器（211～215）、土師器（216～223）、土錐（224）、スラッグ（225）などが出土している。

第6章 E区の調査

第1節 基本層序 (第49・50・51図)

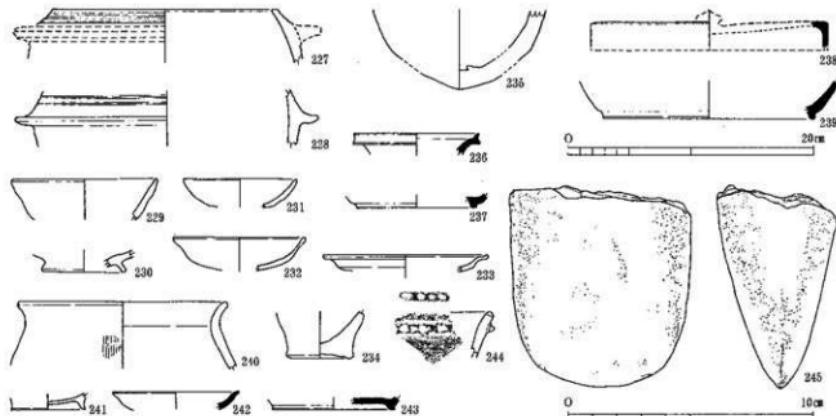
本調査区では、近代から縄文時代晚期までの遺構を検出している。遺構面は3面確認され、1面で近代、2面で中世、3面で縄文時代晚期から平安時代の遺構をそれぞれ検出した。

なお、地山は18~20層で、3面の遺構検出レベルでは19・20層の明灰褐色~灰褐色粗砂混じり疊層である。調査区中央部では19・20層がレベルを下げ谷状の地形を呈するが、この谷地形の西斜面にのみ18層の黄褐色シルトが堆積している。

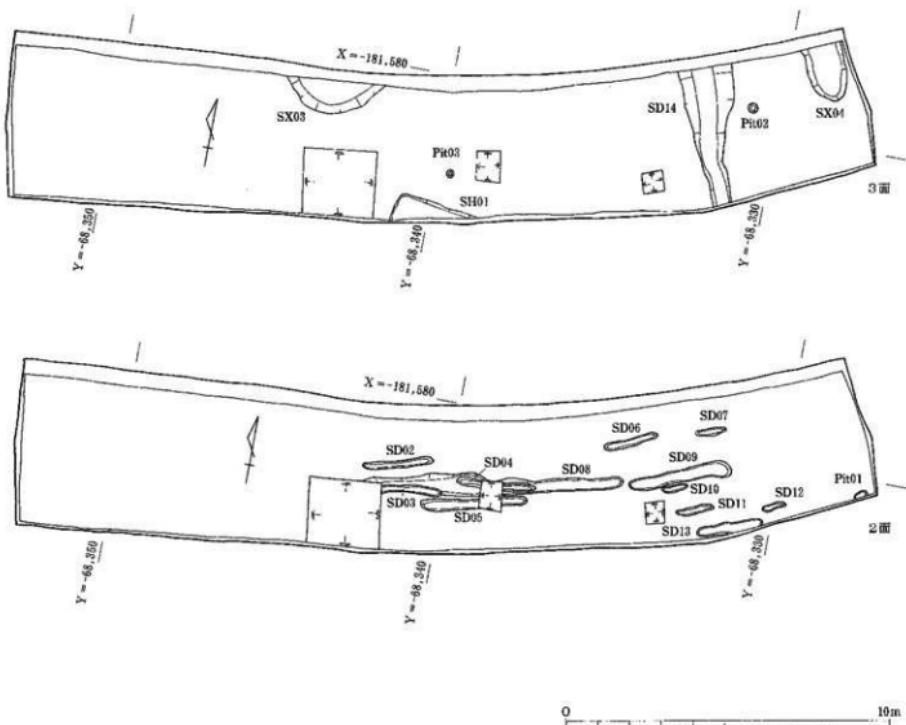
1面は、黄褐色シルト(4層)をベースとする。調査区西端で、現代の耕作地の区画とはほぼ重複する畦畔の他に、土坑などを検出した。これらの遺構のうち、土坑から近代以降の遺物が出土している。なお、本書ではこれらの遺構について触れていない。

2面は黒褐色シルト(5層)をベースとする。ほぼ東西方向に伸びる耕作痕を検出した。2面直上の黄褐色シルト(4層)からは土師質羽釜、土師器椀・甕・皿、須恵器壺・壺・蓋、真蛸壺(第49図227~239)が出上している。227・228は土師質羽釜である。いずれも内傾する頸部に段をもつ。14世紀。229・230は土師器椀である。229は内外面ともナデ、口縁端部はヨコナデで仕上げ、外面にはユビオサエがのこる。230は内外面ともナデ、高台はヨコナデで仕上げる。231~233は土師器皿である。いずれも内外面ともナデ、口縁端部はヨコナデで仕上げる。234は弥生土器壺である。器壁の磨耗が激しく調整は不明。中期のものか。235は土師質真蛸壺である。器壁の磨耗が激しく調整は不明。236は須恵器壺である。内外面とも回転ナデで仕上げる。237は須恵器壺である。238・239は須恵器壺及び蓋である。出土遺物にかなりの時期差があるが、2面直上の包含層である4層の年代は14世紀といえよう。

3面は調査区西側では灰色粗砂混じり疊、同じく東側では明褐灰色粗砂混じり疊をベースとする。縄文時代晚期及び弥生時代中期前葉の遺物が出土した谷地形、古墳時代から平安時代の土坑や堅穴住居、ピット、溝を確認した。調査区中央を南北にのびる谷地形は、その堆土から縄文時代晚期及び弥生時代中期前葉の遺物が出



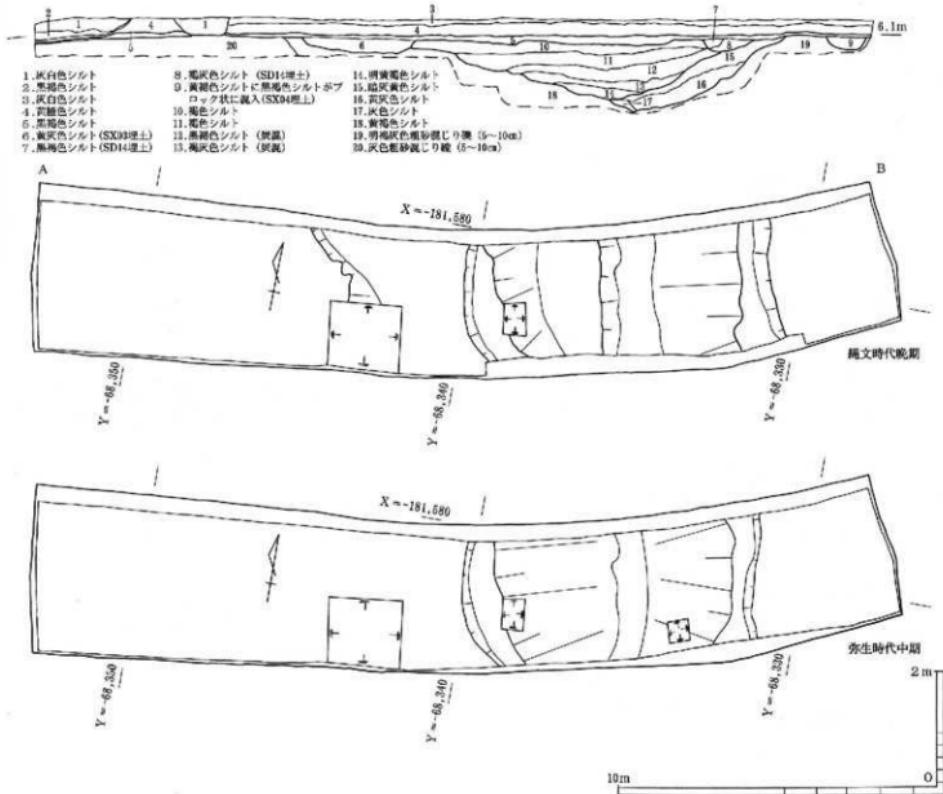
第49図 E区包含層出土遺物



第50図 E区2・3面平面図

としており、以下に出土状況などを詳しくみることとする。今回検出した谷地形は黄褐色シルトをベースとし、最大検出幅は約14m、深さ約1m。東側斜面に堆積する灰色から暗灰黄色シルト（15～17層）から縄文時代晚期の土器や石器が、その直上にあたる黒褐色～明黄褐色シルト（10～14層）から弥生時代中期前葉の遺物が出土した。縄文時代晚期の遺物が出土した最上層（15層）直上をベースと考えると、その規模は検出幅8m、深さは約0.6mとなる。のち、上記の谷地形の最終埋土である褐色シルト（10層）が堆積し谷地形が埋没し、古墳時代から奈良時代の造構が形成されたものと考えられる。

3面直上の黒褐色シルト（5層）からは、十師器甕・皿、黒色土器A類椀、須恵器甕、縄文土器深鉢、大型蛤刃石斧（第49図240～245）が出土している。240は土師器甕である。体部外面にハケメが残る。241は黒色土器A類椀である。器壁の磨耗が激しく調整は不明。242は須恵器皿である。口縁端部を回転ナデで仕上げる。243は須恵器甕である。244は縄文上器深鉢である。口縁端部やや下にやや丸みを帯びた断面三角形の突帯がつく。口縁端部及び突帯には刻目がほどこされている。胎土は河内。245は大型蛤刃石斧である。再利用などの



第51図 E区3面谷1平面図及び調査区断面図

痕跡はみられない。3面直上の包含層である5層の年代は10世紀後半代といえよう。

さきにみた包含層の年代から、各遺構面の年代幅を限定する。1面は、ベースとなる包含層（4層）の出土遺物から14世紀後半以降。2面は、直上包含層（4層）からその下限が14世紀で、ベースとなる包含層（5層）の出土遺物からその上限が10世紀後半。3面は、直上包含層（5層）の出土遺物から10世紀後半代以前。なお、各包含層から出土した遺物にはいずれも遺物に時期差がみられる。調査区断面でみられるいすれの層も数cm程度という浅い堆積で、最終遺構面である3面の検出面である19・20層直上から現在の地表面までは20cmほどしかない。おそらく、後世の耕作などの影響によるものであろう。

第2節 2面の遺構と遺物

2面では、ほぼ東西方向にのびる耕作痕12、ピット1を検出した。

SD02~13 (第50図、PL.14)

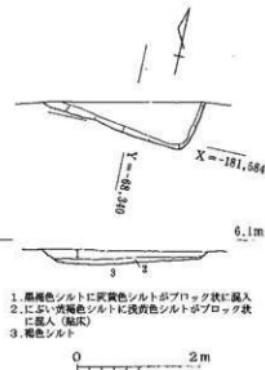
ほぼ東西方向にのび、大きいもので検出長約3.5m、幅0.2m。深さはいずれも0.2m以内で、埋土は明褐色シルト混じり褐灰色シルトのもの (SD02~03) と、黄灰色シルトのもの (SD04~13) に大別できる。耕作痕であろう。いずれからも遺物は出土していない。

Pit01 (第50図、PL.14)

直径約40cm、深さ約20cm。埋土は黄灰色シルトで、柱痕は確認されなかった。遺物は出土していない。

第3節 3面の遺構と遺物

3面では堅穴住居1、不明上坑2、溝1、ピット2、谷地形を検出した。



第52図 E区3面SH01平面図
及び断面図

SH01 (第50・52図、PL.14)

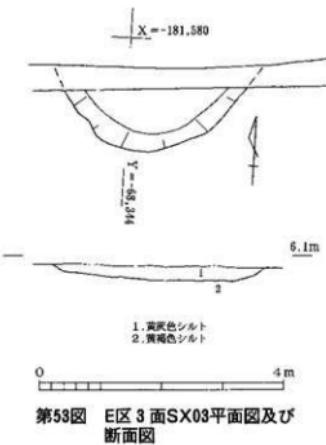
一部のみの検出である。平面プランは方形と考えられ、壁溝、柱穴などは確認されていない。埋土は2層に分かれ、このうちの下層は貼床と考えられる。遺物は出土していない。

SX03 (第50・53・55図、PL.14)

一部のみの検出である。検出長約3.4mで平面プランは椭円形であろう。遺物は須恵器壺(260~263)が出土している。これらの遺物から6世紀後半頃のものと考えられる。

SX04 (第50・54図、PL.14)

一部のみの検出である。検出長約1.8mで平面プランは長楕円形であろう。埋土がブロック状に混じり合っていることから、人為的に埋められたものかもしれない。遺物は黒色土器A類碗、土師器碗・壺・皿、須恵器杯蓋、鉢、土錘(246~259)などが出土している。246・247は土師器碗である。器壁の磨耗が激しく調整は不明。249~252は土師器皿である。口縁端部をヨコナデで仕上げ、このうち249~251は外表面をナデで仕上げ、252は底部外面にユビオサエが残る。253は土師器壺である。254は土師器高杯であろうか。口縁端部をヨコナデで仕上げる。255は須恵器杯蓋である。小片のため口径は不明。256は須恵器鉢である。257・258は黒色土器A類碗である。259は土師質の土錘である。磨耗が激しく調整はわかりづらいが、表面にいびつな凹凸がみられることから、ユビオサエで仕上げたのであろう。これらの遺物から10世紀後半のものと考えられる。



第53図 E区3面SX03平面図及び
断面図

SD14 (第50図、PL.14)

ほぼ南北方向に伸びる溝である。現在の耕作地の区画方向とほぼ一致するが、埋土は黒褐色シルト及び褐色シルトで、ラミナなど水流があった痕跡はみられない。遺物は検出されなかった。

Pit02・03 (第50図、PL.14)

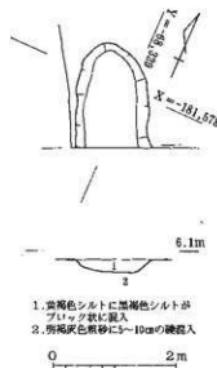
Pit02は直径0.2m、深さ0.2m。柱痕がみられるが、調査区の範囲内では対応するピットは確認できず、掘立柱建物とは認識しなかった。このピットが掘立柱建物を構成すると仮定した場合、柱間は約2m以上の北西-南東方向に主軸をもつものになる。埋土は柱痕部分が褐色シルト、掘形が黒褐色シルトである。遺物は出土していない。Pit03は、直径約0.3m、深さ約0.2mで、柱痕は確認されなかった。埋土は黄灰色シルトで、遺物は出土していない。

谷1 (第51・56図、PL.15)

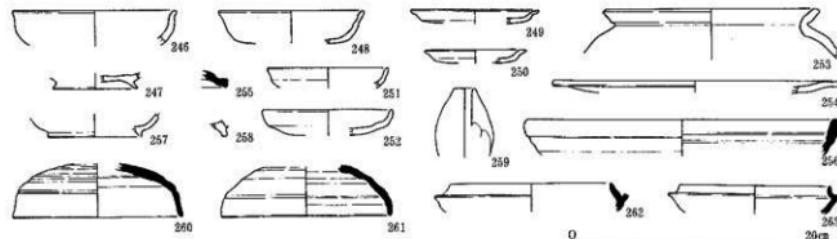
調査区中央部付近で確認した。以下、今回検出した谷地形を谷1と呼称する。谷1は、第1節で述べたとおり、出土遺物の時期差から埋積過程がふたつに分けられる。土層観察の結果、現地調査では、最終埋土である褐色シルトを1層、炭混じり黒褐色シルトを2層、炭混じり褐色系シルトを3層、暗灰黄色シルトを4層、黄灰色シルト及び黒褐色シルトブロック混じり黄褐色シルトを5層とし、遺物の取り上げを行った。以下それに準じて、遺構及び出土遺物についてみていくこととする。

調査区の南側及び北側断面の土層を比較すると、3・4層など北側断面でみられる層位が南側断面では確認できず、検出幅及び遺構検出面からの深さが調査区南側のものより北側のはうが大きい。北側に広がる谷地形であろう。最終埋土である1層以外は、東側から流入したような堆積状況を呈し、遺物の出土状況も東側斜面からの出土がほとんどであった。このように堆積土が東側斜面に偏り、かつ遺物の出土状況も東側斜面から多く出土していることから、谷1にみられる埋土は人為的なものの可能性も考えられる。いずれにせよ、谷1の南東側に縄文時代晚期及び弥生時代中期前葉の集落が存在する可能性が高い。

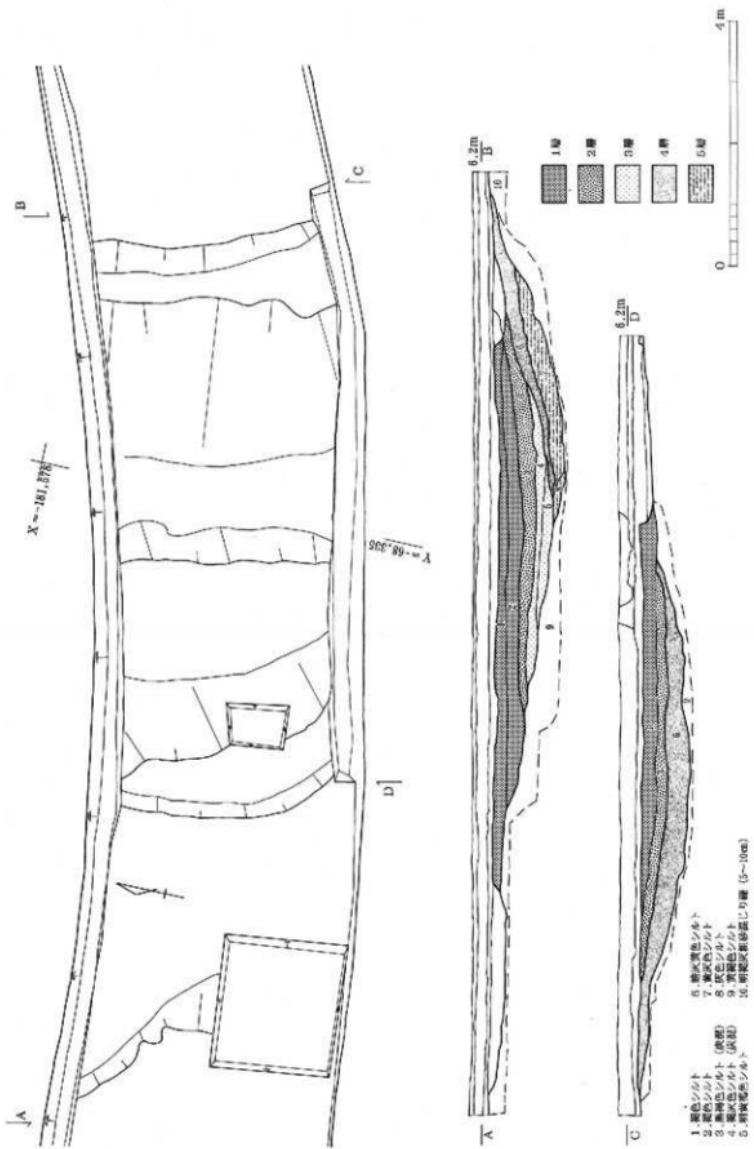
各層からの遺物の出土状況を概観すると以下のようになる。1・2層からは弥生時代中期前葉の遺物が出土しているが、そのほとんどが2層からの出土である。当該時期の土器や石器類のほかに、図示はしていないが流紋岩片も出土している。つづく3層からは遺物はほとんど出土せず、その直下の4・5層から縄文時代晚期の土器及び石器類が出土した。なお、縄文時代晚期の遺物の多くは5層から出土している。なお、今回図示していないが両時期の遺物が多く出土した2・5層からは被熱痕（煤が付着したり、赤変しているもの）のある



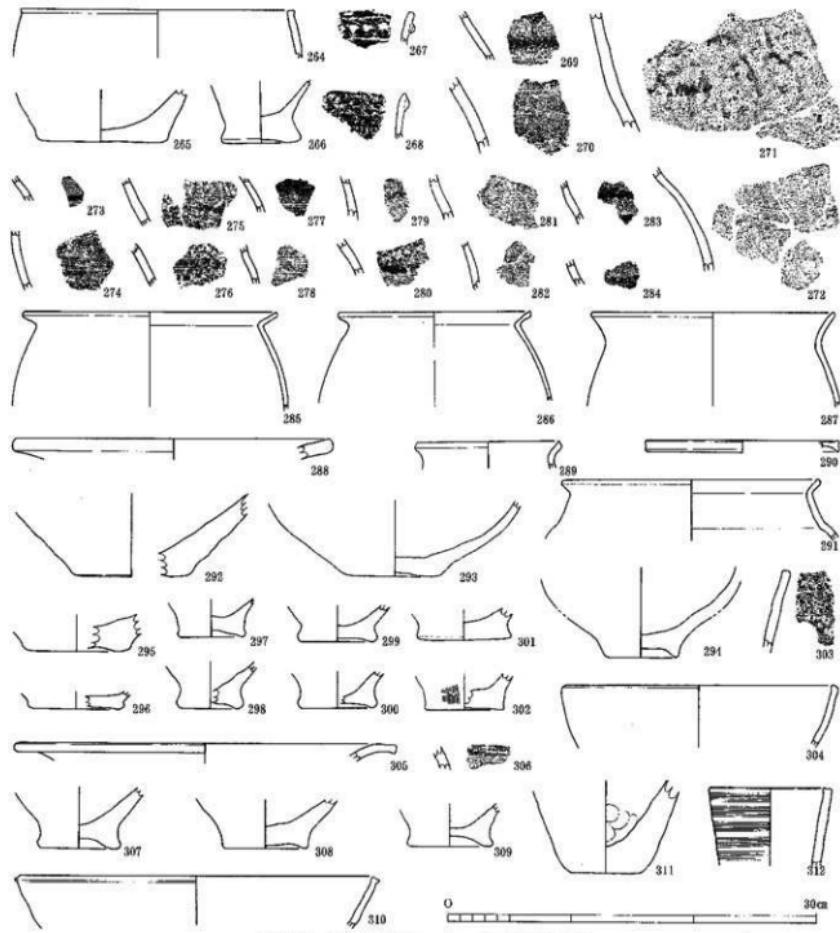
第54図 E区3面SX04
平面図及び断面図



第55図 E区3面SX03・04出土遺物



第56図 E区3面谷1平面図及び断面図



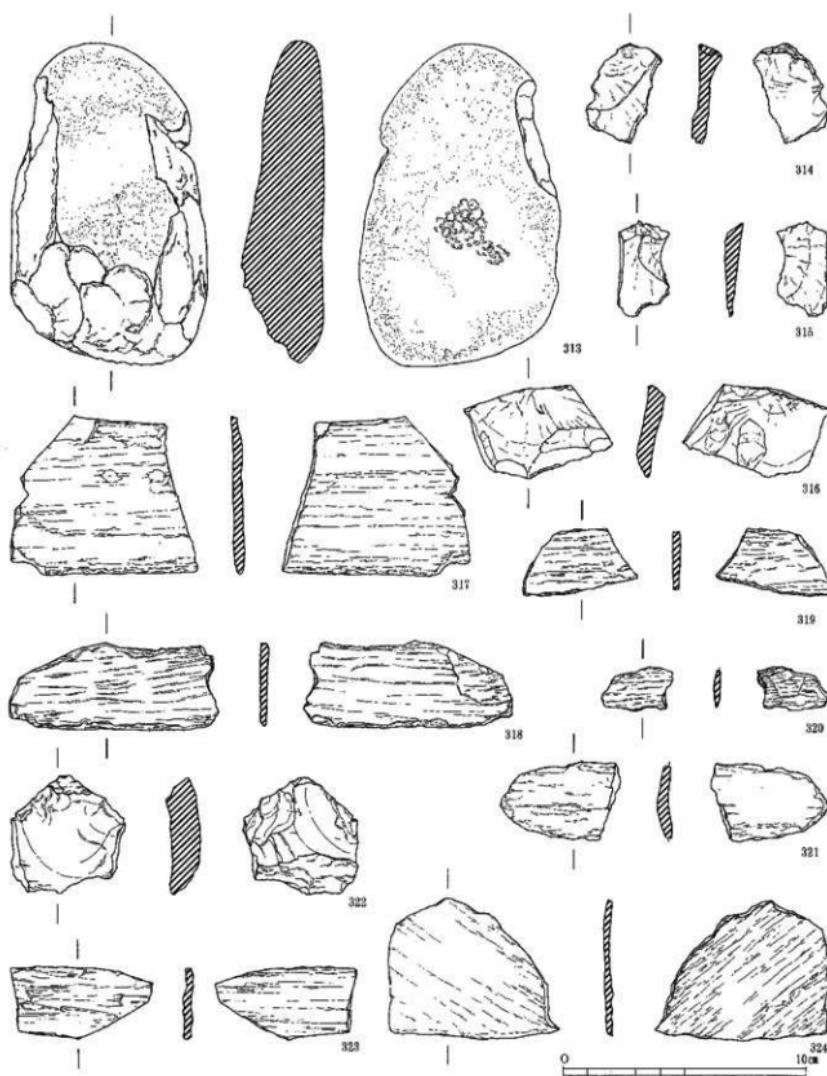
第57図 E区3面谷1 1~3層出土遺物①

小砾(10cm前後)のものが若干出土している。以下に各層から出土した遺物をみていくこととする。

谷1出土の弥生時代中期の遺物(第57図)

谷1出土の遺物のうち1~3層から出土した遺物は、弥生時代のものである。弥生土器のほか、砂岩・サスカイト・紅麻片岩・結晶片岩・チャートの石器や石材が出土した。

264~268は3層出土の上器である。264は鉢であろうか。口縁端部に平坦な面をもち、内外面ともナデで仕上げる。265・266は壺の底部である。いずれも磨耗が激しく調整は不明。267・268は縄文土器深鉢である。まるくおさめる口縁端部やや下に、断面かまぼこ形の突帯がつく。いずれも刻目がほどこされており、267はD



第58図 E区3面谷1 1～3層出土遺物②

字、268は不明。器壁の磨耗が激しくいすれも調整は不明。下層からの混入であろう。

269～304は2層出土の土器である。269～278は壺の体部である。器壁の磨耗が激しく、調整は不明。いすれも体部外面にほどこされたクシ描文が若干残る。269は直線文の末端に扇形文、270～282は直線文、283は波状文、284は直線文と波状文がほどこされている。285～287は甕である。いすれも器壁の磨耗が激しく調整は不明。このうち、287は胎土に片岩を含む。288～291は壺口縁部である。いすれも口縁端部はヨコナデで仕上げる。292～296は壺もしくは甕の底部である。このうち、292～298は壺であろうか。いすれも、器壁の磨耗が激しく調整は不明。底部の形態はあげ底状になるものがほとんどであるが、底部から体部の器形で2タイプに分類できる。299～302は甕であろうか。302は外面にハケメ、内面にはユビオサエがみられる。他は、器壁の磨耗が激しく調整は不明。303・304は鉢口縁部である。303は外面にクシ描直線文がほどこされている。304は磨耗が激しく調整は不明。

305～312は1層出土の土器である。305は壺口縁部である。口縁端部にヨコナデをほどこす。306は壺体部である。外面にはクシ描直線文をほどこす。307～309は壺もしくは甕の底部である。307・308は壺、309は甕であろう。器壁の磨耗が激しく調整は不明。このうち、309は胎土に片岩を含む。311は真蛸壺の底部であろうか。磨耗が激しく調整は不明。312は鉢口縁部である。外面には5単位のクシ描直線文。口縁端部はヨコナデ、他はナデで仕上げる。310は高杯であろうか。口縁端部はヨコナデ、体部内外面はナデで仕上げる。

以上、谷1の1～3層は、壺体部のクシ描文の文様構成から、弥生時代中期前葉といえる。埴口氏の編年^①にあてはめるなら、おおよそII-2様式になろうか。

弥生時代中期の石器及び石材（第58図、PL.26）

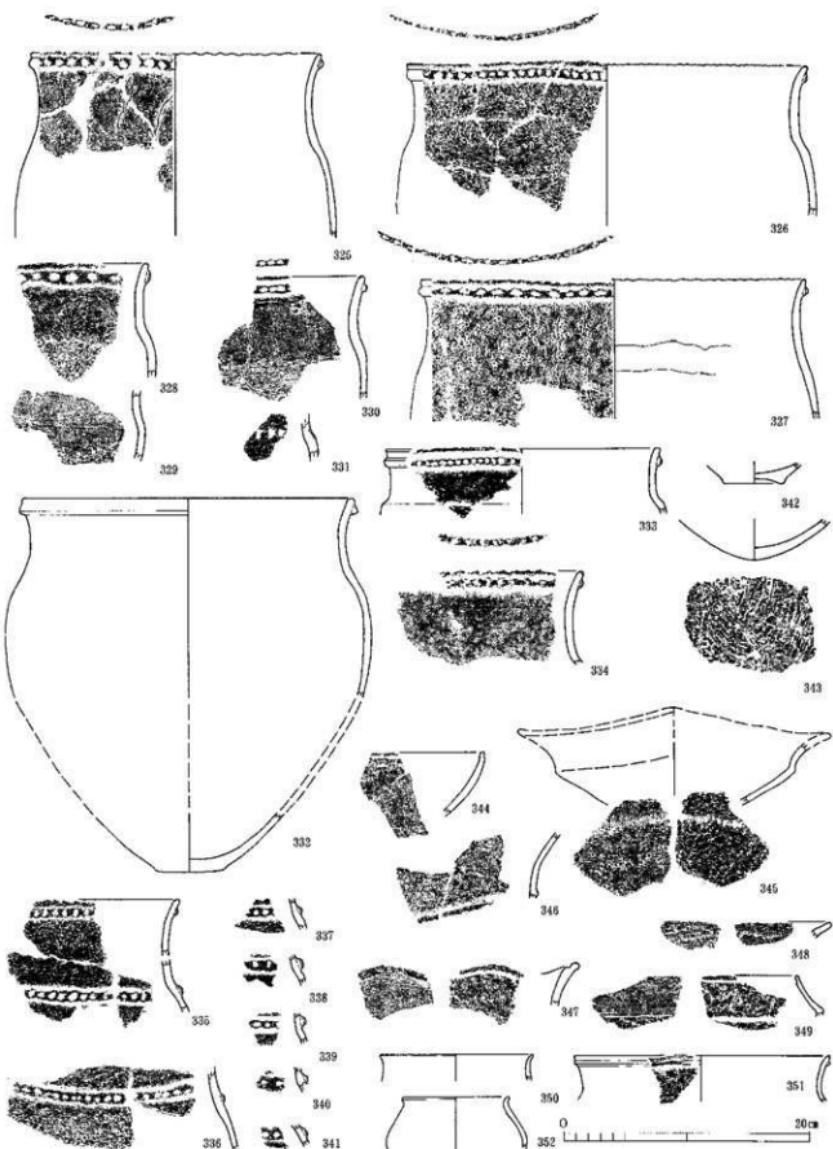
313～322は2層から出土した。313は砂岩で剥離痕がみられる。314～316はサスカイト製の不定形刃器である。317・318は薄い板状の製品で一部欠損している。正製品の製作に用いる石鋸か。刃部と考えられる個所には、刃潰れ状の使用痕がみられる。このうち317は紅簾片岩、318は結晶片岩である。これらの石材剥片と考えられるもの（319・320）も数点出土している。321は緑色片岩である。形態から石包丁の木製品であろう。322は緑色のチャートである。人為的な剥離痕が観察できるが、何に用いたのかは不明。323・324は1層から出土した。いすれも剥片で、323は紅簾片岩、324は結晶片岩である。

谷1出土の縄文時代晩期の遺物（第59・60図、PL.25・26）

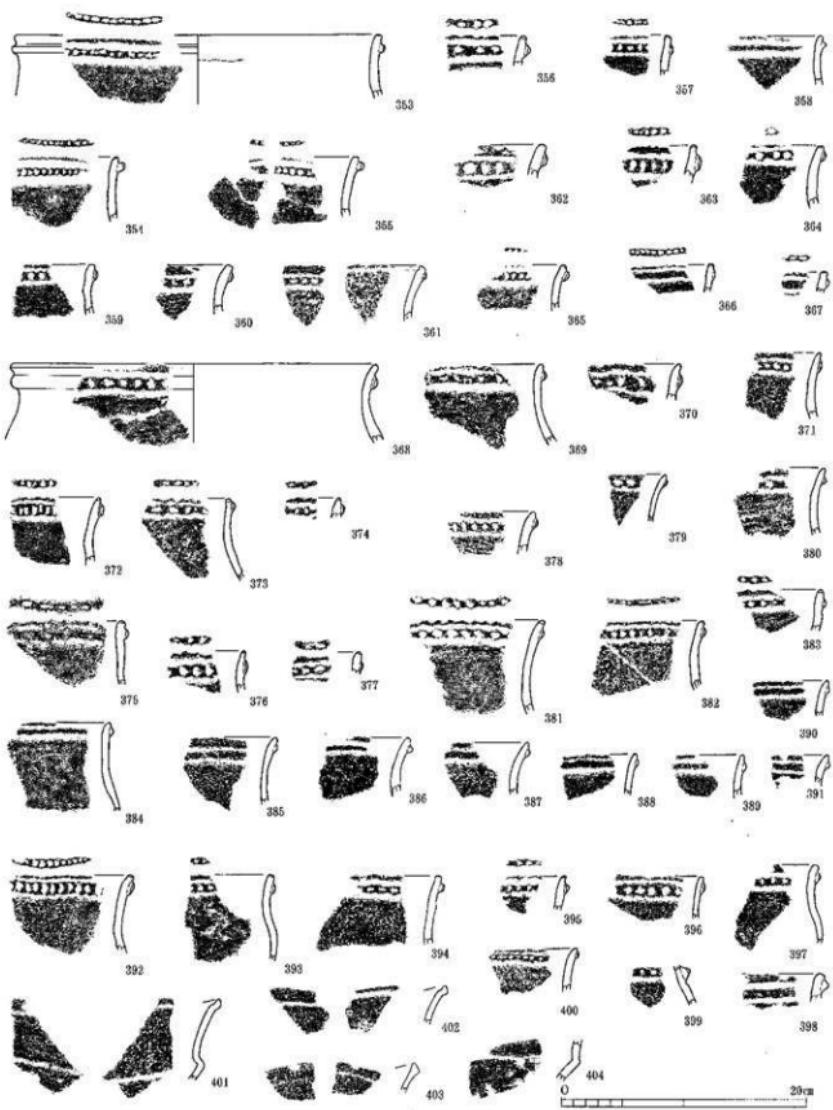
谷1出土の遺物のうち、4・5層の遺物は縄文時代晩期のものである。縄文土器のほか、不定形刃器、石棒、石皿、敲石などの石器類が出土している。

図示した縄文土器のうち、325～391は5層から、392～404は4層からそれぞれ出土した。深鉢及び浅鉢が出土している。図示している土器は、出土したものうち器種及び部位が判別でき、実測可能なものをすべて掲載した。総じて器壁の剥離が激しく調整は判別しづらい。胎土には多様性がみられ、色調や砂粒の多寡、胎土の粗密を重視すると20種以上に分類される。今回、在地か否かを判断することを目的に、河内、紀伊、在地の基準を、角閃石、片岩、クサリレキの有無とし観察したが、明確に判別できたのは、河内のもののみであった。というのも、クサリレキと片岩を併せもつ個体があることから、紀伊と在地の判別は厳密には行えないと判断した。以下、胎土について、河内と考えられるものはその都度指摘するが、それ以外のものについては特に言及しない。

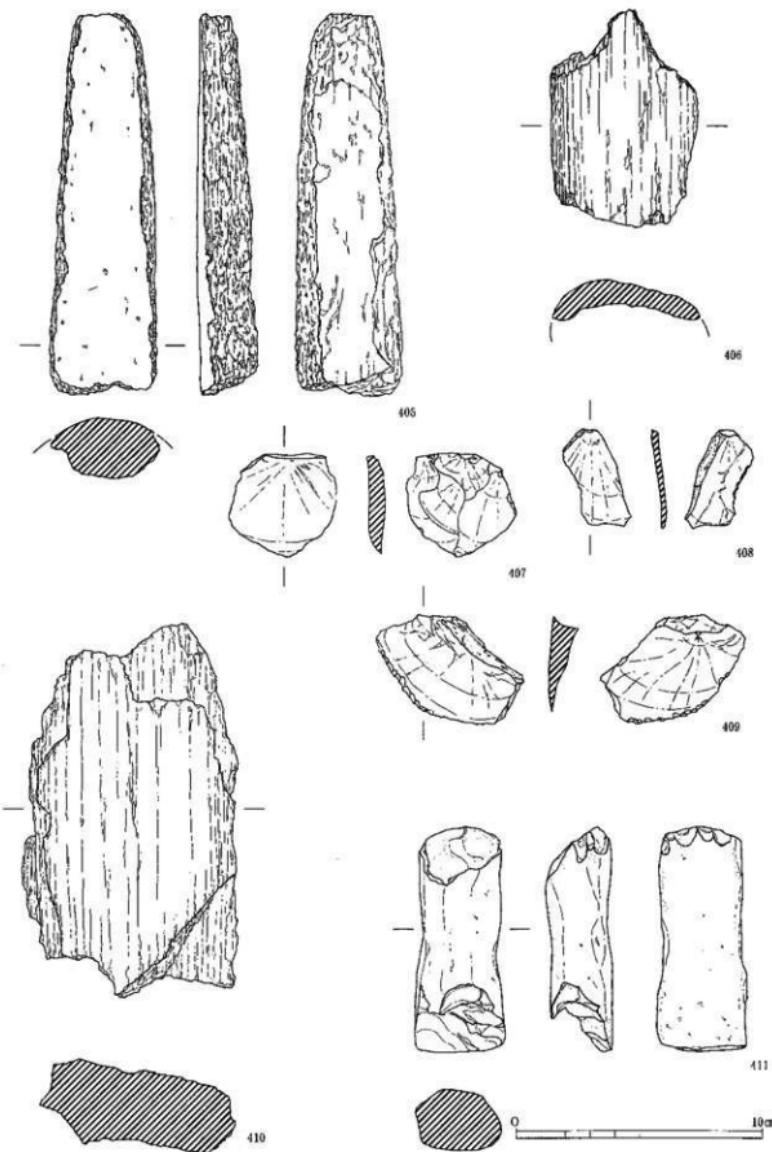
325～391は5層出土の縄文土器である。325～334は、一条突帯の深鉢である。頸部と肩部の境に肩曲点をもつものともたないものがある。



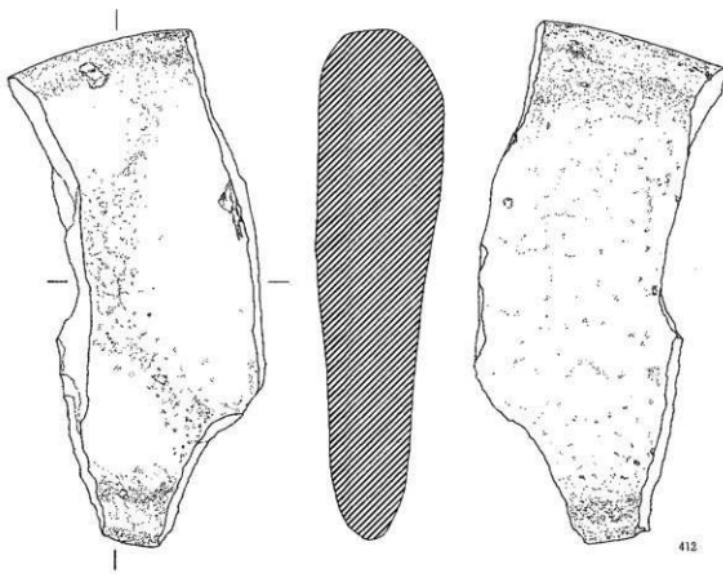
第59図 E区3面谷1 4・5層出土遺物①



第60図 E区3面谷1 4・5層出土遺物②



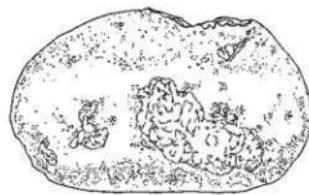
第61図 E区3面谷1 4·5層出土遺物③



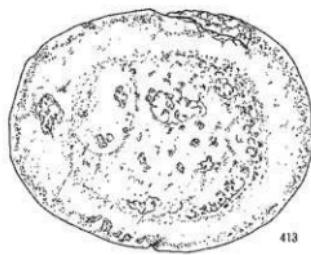
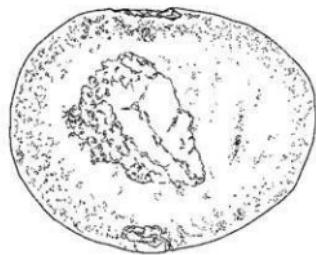
412



0 10cm



413



第62図 E区3面谷1 4・5層出土遺物④

325～332は頸部と肩部の境に明確な屈曲点をもたないもの。いずれも口縁端部はまるくおさめる。325～330は肩部以下に横方向のケズリ、頸部外面及び内面はナデである。332は調整不明。331は肩部に半裁竹管によるC字刺突文がみられる。325～327は断面カマボコ形、330は断面台形、332は口縁端部やや下に断面三角形の突帯をもつ。325～327・330は口縁端部及び突帯上に、328は突帯上にO字刻目をもつ。

333・334は頸部と肩部の境に明確な屈曲点をもつもの。口縁端部に面をもつ。いずれも頸部内外面は横方向のナデ、333には肩部以下に横方向のケズリがみられる。333は断面台形、334は断面三角形の突帯をもつ。333は突帯にのみO字、334は口縁端部にO字で突帯にD字の刻目をもつ。

335～341は二条突帯の深鉢である。いずれも内外面はナデで仕上げる。335～337・340・341は断面三角形、338・339は断面台形の突帯をもつ。いずれも突帯にO字の刻目をもつ。このうち、337は河内の胎土。

342・343は深鉢の底部である。342は調整不明、343は外面に不定方向のケズリ、内面に条痕らしき痕跡が残る。

344～349は浅鉢である。344は楕形で、口縁端部外面に一条の沈線がめぐる。調整は不明。胎土は河内。345～347は屈曲する肩から外反しつつ立ち上がるるもので波状口縁であろう。このうち、347には口縁端部内面に沈線がみられる。347の外面にはミガキがみられるが、その他は調整不明。348は健形の口縁か。内外面ともナデ。349は「く」字形で、口縁端部内面と屈曲部外面のやや上には沈線がみられる。外面にはミガキがみられる。

350～352は浅鉢であろうか。351には断面三角形の突帯がつく。352は外面にミガキがみられるが、この他の調整不明。

353～391は深鉢であるが、口縁部のみの出土で突帯数及び器形が判別できず、上記の分類項目にあてはめることが出来なかったもの。およその推定は可能であるが、ここでは口縁端部・突帯断面形状・刻目形状のみの記述にとどめる。このうち、353～367は口縁端部に平坦面をもつもので、368～391は口縁端部をまるくおさめるものである。

口縁端部に平坦面をもつものには、突帯の断面形状が台形、三角形、カマボコ形の3タイプがみられる。353～355断面台形の突帯がつくもの。いずれも口縁端部と突帯にO字の刻目をもつ。内外面ともナデ。356～358は断面三角形の突帯がつくもの。このうち356・357には口縁端部及び突帯にO字の刻目をもつ。358は刻目をもたない。内外面ともナデ。356は河内の胎土。359～367は断面カマボコ形の突帯がつくもの。このうち、359～362は突帯に、363～365は口縁端部及び突帯に、366・367は口縁端部にそれぞれ刻目をもつ。刻目の形態は、362・363がD字、365が口縁端部にO字で突帯にD字、その他はO字。361は口縁端部内面に沈線がめぐる。361・362・365の胎土は河内。

口縁端部をまるくおさめるものには、突帯の断面形状がカマボコ形、三角形の2タイプがみられる。368～377は断面カマボコ形の突帯がつくもの。368～371は突帯に、372～377には口縁端部及び突帯に刻目をもつ。突帯刻日の形態は、368～370・376がD字、372が半裁竹管による刻目、それ以外はO字。口縁端部刻日の形態は、376がD字でそれ以外はO字。368は肩部以下にケズリがみられ、内外面ともナデ。それ以外は内外面ともナデ。368の胎土は河内。

378～391は断面三角形の突帯がつくもの。378～380は突帯に、381～383は突帯及び口縁端部に刻目をもち、384～391は刻目をもたない。刻日の形態はいずれもO字。調整は、381は外向に横方向のケズリがみられ、内面はナデ。これら以外は、内外面ともナデ。このうち、383・384は河内の胎土。

392～403は4層出土の繩文上器である。392～400は深鉢、401～404は浅鉢である。

392・393は頸部と肩部に明確な屈曲点をもたない。いずれも口縁端部はまるくおさまり、断面カマボコ形の突帯をもつ。刻目は口縁端部及び突帯にみられ、いずれもD字である。内外面ともナデ。

394以下は頸部から肩部にかけての器形が把握できないものである。394は平坦面をもつ口縁端部に断面台形

の突帯がつく。突帯にのみO字刻目をもつ。調整は内外面ともナデ。395はまるくおさめる口縁端部に、断面三角形の突帯がつく。口縁端部及び突帯にD字の刻目をもつ。内外面ともナデ。396は平坦面をもつ口縁端部に、断面三角形の突帯がつく。突帯にのみO字の刻目をもつ。調整は内外面ともナデ。397は平坦面をもつ口縁端部に、断面台形の突帯をもつ。突帯にのみD字の刻目をもつ。調整は内外面ともナデ。398は平坦面をもつ口縁端部に断面三角形の突帯がつく。刻目はみられない。

399は二条突帯の深鉢である。断面三角形の突帯に、O字の刻目をもつ。内外面ともナデ。

400はやや先細りした口縁端部に断面カマボコ形の突帯がつく。ごく小さなO字の刻目をもつ。内外面ともナデ。河内の胎土。

401～404は浅鉢である。屈曲する肩から外反しつつ立ち上がるもので波状口縁であろう。401～403は口縁端部内面に、404は肩部のやや上にそれぞれ沈線をもつ。調整は401の外面にミガキがみられるが、その他は不明。

以上、谷1出土の土器のうち、より一括性が高いと考えられる5層出土の土器は、器種構成では深鉢が86.6%、浅鉢が13.4%。胎土では、河内のものが13.4%、それ以外が83.6%である。既存の編年では、深鉢の口縁端部の形態及びO字刻目の優位性、浅鉢の形態から濱賀里N式^①の比較的新しい段階に該当するのではないか。また、本遺跡から約2km南西の向出遺跡において縄文時代晩期の土器が出土しており、岡田氏による第1～3段階の時期設定が行われている^②。この各段階設定の基準を参考にすると、今回報告した土器のうち一条突帯深鉢の特徴は以下のように指摘できる。①口縁端部の形態では、平坦面をもつものが38.3%、まるくおさめるものが61.7%で、後者がやや勝る。②口縁端部における刻目をもつものの比率は、前述の①でみた両者では前者が77.8%、後者が48.3%で、口縁形態に關係なく総数に占める割合では48.9%と資料の扱い方で評価が分かれる。③突帯断面形態は台形が10.6%、カマボコ形が49%、三角形が40.4%で、断面台形のものが占める割合が低い。④突帯上の刻目形態は、D字が4.2%、O字が46.8%、刻目をもたないものが49%となり、O字と刻目をもたないものがほとんどを占める。本遺跡における二条突帯深鉢及び浅鉢などの存在から単純に比較することは困難かもしれないが、おおよそ第2段階（口酒井期）に該当しようか。

縄文時代晩期の石器及び石材（第61・62図、PL.26）

405が4層から、406～413が5層から出土した。405、406は破損した石棒である。405は、側面に周囲からの細かい剥離をうけたような痕跡があり、破損後、もしくは意図的に破碎後、再利用したことがうかがえる。緑色片岩。406は破損後の再加工の痕跡はみられない。緑色片岩。407～409は不定形刃器。刃部には片面もしくは両面からの細かい剥離がみられる。410は紅縞片岩。411は人為的な剥離痕のある石材。材質は不明。412は石皿。異なる方向性をもつ磨面がみられる。片面のみの利用。413は敲石。敲打痕及び摩滅痕がみられる平坦面をもち、側面に敲打痕がみられる。また平坦面の裏側には、敲打痕のはかに、断面V字のくぼみがみられる。

註 ① 横口吉文1990「和泉地域」『赤丸土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社

② 家根祥多1982「縄文土器」『長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（財）大阪市文化財協会

③ 岡田憲一2000「N期の様相」『向出遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター

第7章 まとめ

3カ年をかけておこなった今回の男里遺跡の発掘調査は、私たちの前に予想を超えた数多くの歴史情報を提示することになった。時代別にその成果を概観することによって今回の報告のまとめとしたい。

縄文～弥生時代では、E区において谷を検出した。埋土からは縄文時代晚期の遺物が多數みつかっており、特に東側斜面から出土が顕著であった。周辺における過去の調査^①においても、調査区の東から北東方向約200mの範囲において当該期の遺構・遺物が確認されており、不明な点が多いものの、この谷を西限として集落のひろがりが推測される。

古墳時代では、B・D区及びE区において竪穴住居を計3棟確認した。B・D区において検出した竪穴住居は時期的には5世紀末から6世紀前半と考えられ、どちらもカマドを有し、土器を支脚として利用している点で共通している。また、D区のものは一辺7.2mを測る大型の規模をもっており注目に値する。おそらくこの時期に集落及び生産域の拡大が活発に行われたのであろう。E区で検出した竪穴住居は時期等は明確ではないが、おそらくB・D区のものとはほぼ同じ時期と考えられる。

飛鳥・奈良時代においては、D区で掘立柱建物(SB04・05)が確認されている。しかしその他では目立った遺構・遺物は認められない。遺跡中央に位置する双子池西側周辺において当該期の掘立柱建物^②や遺物^③が検出されていることから考えると、集落の範囲がやや山側に移動するのであろう。

平安時代になると再び土坑やピットなどが確認されるようになり、D区のSB12など、広をもつ建物も出現する。明確ではないがD区で検出した多数の掘立柱建物もこの時期に属するものが多いのではないだろうか。

中世では、B～D区において鉢塗の生産遺構が確認された。平面が円形を呈するものが多いが、ロストル式の窯も1基見つかっている。窯は瓦窯にその系譜を求めることができると考えられ、円形のものに若干先行すると推測されるが明らかではない。しかし、どれほどの時期差があるのかは、その生産方法とともに解明しなければならない課題といえる。遺物では紀伊系の土釜などが確認された。調査地周辺がその影響を強く受けている証拠となるものである。14世紀後半になると調査地全体がほぼ耕作地として利用されるようになる。現在の男里集落の初瀬的なものが形成されはじめた時期と考えられる。

その後、近世から現代にいたるまで、調査地は連綿として耕作地となっていたようである。ほとんどの調査区で検出された耕作痕はこの証となるものであろう。

以上、本調査の成果を概観したが、あくまで得られた情報を報告したに留まっており、遺物や遺構などを様々な角度から分析・考察するには遠く及んでいない。しかし、これらの情報を提示することによって一定の責は果たせたと感じている。

男里遺跡は昭和17年、藤岡謙二郎氏によって報告・周知されて以来、今年で60年を迎えるとしている。昭和50年代以降、本格化した行政による発掘調査は、小規模ながらしかし確実に当遺跡のもつ様々なデータの蓄積を行い、またその重要性を明らかにしてきた。現段階では旧石器時代から近世に至るまで、連綿とつづく人々の足跡を辿ることができるようになり、泉州地域における代表的な複合遺跡として認知されるに至っている。

しかし、本調査でも再確認された男里遺跡のもつ幅広く、奥深い歴史情報をさらに明確にしていくには今後、市内のみにとどまらず、周辺各地の遺跡との時代別・地域別のクロスチェックを行い、それぞれの時代背景などとともに、総合的な見地から多角的に遺跡の研究・検討をしていかなければならないことは言うまでもない。まさしく男里遺跡の研究は今始まったばかりなのである。

註 ① 泉南市教育委員会1996「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』

泉南市教育委員会1997「男里遺跡96-6・7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』

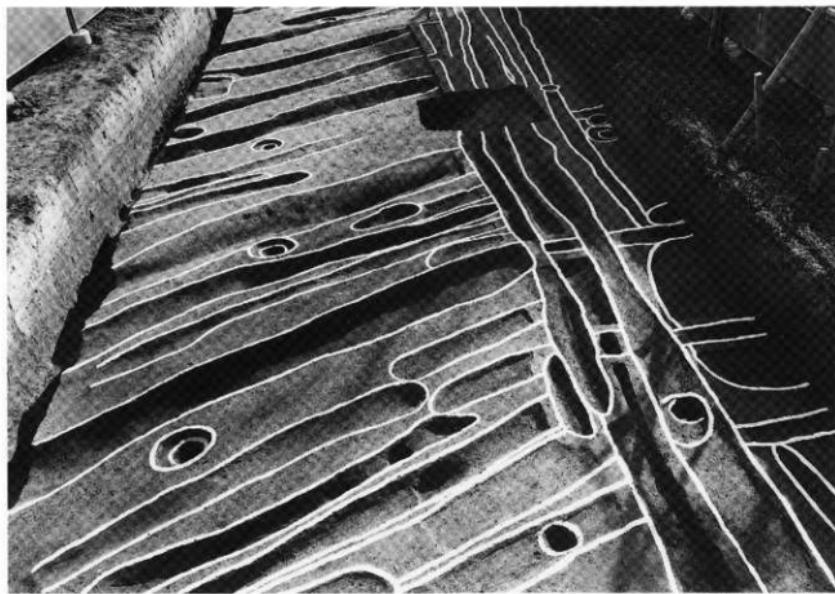
② 泉南市教育委員会1978「男里遺跡発掘調査報告書」

③ 大阪府教育委員会による双子池堤体改修とともに一連の調査

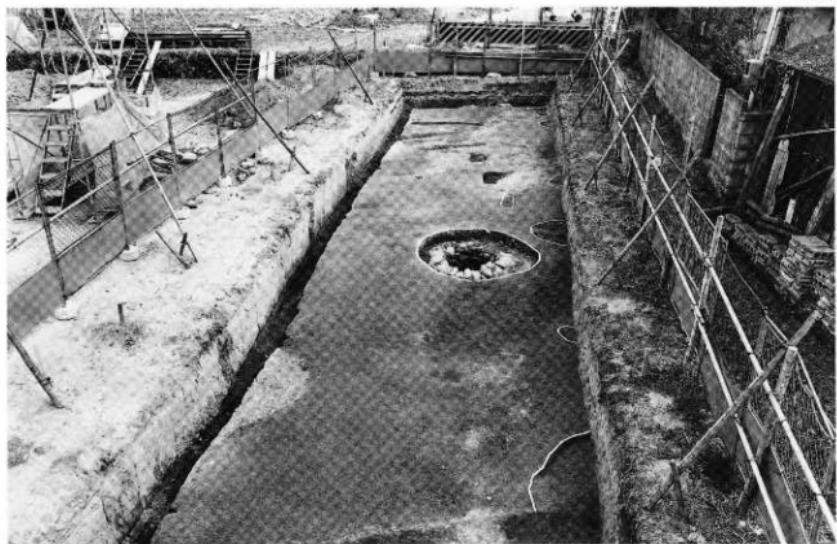
図 版



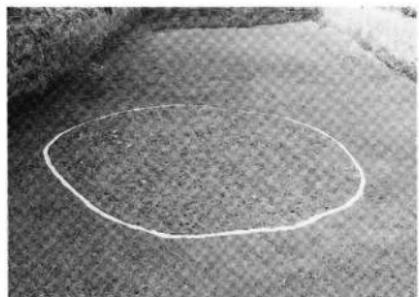
I面全景（北西から）



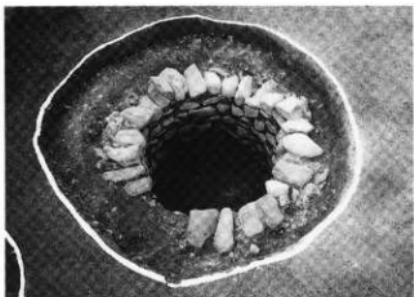
SB01 (北西から)



2面全景（北西から）



SE01①検出状況（東から）



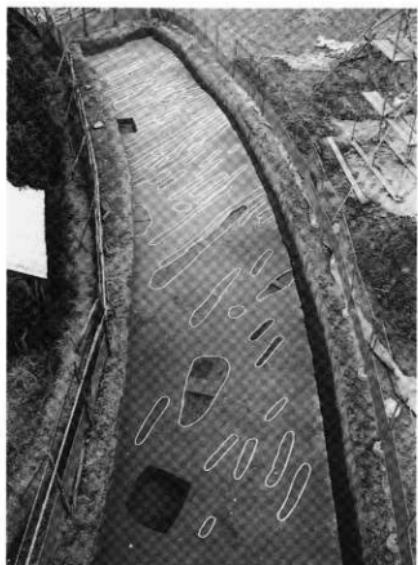
SE01③（東から）



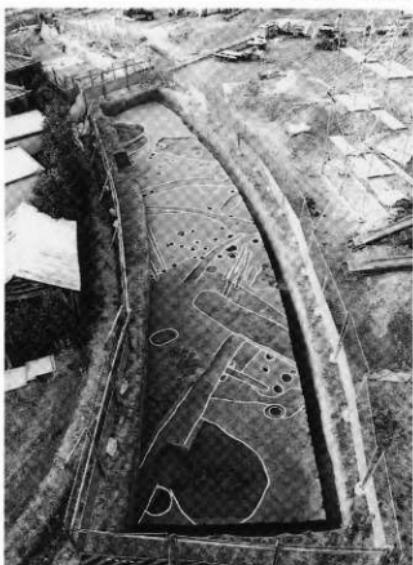
SE01②（東から）



SE01④（南から）



1面全景（南東から）



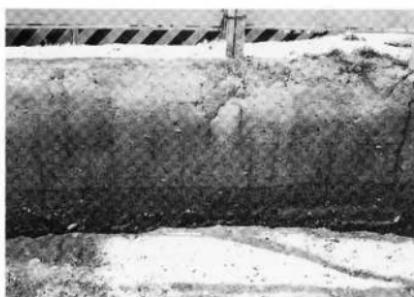
2面全景（南東から）



土層（南から）



SB01（南から）



土層（北西から）



同上（西から）



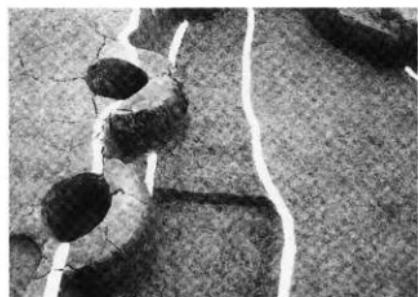
SH01 (東から)



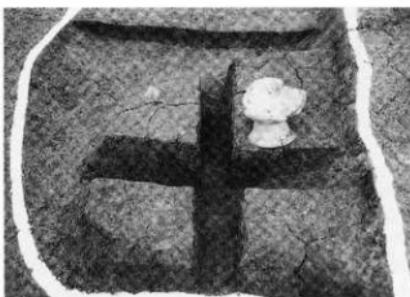
SH01 (北から)



SH01カマド遺物出土状況 (南東から)



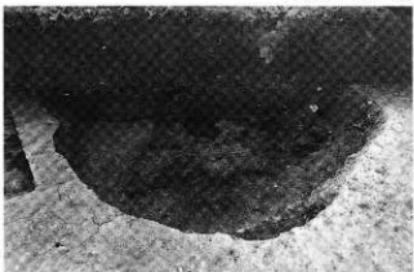
SH01壁溝 (南から)



SH01カマド断面 (東から)



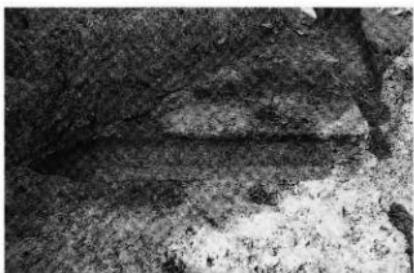
窯（北から）



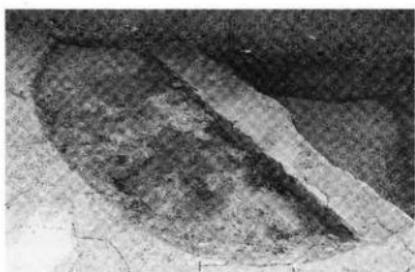
SK02（北東から）



窯（東から）



SK02断面（東から）



SK01（北東から）



SK03（北から）



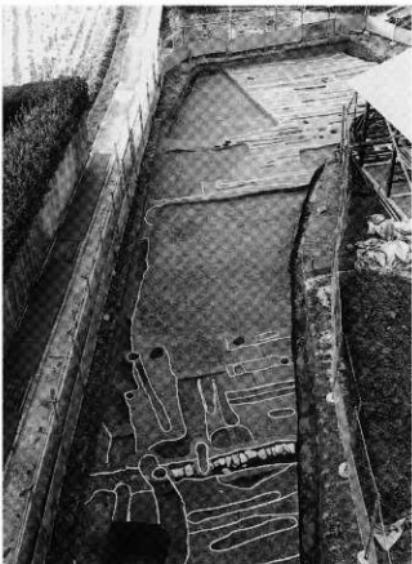
SK01断面（東から）



SK03断面（北東から）



1面全景（東から）



2面全景（東から）



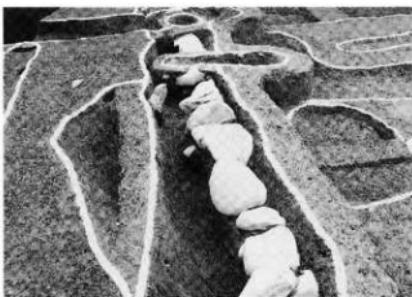
1面全景（北から）



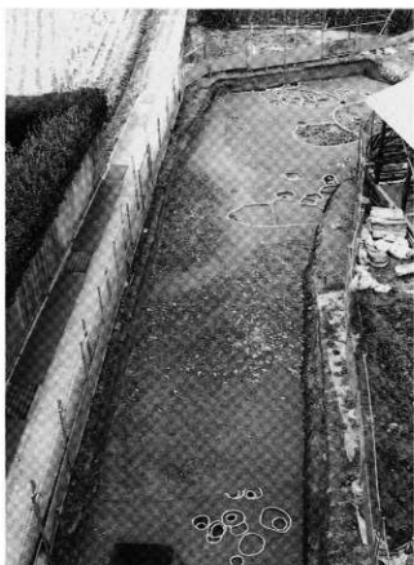
2面全景（北から）



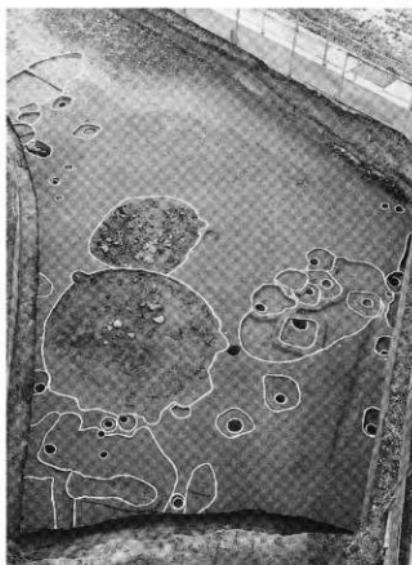
1面全景（東から）



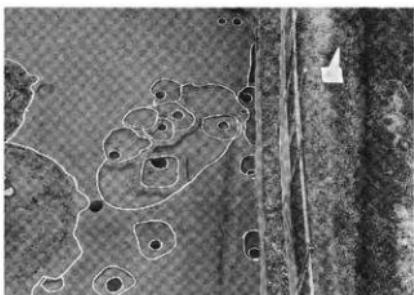
SDI2（北から）



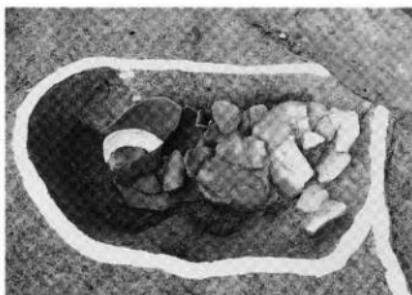
3面全景（北から）



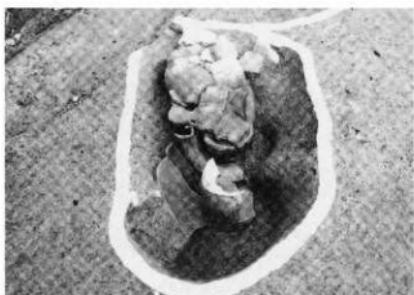
3面全景（北から）



SB01（北から）



SK14遺物出土状況（南から）



SK14遺物出土状況（西から）



SK14遺物取り上げ後（南から）



SK01・02 (北西から)



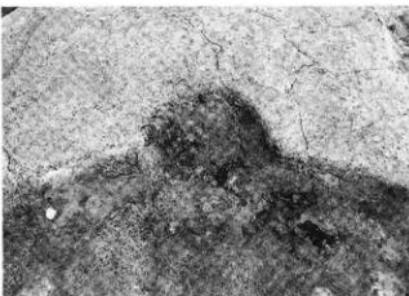
SK01 (南から)



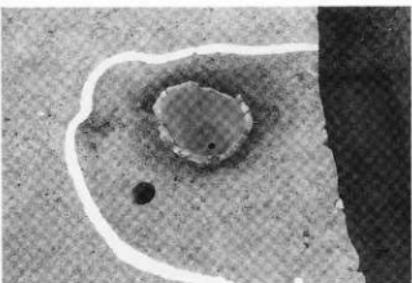
SK01遺物取り上げ後 (南から)



SK02遺物出土状況 (南から)

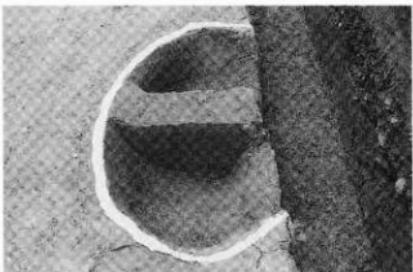


SK02詳細 (西から)

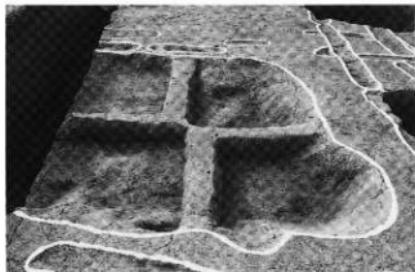




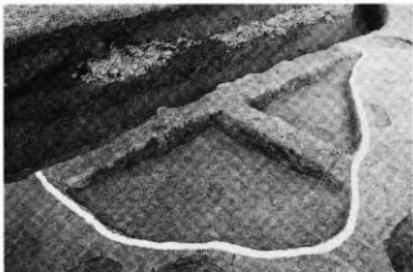
SK07・08 (北東から)



SK18 (東から)



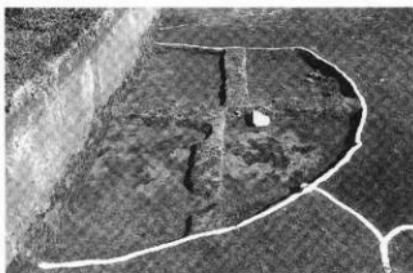
SK09 (北西から)



SK19 (南西から)



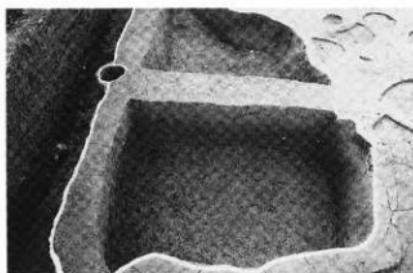
SK10 (北東から)



SK20 (南東から)



同上 (北西から)



SX01・02 (東から)



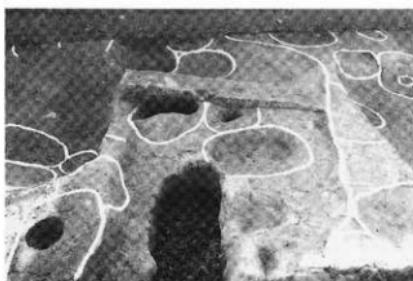
4面全景（北西から）



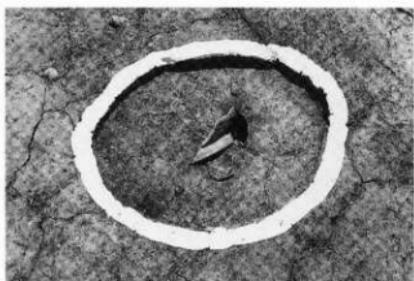
4面全景（南東から）



同上（西から）



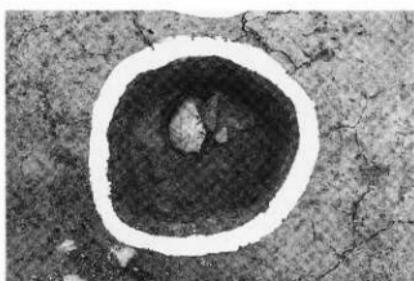
SK21（東から）



Pit12遺物出土状況（北から）



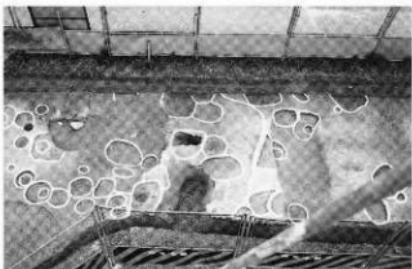
SK23（北西から）



Pit13遺物出土状況（北西から）



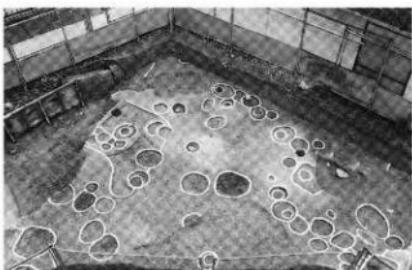
SB01・02 (北東から)



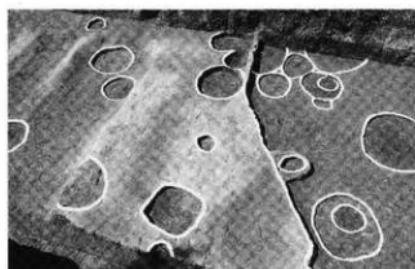
SB07・08 (東から)



SB04 (東から)



SB09・10・11 (北東から)



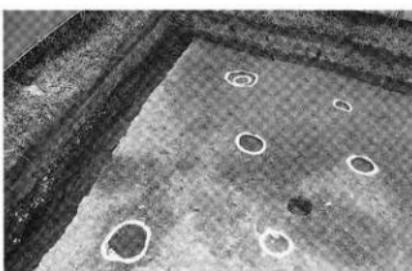
SB05 (北東から)



SB12 (東から)



SB06 (北東から)



SB13 (北から)



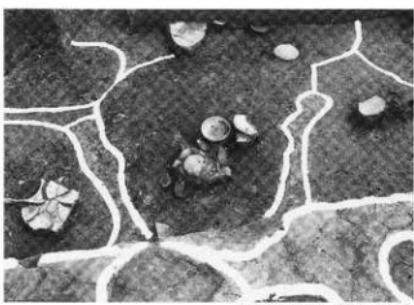
SH01（南西から）



SH01遺物出土状況（南東から）



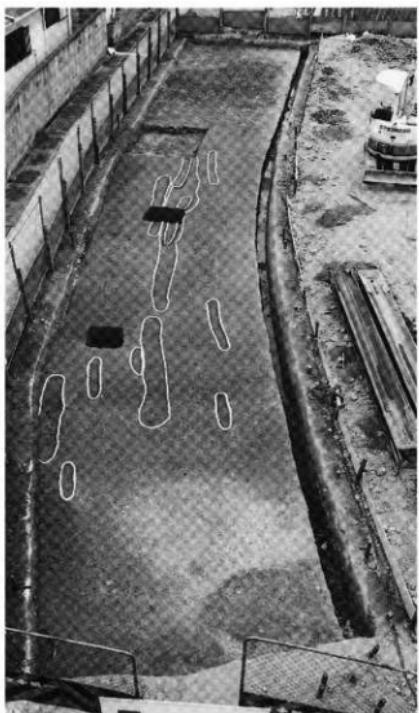
SH01カマド断面（南西から）



SH01カマド（北西から）



SH01遺物出土状況（南から）



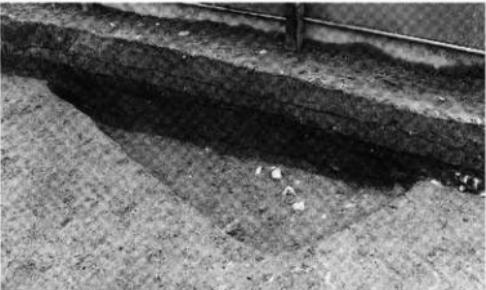
2面全景(東から)



3面全景(東から)

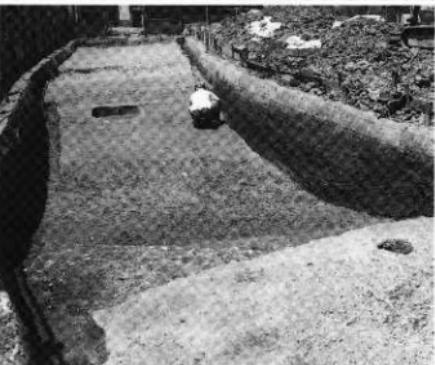


SX04(南から)



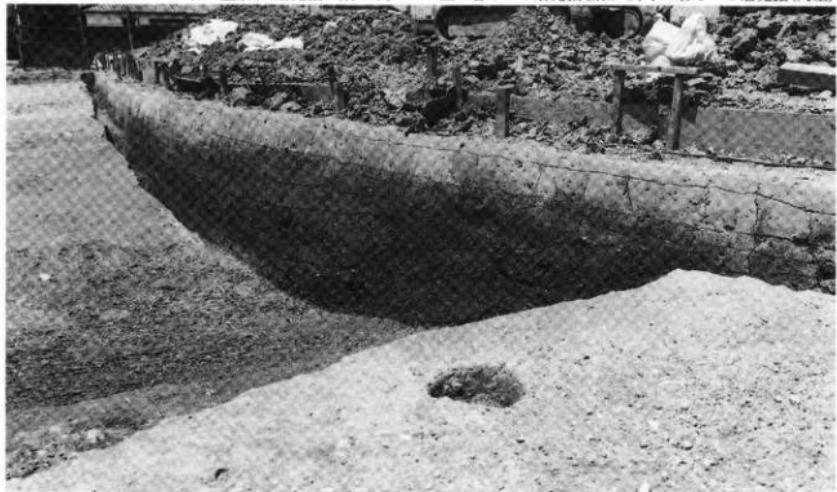
上：SH01(西から) 下：SX03(南から)





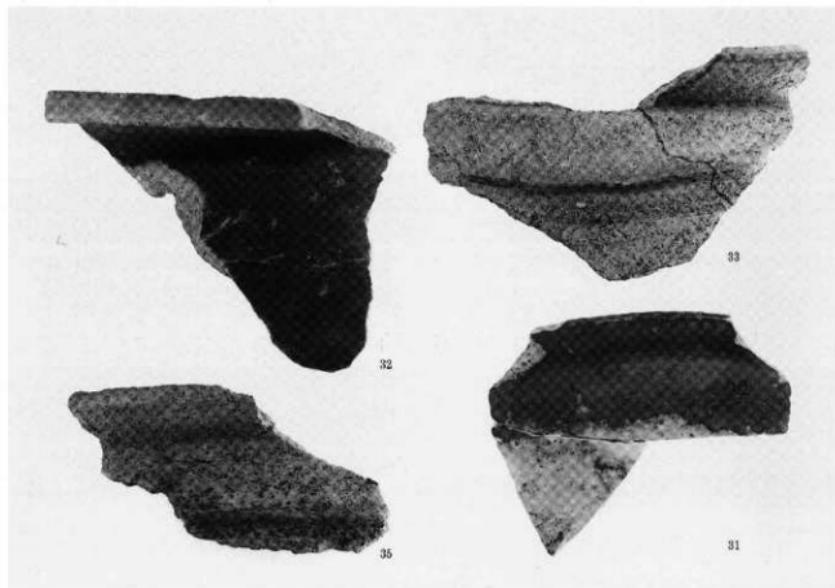
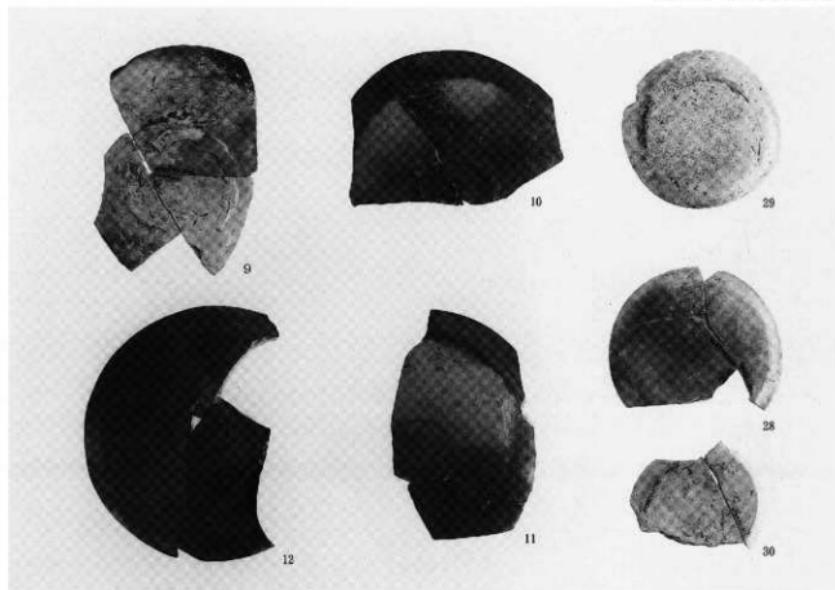
谷1全景(3層完掘・東から)

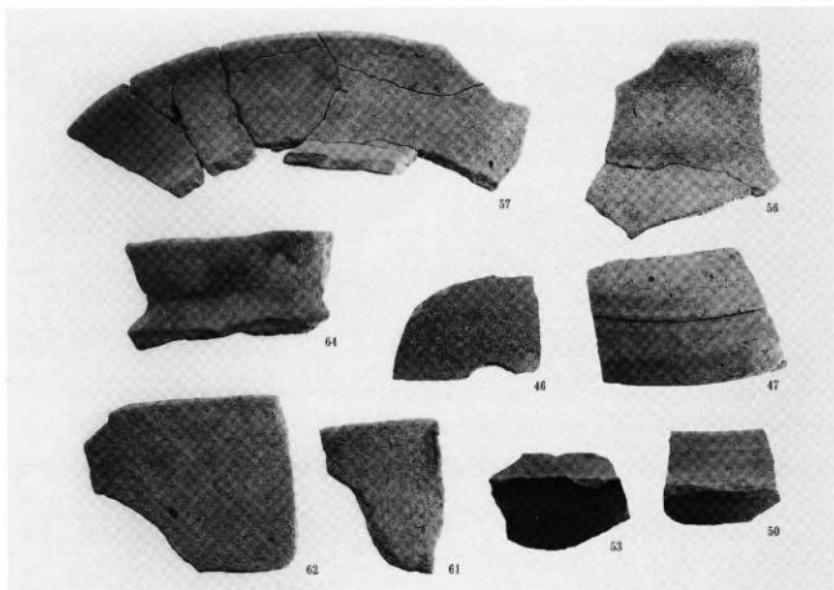
上：谷1・3層完掘(東から)下：谷1・5層完掘(同左)

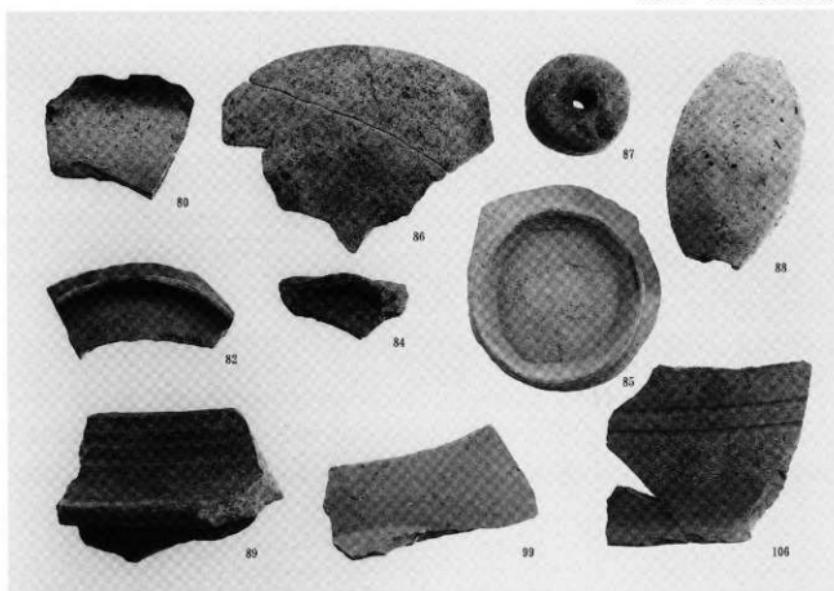


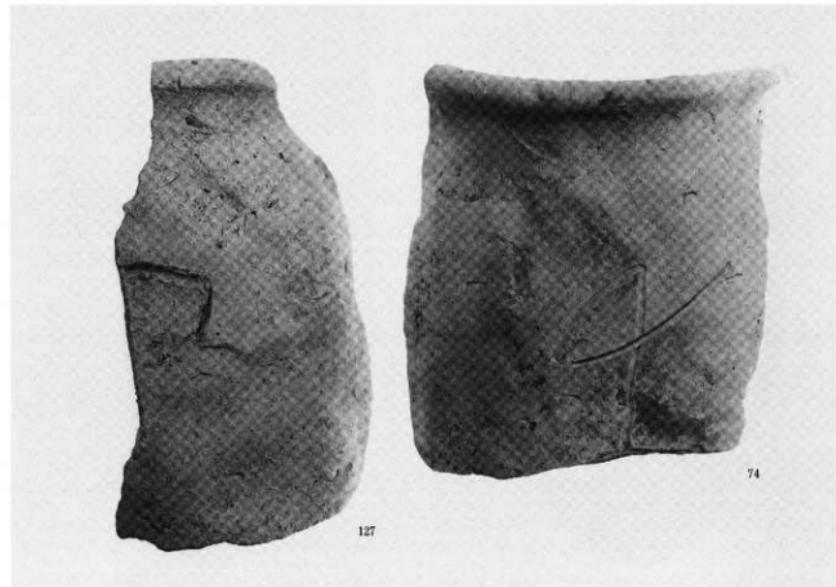
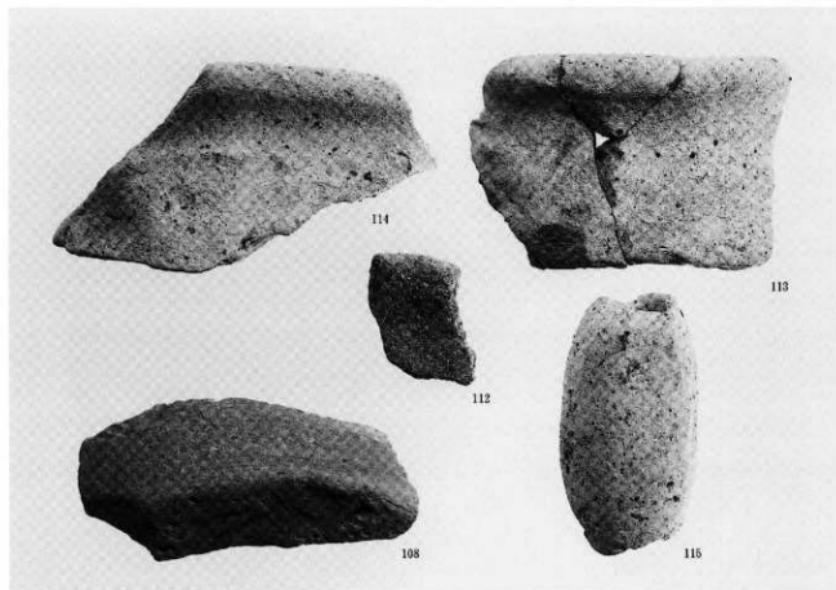
谷1断面(南から)

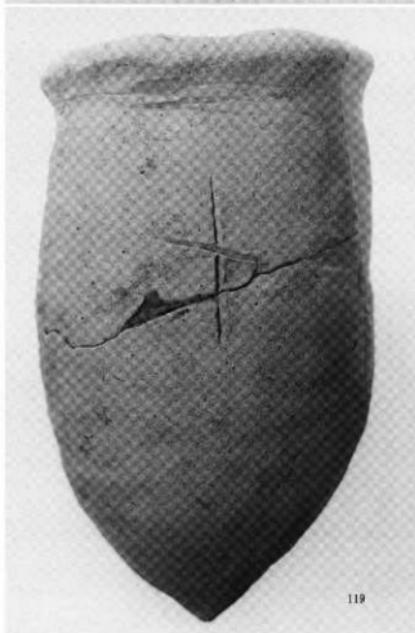
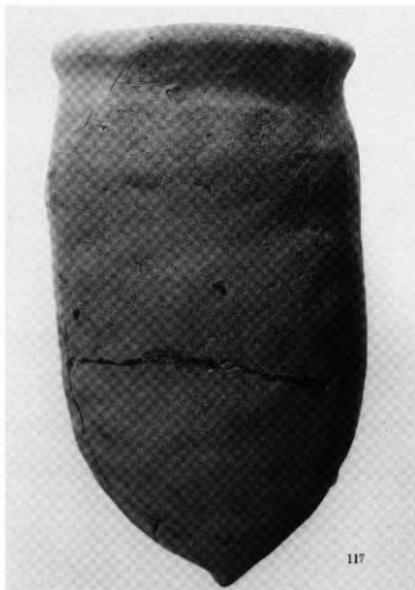
PL. 16 A区出土遺物



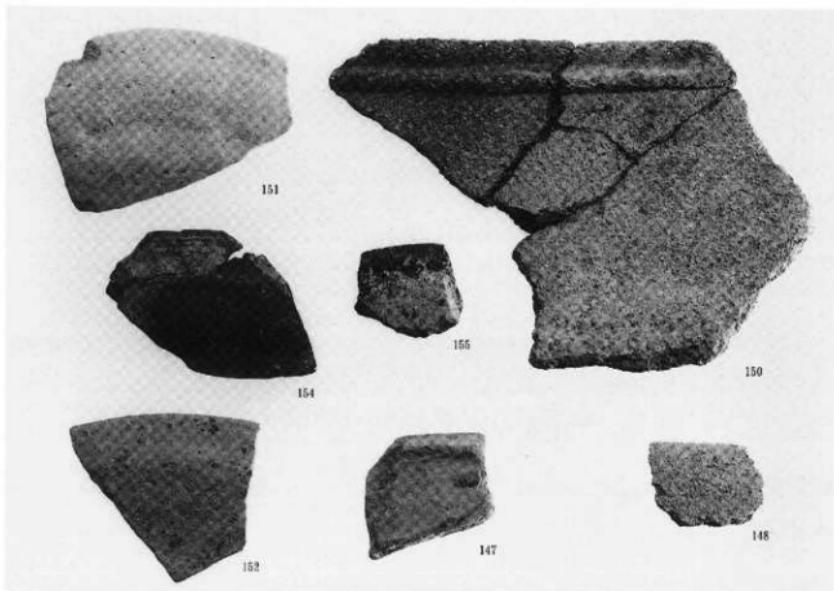
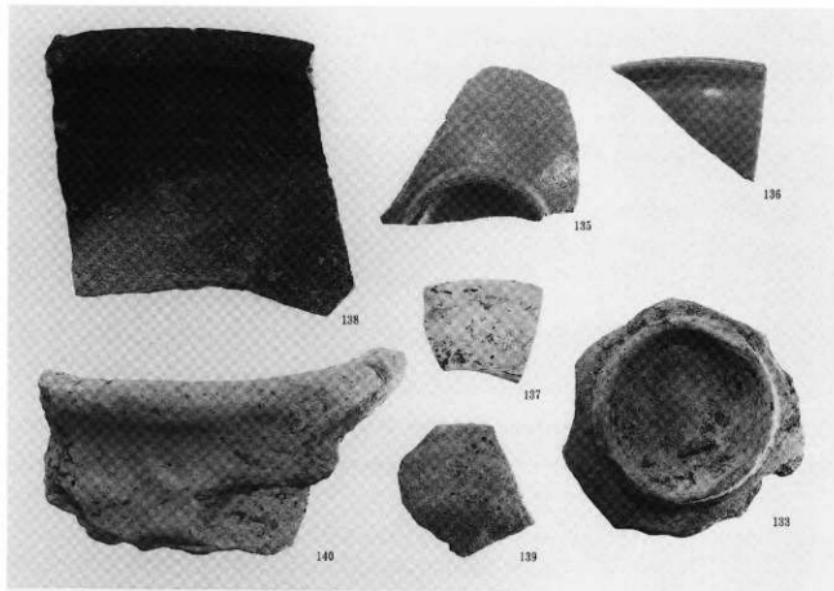


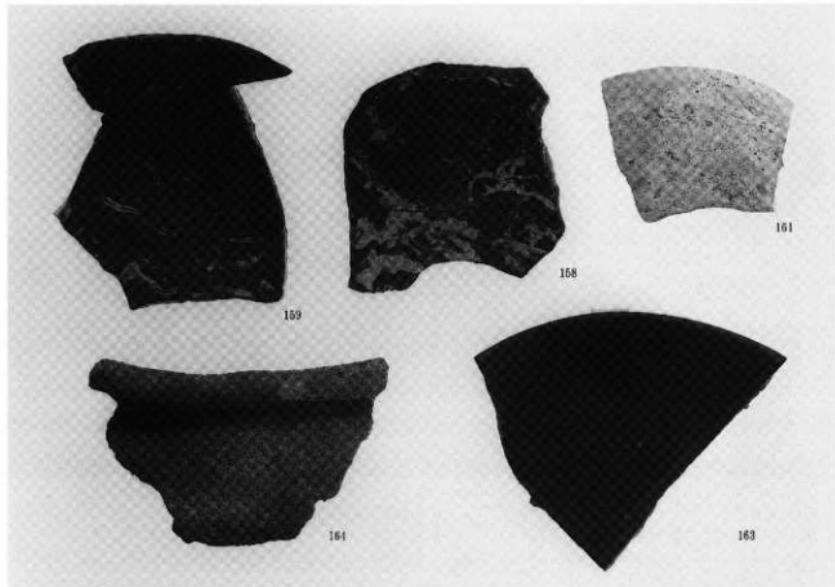


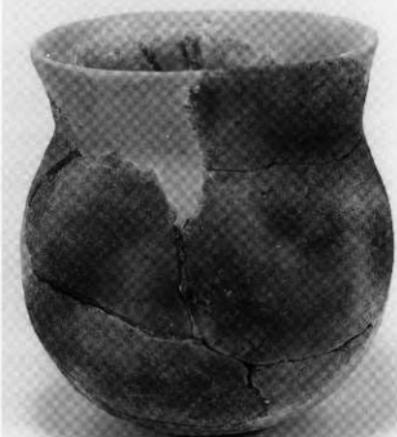
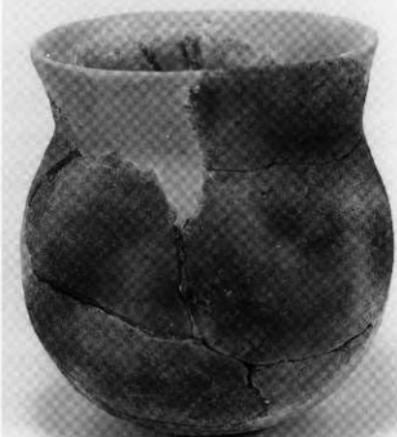
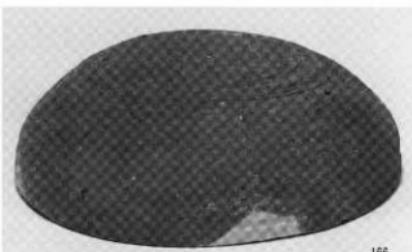




PL. 21 D区出土遺物④



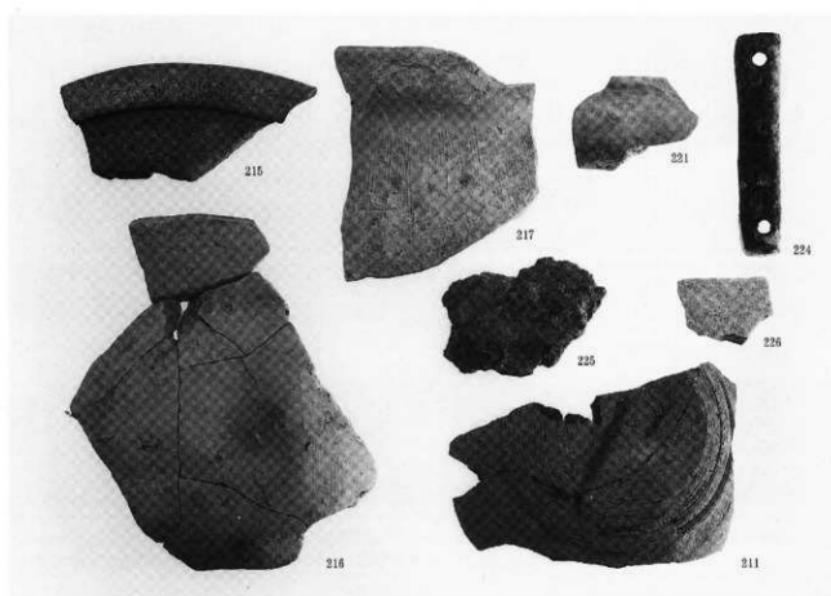
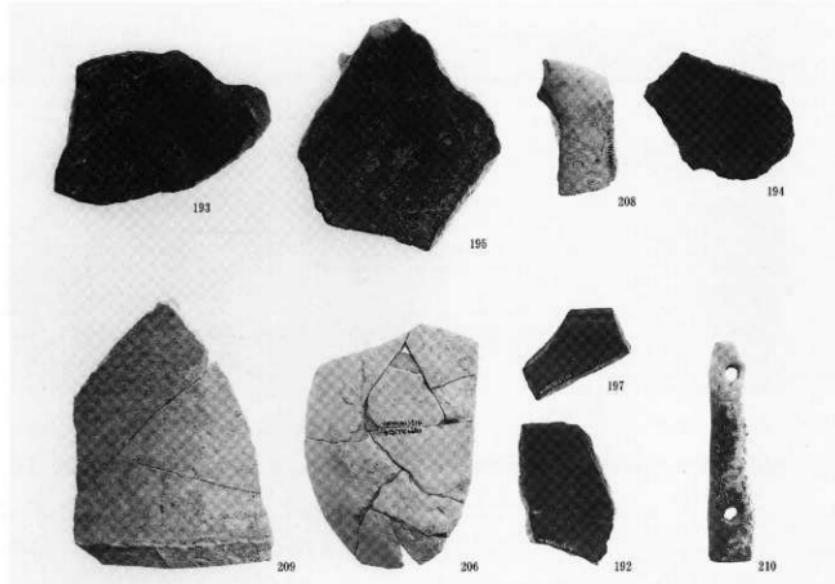


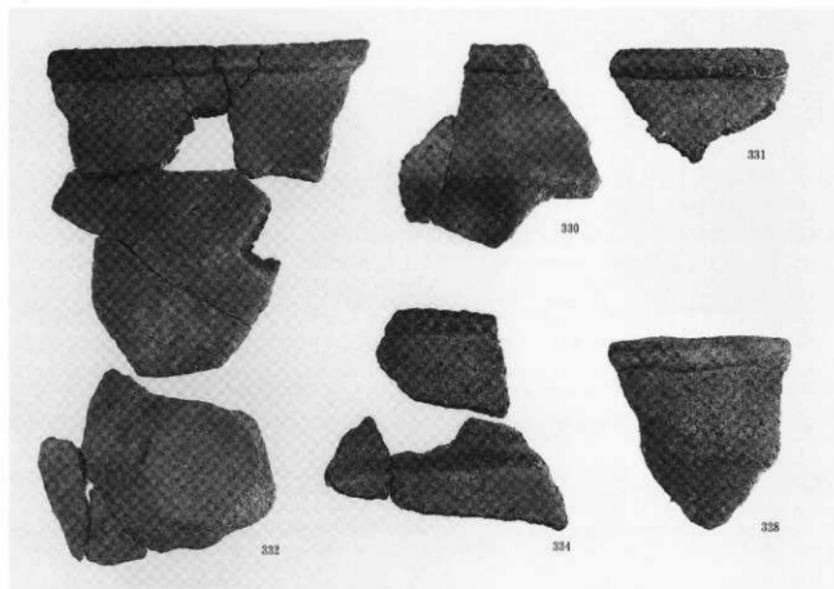
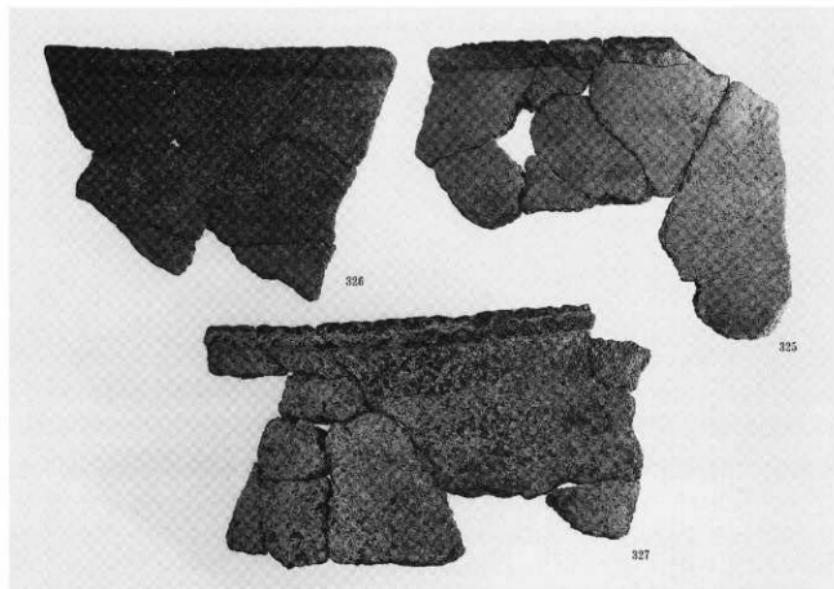


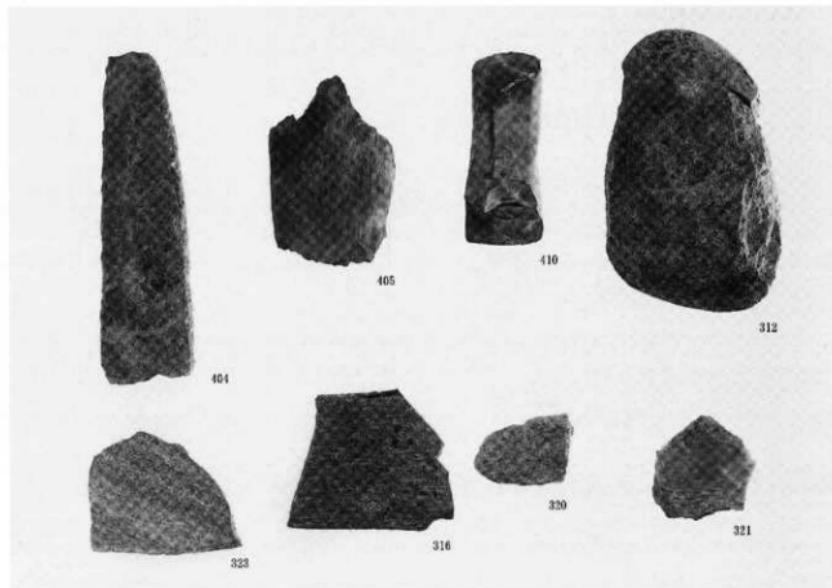
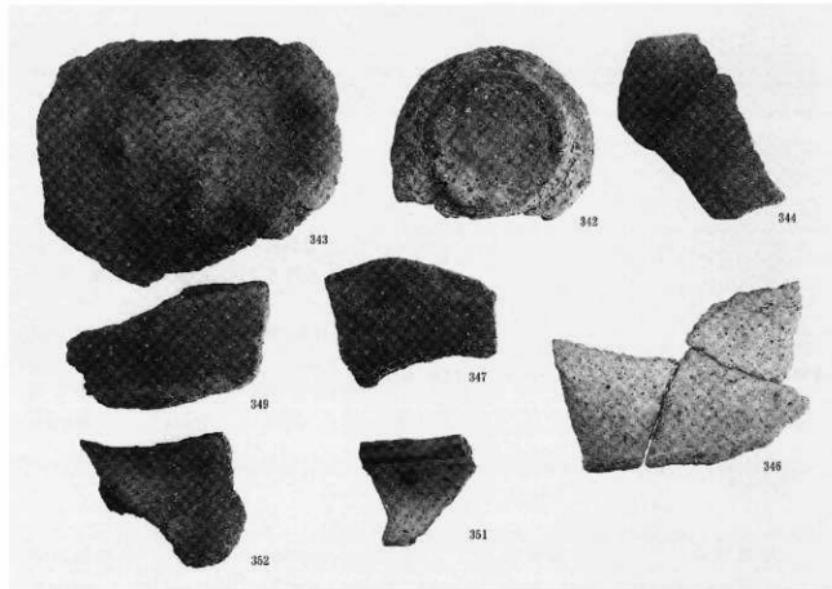
179

174

175







報告書抄録

ふりがな	おのさといせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	男里遺跡発掘調査報告書							
副書名	-							
卷次	-							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	岡一彦・河田泰之							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590-0592 大阪府泉南市樽井1-1-1 TEL. 0724-83-0001							
発行年月日	西暦 2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
		市町村名	遺跡					
男里遺跡	大阪府 泉南市 男里	27228	ON	34度 21分 30秒	135度 15分 40秒	A・B区 1999年1月5日～3月19日 C・D区 1999年12月20日～ E区 2000年3月24日～ F区 2000年7月3日～31日	A・B区 222.5m ² C・D区 400.9m ² F区 100m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
男里遺跡	集落・生産	縄文～近世	堅穴住居・ 擡立柱建物 土坑・谷など	縄文上器・須恵器・土師器・ 黒色土器・瓦器・婧壺など		縄文晩期の上器がまとまって出土。 占墳時代の堅穴住居3棟を検出。 多數の調查焼成土坑を確認。		

市道男里北線改修事業に伴う
男里遺跡発掘調査報告書
泉南市文化財調査報告書 第37集

2002年3月31日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会
泉南市樽井1丁目1番1号
Tel.0724-83-0001
印 刷 新栄企画印刷

